

殞せしむるなり。これ一色の正修行なり。正信心なり。正信心なり。正修行のとき。谿聲谿色。山色山聲。ともに八萬四千偈をしまさるなり。自己もし名利身心を不惜すれば。谿山また恁麼の不惜あり。たとひ谿聲山色八萬四千偈を現成せしめ。現成せしめさることは。夜來なりとも。谿山の谿山を舉似する盡力未便ならんは。たれかなんちを谿聲山色と見聞せん。

正法眼藏谿聲山色

爾時延應庚子結制後五日在觀音導利興聖霽林寺示衆

正法眼藏諸惡莫作

古佛曰。諸惡莫作。衆善奉行。自淨其意。是諸佛教。これ七佛祖宗の通戒として。前佛より後佛に正傳す。後佛は前佛に相嗣せり。たた七佛のみにあらず。是諸佛教なり。この道理を功夫參究すへし。いはゆる七佛の法道。かならず七佛の法道のことし。相傳相嗣。なほ箇裏の通消息なり。すてに。是諸佛教なり。百千萬佛の教行證なり。いまいふところの諸惡は。善性悪性無記性のなかに悪性あり。その性これ無生なり。善性無記性等も。また無生なり。無漏なり。實相なりといふとも。この三性の裏箇に。許多般の法あり。諸惡は。此界の惡と佗界の惡と同不同あり。先時と後時と同不同あり。天上の惡と人間の惡と同不同なり。いはんや佛道と世間と。道惡道善道無記。はるかに殊異あり。善惡は時なり。時は善惡にあらず。善惡は法なり。法は善惡にあらず。法等惡等なり。法等善等なり。しかあるに阿耨多羅三藐三菩提を學するに。聞教し修行し證果するに。深なり。遠なり。妙なり。この無上菩

なり福あり作る

提を或從知識してきき。或從經卷してきく。はしめは諸惡莫作ときこゆるなり。諸惡莫作ときこえさるは。佛正法にあらず。魔説なるへし。しるへし諸惡莫作ときこゆる。これ佛正法なり。この諸惡つくることなかれといふ凡夫のはしめて造作してかくのことくあらしむるにあらず。菩提の説となれるを聞教するに。しかのことくきこゆるなり。しかのことくきこゆるは。無上菩提のことにはにてある道著なり。すてに菩提語なり。ゆゑに語菩提なり。無上菩提の説著となりて聞著せらるるに轉せられて諸惡莫作とねかひ。諸惡莫作とおこなひもてゆく。諸惡すてにつくられずなり。ゆくとともに。修行力たちまちに現成す。この現成は。盡地盡界盡時盡法を量として。現成するなり。その量は莫作を量とせり。正當恁麼時の正當恁麼人は。諸惡つくりぬへきところに住し往來し。諸惡つくりぬへき縁に對し。諸惡つくる友にまはるにたりといへとも。諸惡さらにつくれざるなり。莫作の力量現成するゆゑに。諸惡みつから諸惡と道著

まて清
本にて
作る

せず。諸惡にさたまれる調度なきなり。一拈一放の道理あり。正當恁麼時。すなはち惡の人をかささる道理しられ。人の惡をやふらさる道理あきらめらる。みつからか心を擧して修行せしむ。身を擧して修行せしむるに。機先の八九成あり。腦後の莫作あり。なんちか身心を拈來して修行したれの身心を拈來して修行するに。四大五蘊にて修行するちから。蔕地に見成するに。四大五蘊の自己を染汙せず。今日の四大五蘊までも修行せられもてゆく。如今の修行なる四大五蘊のちから。上項の四大五蘊を修行ならしむるなり。山河大地日月星辰までも修行せしむるに。山河大地日月星辰かへりてわれらを修行せしむるなり。一時の眼睛にあらず。諸時の活眼なり。眼睛の活眼にてある諸時なるかゆゑに。諸佛諸祖をして修行せしむ。聞教せしむ。證果せしむ。諸佛諸祖。かつて教行證をして染汙せしむることなきかゆゑに。教行證いまた諸佛諸祖を聖礎することなし。このゆゑに佛祖をして修行せしむるに。過現當の機先機後に廻避す

る諸佛諸祖とし。衆生作佛作祖の時節。ひこる所有の佛祖を罣礙せずといへとも作佛祖する道理を十二時中の行住坐臥につらつら思量すへきなり。作佛祖するに衆生をやふらす。うははす。うしなふにあらず。しかあれとも脱落しきたれるなり。善惡因果をして修行せしむ。いはゆる因果を動するにあらず。造作するにあらず。因果あるときははわれらをして修行せしむるなり。この因果の本來面目すてに分明なる。これ莫作なり。無生なり。無常なり。不味なり。不落なり。脱落なるかゆゑに。かくのことく參究するに。諸惡は一條にかつて莫作なりけると現成するなり。この現成に助發せられて。諸惡莫作なりと見得徹し坐得斷するなり。正當恁麼のとき。初中後諸惡莫作にて現成するに。諸惡は因縁生にあらず。たた莫作なるのみなり。諸惡は因縁滅にあらず。たた莫作なるのみなり。諸惡もし等なれば。諸法も等なり。諸惡は因縁生としりて。この因縁のおのれと莫作なるをみさるは。あはれむへきともからなり。佛種從縁起なれば。縁從佛

種起なり。諸惡なきにあらず。莫作なるのみなり。諸惡あるにあらず。莫作なるのみなり。諸惡は空にあらず。莫作なり。諸惡は色にあらず。莫作なり。諸惡は莫作にあらず。莫作なるのみなり。たとへは春松は無にあらず。有にあらず。つくらざるなり。秋菊は有にあらず。無にあらず。つくらざるなり。諸佛は有にあらず。無にあらず。莫作なり。露柱燈籠。拂子。拄杖等あるにあらず。なきにあらず。莫作なり。自己は有にあらず。無にあらず。莫作なり。恁麼の參學は。見成せる公案なり。公案の見成なり。主より功夫し。賓より功夫す。すてに恁麼なるにつくられさりけるをつくりけるとくやしむものかれす。さらにこれ莫作の功夫力なり。しかあれは莫作にあらず。つくらましと趣向するは。あゆみをきたにして。越にいたらんとまたんかことし。諸惡莫作は。井の驢をみるのみにあらず。井の井をみるなり。驢の驢をみるなり。人の人をみるなり。山の山をみるなり。説箇應底道理あるゆゑに。諸惡莫作なり。佛眞法身。猶若虚空。應物現形。如水中月なり。應物の莫作

なるゆゑに。現形の莫作なり。猶若虚空。左拍右拍なり。如水中月被水
 月礙なり。これらの莫作。さらにうたかふへからざる現成なり。衆善
 奉行。この衆善は。三性のなかの善性なり。善性のなかに衆善ありと
 いへとも。さきより現成して行人をまつ衆善。いまたあらず。作善の
 正當恁麼時。きたらざる衆善なし。萬善は無象なりといへとも。作善
 のところに計會すること。磁鐵よりも速疾なり。そのちから毘嵐風
 よりもつよきなり。大地山河世界國土業増上力なほ善の計會を罣
 礙することあたはざるなり。しかあるに世界によりて善を認する
 ことおなしからざる道理。おなし認得を善とせるかゆゑに。如三世
 諸佛說法之儀式。おなしといふは。在世說法たた時なり。壽命身量ま
 たときに一任しきたれるかゆゑに。說無分別法なり。しかあればす
 なはち信行の機の善と。法行の機の善とはるかにことなり。別法に
 あらざるかことし。たとへは聲聞の持戒は菩薩の破戒なるかこと
 し。衆善これ因縁生。因縁滅にあらず。衆善は諸法なりといふとも。諸

法は衆善にあらず。因縁と生滅と衆善と。おなしく頭正あれば尾正
 あり。衆善は奉行なりといへとも。自にあらず。自にしられず。他にあ
 らず。他にしられず。自他の知見は。知に自あり。他あり。見の自あり。他
 あるかゆゑに。各各の活眼睛。それ日にもあり。月にもあり。これ奉行
 なり。奉行の正當恁麼時に。現成の公案ありとも。公案の始成にあ
 ず。公案の久住にあらず。さらにこれを本行といはんや。作善の奉行
 なるといへとも。測度すへきにはあらず。いまの奉行。これ活
 眼睛なりといへとも。測度にはあらず。法を測度せんために現成せ
 るにあらず。活眼睛の測度は。餘法の測度とおなしかるへからず。衆
 善有無色空等にあらず。ただ奉行なるのみなり。いつれのところの
 現成。いつれのとときの現成も。かならず奉行なり。この奉行にかな
 らず。衆善の現成あり。奉行の現成。これ公案なりといふとも。生滅にあ
 らず。因縁にあらず。奉行の入住出等も。またかくのことし。衆善のな
 かの一善。すてに奉行するところに。盡法全身眞實地等。ともに奉行

せらるるなり。この善の因果。かなしく奉行の現成公案なり。因はさ
 き果はのちなるにあらされとも。因圓滿し果圓滿す。因等法。果等
 法等なり。因にまたれて果感すといへとも。前後にあらす。前後等の
 道あるかゆゑに。自淨其意といふは。莫作の自なり。莫作の淨なり。自
 の其なり。自の意なり。莫作の其なり。莫作の意なり。奉行の意なり。奉
 行の淨なり。奉行の其なり。奉行の自なり。かるかゆゑに。是諸佛教と
 いふなり。いはゆる諸佛あるひは自在天のことし。自在天に同不同
 ありといへとも。一切の自在天は諸佛にあらず。あるひは轉輪王の
 ことくなり。しかあれとも。一切の轉輪聖王の諸佛なるにあらず。か
 くのことくの道理。功夫參學すへし。諸佛はいかなるへしとも。學せ
 す。いたつらに苦辛するに相似せりといへとも。さらに受苦の衆生
 にして行佛道にあらざるなり。莫作およひ奉行は。驢事未去。馬事到
 來なり。

唐の白居易は佛光如滿禪師の俗弟子なり。江西大寂禪師の孫子な

あり福
 本なり
 に作る

り。杭州の刺史にてありしとき。烏窠の道林禪師に參しき。ちなみに
 居易とふ。如何是佛法大意。道林いはく。諸惡莫作。衆善奉行。居易いは
 く。もし恁麼にてあらんは。三歳の孩兒も道得ならん。道林いはく。三
 歳孩兒。縱道得。八十老翁。行不得なり。恁麼いふに。居易すなはち拜謝
 してさる。まことに居易は白將軍かのちなりといへとも。奇代の
 詩仙なり。人つたふらくは二十四生の文學なり。あるひは文殊の號
 あり。あるひは彌勒の號あり。風情のきこえさるなし。筆海の朝せさ
 るなかるへし。しかあれとも。佛道には初心なり。晩進なり。いはんや
 この諸惡莫作。衆善奉行は。その宗旨。ゆめにもいまたみさるかこと
 し。居易おもはくは。道林ひとへに。有心の趣向を認して。諸惡をつく
 ることなかれ。衆善奉行すへしといふならん。とおもひて。佛道に干
 古萬古の諸惡莫作。衆善奉行の。亙古亙今なる道理。しらすきかすし
 て。佛法のところをふます。佛法のちからなきかゆゑに。しかのこと
 く。いふなり。たとひ造作の諸惡をいましめ。たとひ造作の衆善をす

すむとも現成の莫作なるへし。おほよそ佛法は知識のほとりにしてはしめてきくと。究竟の果上もひとしきなり。これを頭正尾正といひ。妙因妙果といひ。佛因佛果といふ。佛道の因果は異熟等流等の論にあらされは。佛因にあらすは。佛果を感得すへからす。道林この道理を道取するゆゑに。佛法あるなり。諸悪たとひいくかさなりの盡界に彌綸し。いくかさなりの盡法を吞却せりとも。これ莫作の解脱なり。衆善すてに。初中後善にて。あれは。奉行の性相體力等を如是せるなり。居易かつてこの蹤跡をふまさるによりて。三歳の孩兒も道得ならんとはいふなり。道得をまさしく道得するちからなくして。かくのことくいふなり。あはれむへし。居易なんち。道甚麼なるそ。佛風いまたきかさるかゆゑに。三歳の孩兒をしれりやいなや。孩兒の才生せる道理をしれりやいなや。もし三歳の孩兒をしらんものは。三世諸佛をもしるへし。いまた三世諸佛をしらさんものいかに。か三歳の孩兒をしらん。對面せるはしれりとおもふことなかれ。

らん
福
本
作
る
に

對面せされはしらさるとおもふことなかれ。一塵をしれるものは。盡界をしり。一法を通するものは。萬法を通す。萬法に通せざるものは。一法に通せず。通を學せるもの通徹のとき。萬法をもみる一法をもみるかゆゑに。一塵を學するものかれす。盡界を學するなり。三歳の孩兒は佛法をいふへからすとおもひ。三歳の孩兒のいはんことは。容易ならんとおもふは。至愚なり。そのゆゑは。生をあきらめ死をあきらむるは。佛家一大事の因縁なり。古徳いはく。なんちかはしめて。生下せりしとき。すなはち。師子吼の分あり。獅子吼の分とは。如來轉法輪の功德なり。轉法輪なり。又古徳いはく。生死去來眞實人體なり。しかあれは眞實體をあきらめ。師子吼の功德あらんまことに。一大事なるへし。たやすかるへからす。かるかゆゑに。三歳孩兒の因縁行履あきらめんとするに。さらに大因縁なり。それ三世諸佛の行履因縁と。同不同あるかゆゑに。居易おろかにして。三歳の孩兒の道得をかつてきかされは。あるらんとたにも。疑著せずして。恁麼道取

得の下一	本の一作	福を本に	もとの字	有りの字	いふ一	本に作	ひにい	るに作
------	------	------	------	------	-----	-----	-----	-----

するなり。道林の道聲雷よりも顯赫なるをきかず。道不得をいはんとして。は三歳孩兒還道得といふ。これ孩兒の師子吼をきかず。禪師の轉法輪をも蹉過するなり。禪師あはれみをやむるにあたはすかさねていふしなり。三歳の孩兒はたとひ道得なりとも。八十の老翁は行不得ならんと。いふところは三歳の孩兒に道得のことはあり。これをよくよく參究すへし。八十の老翁に行不得の道あり。よくよく功夫すへし。孩兒の道得はなんちに一任す。しかあれとも孩兒に一任せす。老翁の行不得はなんちに一任す。しかあれとも老翁に一任せすといひしなり。佛法はかくのことく辨取し説取し宗取するを道理とせり。

正法眼藏諸惡莫作

延應庚子月夕在興聖靈林寺示衆

正法眼藏有時

古佛言。有時高高峰頂立。有時深深海底行。有時三頭八臂。有時丈六八尺。有時拄杖拂子。有時露柱燈籠。有時張三李四。有時大地虛空。いはゆる有時は。時すてにこれ有なり。有はみな時なり。丈六金身。これ時なり。時なるかゆへに。時の莊嚴光明あり。いまの十二時に習學すへし。三頭八臂。これ時なり。時なるかゆへに。いまの十二時に。一如なるへし。十二時の長遠短促。いまた度量せずといへとも。これを十二時といふ。去來の方迹あきらかなるによりて。人これを疑著せず。疑著せされとも。しれるにあらす。衆生もとより。しらざる毎物毎事を疑著すること。一定せざるかゆへに。疑著する前程。かならずしも。いまの疑著に符合することなし。たた疑著しはらく時なるのみなり。われを排列しをきて。盡界とせり。この盡界の頭頭物物を時時なりと觀見すへし。物物の相礙せざるは。時時の相礙せざるかことし。このゆへに。同時發心あり。同心發時あり。をよひ修行成道も。かくのこと

かくの
ことこの
影室に
作るに

し。われを排列して。われこれを見るなり。自己の時なる道理。それか
くのことし。恁麼の道理なるゆへに。盡地に萬象百艸あり。一艸一象
おのおの盡地にあることを參學すへし。かくのこ・と・く・の・往・來・は・修
行の發足なり。到恁麼の田地のとき。すなはち一艸一象なり。會象不
會象なり。會艸不會艸なり。正常恁麼時のみなるかゆへに。有時みな
盡時なり。有艸有象ともに時なり。時時の時に盡有盡界あるなり。し
はらくいまの時にもれたる。盡有盡界ありやなしやと觀想すへし。
しかあるを佛法をならはさる。凡夫の時節に。あらゆる見解は。有時
のことはをきくにおもはく。あるときは三頭八臂となれりき。ある
ときは丈六八尺となれりき。たとへは河をすき山をすきしかこと
くなり。いまはその山河たとひあるらめとも。われすききたりて。
いまは玉殿朱樓に處せり。山河とわれと天と地となりとおもふ。し
かあれとも。道理この一條のみにあらず。いはゆる山をのほり河を
わたりし時にわれありき。われに時あるへし。われすでにあり。時さ

はに影室
るはに作
るへに清本
るへに作

るへからず。時もし去來の相にあらずは。上山の時は有時の而今な
り。時もし去來の相を保任せは。われに有時の而今ある。これ有時な
り。かの上山渡河の時。この玉殿朱樓の時を吞却せさらんや。吐却せ
さらんや。三頭八臂は。きのふの時なり。丈六八尺は。けふの時なり。し
かあれとも。その昨今の道理。たたこれ山のなかに直入して。千峰萬
峰をみわたす時節なり。すきぬるにあらず。三頭八臂も。すなはちわ
か有時にて一經す。彼方にあるにたれとも。而今なり。丈六八尺も。
すなはちわか有時にて一經す。彼處にあるにたれとも。而今なり。
しかあれは。松も時なり。竹も時なり。時は飛去するとのみ解會すへ
からず。飛去は時の能とのみは學すへからず。時もし飛去に一任せ
は。間隙ありぬへし。有時の道を経聞せさるは。すきぬるとのみ學す
るによりてなり。要をとりていはは。盡界にあらゆる盡有は。つらな
りなから時時なり。有時なるによりて。吾有時なり。有時に。經歷の功
徳あり。いはゆる今日より明日に。經歷す。今日より昨日に。經歷す。昨

日より今日に經歷す。今日より今日に經歷す。明日より明日に經歷す。經歷はそれ時の功德なるかゆへに。古今の時かさなれるにあらす。ならびつもれるにあらされとも。青原も時なり。黄檗も時なり。江西も石頭も時なり。自佗すてに時なるかゆへに。修證は諸時なり。入泥入水をなしく時なり。いまの凡夫の見をよひ見の因縁。これ凡夫のみるところなりといへとも。凡夫の法にあらす。法しはらく凡夫を因縁せるのみなり。この時この有は。法にあらすと學するかゆへに。丈六金身は。われにあらすと認するなり。われを丈六金身にあらすと。のかれんとする。またすなはち有時の片片なり。未證據者の看看なり。いま世界に排列せる。むまひつじをあらしむるも。住法位の恁麼なる昇降上下なり。ねずみも時なり。とらも時なり。生も時なり。佛も時なり。この時。三頭八臂にて。盡界を證し。丈六金身にて。盡界を證す。それ盡界をもて。盡界を界盡するを。究盡するとはいふなり。丈六金身をもて。丈六金身するを。發心修行菩提涅槃と現成する。すな

はち有なり。時なり。盡時を盡有と究盡するのみ。さらに剩法なし。剩法これ剩法なるかゆへに。たとひ半究盡の有時も。半有時の究盡なり。たとひ蹉過すとみゆる形段も有なり。さらにかれにまかすれば。蹉過の現成する前後なから。有時の住位なり。住法位の活潑地なる。これ有時なり。無と動著すへからす。有と強爲すへからす。時は一向にすくるとのみ計功して。未到と解會せず。解會は時なりといへとも。佗にひかるる縁なし。去來と認して。住位の有時と見徹せる皮袋なし。いはんや透闢の時あらんや。たとひ住位を認すとも。たれか既得恁麼の保任を道得せん。たとひ恁麼と道得せることひさしきも。いまた面目現前を摸擦せさるなし。凡夫の有時なるに一任すれば。菩提涅槃も。わつかに去來の相のみなる有時なり。おほよそ羅籠とどまらず。有時現成なり。いま右界に現成し。左方に現成する。天王天衆。いまもわが盡力する有時なり。その餘外にある水陸の衆有時。これわかいま盡力して現成するなり。冥陽に有時なる諸類諸頭。み

千の影室更
に萬字
あり

影室宗
を迷す

なわか盡力現成なり。盡力經歷なり。わかいま盡力經歷にあらされ
は。一法一物も現成することなし。經歷することなしと參學すへし。
經歷といふは。風雨の東西するがごとく學しきたるへからず。盡界
は不動轉なるにあらず。不進退なるにあらず。經歷なり。經歷はたと
へは春のことでし。春に許多般の様子あり。これを經歷といふ。外物な
きに經歷すると參學すへし。たとへは春の經歷はかならず春を經
歷するなり。經歷は春にあらされとも。春の經歷なるかゆへに。經歷
いま春の時に成道せり。審細に參來參去すへし。經歷をいふに。境は
外頭にして。能經歷の法は東にむきて百千世界をゆきすきて。百千
劫をふるとおもふは。佛道の參學これのみを。專一にせざるなり。
藥山弘道大師。ちなみに無際大師の指示によりて。江西大寂禪師に
參問す。三乘十二分教。某甲ほほその宗旨をあきらむ。如何是。祖師西
來意。かくのこくとふに。大寂禪師いはく。有時教伊揚眉瞬目。有時
不教伊揚眉瞬目。有時教伊揚眉瞬目者。是。有時教伊揚眉瞬目者。不
是。

しつと影室更
あり
通本清
あり
本なる
のみに
かあり
一本宗
の下の
とあり
あり
清本海
もの一
句を迷
す

藥山ききて大悟し。大寂にまふす。某甲かつて石頭にありし。蚊子の
鐵牛にのほれるかことし。大寂の道取するところ。餘者とおなし
からず。眉目は山海なるへし。山海は眉目なるゆへに。その教伊揚は
山をみるへし。その教伊瞬は海を宗すへし。是は伊に慣習せり。伊は
教に誘引せらる。不足は不教伊にあらす。不教伊は不足にあらす。こ
れらともに有時なり。山も時なり。海も時なり。時にあらされは山海
あるへからず。山海の而今に時あらすとすへからず。時もし壞すれ
は山海も壞す。時もし不壞なれば。山海も不壞なり。この道理に明星
出現す。如來出現す。眼睛出現す。拈華出現す。これ時なり。時にあらさ
れは不恁麼なり。

葉縣の歸省禪師は。臨濟の法孫なり。首山の嫡嗣なり。あるとき大衆
にしめしていはく。有時意到句不到。有時句到意不到。有時意句兩俱
到。有時意句俱不到。意句ともに有時なり。到不到ともに有時なり。
到時未了なりといへとも。不到時來なり。意は驢なり。句は馬なり。馬

影室未
來の來
を迷す

清本寫
に半有
以下十
以字を
迷す
影室錯
の更
にの錯
字を利

を句とし。驢を意とせり。到それ來にあらす。不到これ未來にあらす。有時かくのことくなり。到は到に罣礙せられて。不到に罣礙せられす。不到は不到に罣礙せられて。到に罣礙せられす。意は意をさへ意をみる。句は句をさへ句をみる。礙は礙をさへ礙をみる。礙は礙を礙するなり。これ時なり。礙は佗法に使得せらるといへとも。佗法を礙する礙いまたあらざるなり。我逢人なり。人逢人なり。我逢我なり。出逢出なり。これらもし時をえざるには恁麼ならざるなり。また意は現成公案の時なり。句は向上關候の時なり。到は脱體の時なり。不到は即此離此の時なり。かくのことく辨旨すへし。有時すへし。向來の尊宿ともに恁麼いふとも。さらに道取すへきところなからんや。いふへし意句半到也。有時。意句半不到也。有時。かくのことくの參究あるへきなり。教伊揚眉瞬目也。半有時。教伊揚眉瞬目也。錯有時。不教伊揚眉瞬目也。半有時。不教伊揚眉瞬目也。錯有時。恁麼のことく參來參去。參到參不到する有時の時なり。

正法眼藏有時

仁治元年庚子開冬日書于興聖審林寺
寬元癸卯夏安居書寫之
懷奘

正法眼藏袈裟功德

佛佛祖祖。正傳の衣法。まさしく震旦國に正傳することは。嵩嶽の高祖のみなり。高祖は釋迦牟尼佛より第二十八代の祖なり。西天二十八傳。嫡嫡あひつたはれり。二十八祖したしく震旦にいりて初祖たり。震旦國人五傳して曹谿にいたりて三十三代の祖なり。これを六祖と稱す。第三十三代の祖大鑑禪師。この衣法を黃梅山にして夜半に正傳し。一生護持します。いまなほ曹谿山霽林寺に安置せり。諸代の帝王。あひつきて内裏に奉請し。供養禮拜す。神物護持せるものなり。唐朝中宗。肅宗。代宗。しきりに歸内供養しき奉請のとき。奉送のとき。ことさら敕使をつかはし。みことのりをたまふ。代宗皇帝あるとき。佛衣を曹谿山におくりたてまつる。みことのりにいはく。今遣鎮國大將軍劉崇景頂戴而送。朕爲之國寤。卿可於本寺如法安置。專令僧衆親承宗旨。嚴加守護。勿令遺墜。まことに無量恒河沙の三千大千世界を統領せんよりも。佛衣現在の小國に王としてこれを見

聞供養したてまつらんは。生死のなかの善生最勝の生なるへし。佛化のおよふところ。三千界いづれのところか。袈裟なからん。しかありといへとも。嫡嫡而授して。佛袈裟を正傳せるは。たはひとり嵩嶽の曩祖のみなり。傍出は佛袈裟をさつけられず。二十七祖の傍出。跋陀婆羅菩薩の傳。まさに肇法師におよふといへとも。佛袈裟の正傳なし。震旦の四祖大師。また牛頭山の法融禪師をわたすといへとも。佛袈裟を正傳せず。しかあれば。すなはち正嫡の相承なしといへとも。如來の正法。その功德むなしからず。千古萬古みな利益廣大なり。正嫡相承せらんは。相承なきとひとしかるへからず。しかあれば。すなはち人天もし袈裟を受持せんは。佛祖相傳の正傳を傳受すへし。印度。震旦。正法像法のときは。在家なほ袈裟を受持す。いま遠方邊土の澆季には。剃除鬚髮して佛弟子と稱する。袈裟を受持せず。いまた受持すへきと信せず。しらす。あきらめず。かなしむへし。いはんや體色量をしらんや。いはんや著川の法をしらんや。袈裟はふるくより

解脱服と稱す。業障。煩惱障。報障等みな解脱すへきなり。龍もし一縷をうれば。三熱をまぬかる。牛もし一角にふるれば。その罪おのつかの功德なりといふこと。まことにわれら邊地にうまれて末法にあふ。うらむへしといへとも。佛佛嫡嫡相承の衣法にあふたてまつる。いくそはくのものよるこひとかせん。いつれの家門かわか正傳のこと。敬供養せさらん。たとひ一日に無量恒河沙の身命をすてても。供養したてまつるへし。なほ生生世世の値遇頂戴。供養恭敬を發願すへしかたしといへとも。宿善のあひもよほすところ。山海に擁塞せられず。邊鄙の愚蒙きはるることなし。この正法にあふたてまつり。あくまで日夜に修習す。この袈裟を受持したてまつり。常恒に頂戴護持す。たとひ一佛二佛のみもとにして。功德を修せるのみならんや。

清本た
ふの下に
無し

すてに恒河沙等の諸佛のみもとにして。もろもろの功德を修習せ
るなるへし。たとひ自己なりといふとも。たふとふへし。隨喜すへし。
祖師傳法の深恩。ねんころに報謝すへし。畜類なほ恩を報す。人類い
かてか恩をしらさらん。もし恩をしらすは。畜類よりも恩なるへし。
この佛衣佛法の功德。その傳佛正法の祖師にあらされは。餘輩いま
たあきらめすしらす。諸佛のあとを欣求すへくは。まさにこれを欣
樂すへし。たとひ百千萬代ののちも。この正傳を正傳とすへし。これ
佛法なるへし。證驗まさにあたらならん。水を乳に在るに相似す
へからず。皇太子の帝位に即位するかことし。かの合水の乳なりと
も。乳をもちぬるときは。この乳のほかにさらに乳なからんには。こ
れをもちぬるへし。たとひ水を合せすとも。あふらもちぬるへか
らす。うるしをもちぬるへからず。さけをもちぬるへからず。この正
傳もまたかくのことくならん。たとひ凡師の庸流なりとも。正傳あ
らんは。用乳のよろしきときなるへし。いはんや。佛佛祖祖の正傳は。

皇太子の即位のことくなるなり俗なほいはく先王の法服にあらされは服せずと。佛子いつくんそ佛衣にあらさらんを著せん。後漢の孝明皇帝永平十年よりのち西天東地に往還する出家在家くひすをつきてたえずといへとも。西天にして佛佛祖正傳の祖師にあふといはす。如來より而授相承の系譜なし。たた經論師にしたかふて梵本の經教を傳來せるなり。佛法正嫡の祖師にあふといはす。佛袈裟相傳の祖師ありとかたらず。あきらかにしりぬ佛法の闡奥にいらさりけりといふことを。かくのときのみと佛祖正傳のむねあきらめざるなり。釋迦牟尼如來正法眼藏無上菩提を摩訶迦葉に付授しましたすに。迦葉佛正傳の袈裟ともに傳授しましたす。嫡嫡相承して曹谿山大鑑禪師にいたる。三十三代なり。その體色量親傳せり。それよりのち青原南嶽の法孫したしく傳法しきたり。祖宗の法を搭し祖宗の法を制す。浣洗の法およひ受持の法。その嫡嫡而授の堂奥に參學せされは。しらするところなり。

畜一本
に蓄に
作る

袈裟言有三衣。五條衣。七條衣。九條衣等。大衣也。上行之流唯受此三衣。不畜餘衣。唯用三衣供身事足。若經營作務。大小行來。著五條衣。爲諸善事。入衆著七條衣。教化人天。令其敬信。須著九條等大衣。又在屏處著五條衣。入衆之時著七條衣。若入王宮聚落。須著大衣。又復調和熅熅之時著五條衣。寒冷之時加著七條衣。寒苦嚴切。加以著大衣。故往一時。正冬八夜。天寒裂竹。如來於彼初夜分時著五條衣。夜久轉寒。加七條衣。於夜後分。天寒轉盛。加以大衣。佛便作念。未來世中。不忍寒苦。諸善男子。以此三衣足得充身。

搭袈裟法

偏袒右肩。これ常途の法なり。通兩肩搭の法あり。如來およひ者。年老宿の儀なり。兩肩を通すといふとも。胸臆をあらはすときあり。胸臆をおほふときあり。通兩肩搭は六十條衣以上の大袈裟のときなり。搭袈裟のとき。兩端ともに左臂肩にかさねかくるなり。前頭は左端のうへにかけて。臂外にたれたり。大袈裟のとき。前頭を左肩より通

して背後にいだしたれたり。このほか種種の著袈裟の法あり。久參
咨問すへし。梁陳隋唐宋あひつたはれて。數百歳のあいた。大小兩乘
の學者。おほく講經の業をなけすて。究竟にあらずとしりて。す
みて佛祖正傳の法を習學せんとするとき。かならず從來の弊衣を
脱落して。佛祖正傳の袈裟を受持するなり。まさしくこれ捨邪歸正
なり。如來の正法は。西天すなはち法本なり。古今の人師。おほく凡夫
の情量局量の小見をたつ。佛界衆生界。それ有邊無邊にあらざるか
ゆゑに。大小乗の教行人理。いまの凡夫の局量にいるへからず。しか
あるに。いたつらに。西天を本とせず。震旦國にして。あらたに局量の
小見を今案して。佛法とせる道理。しかあるへからず。しかあれば。す
なはち。いま發心のともから。袈裟を受持すへくは。正傳の袈裟を受
持すへし。今案の新作袈裟を受持すへからず。正傳の袈裟といふは。
少林曹谿正傳しきたれる。如來の嫡嫡相承なり。一代も虧闕なし。そ
の法子法孫の著しきたれる。これ正傳袈裟なり。唐土の新作は。正傳

にあらず。いま古今に西天よりきたれる。僧徒の所著の袈裟。みな佛
祖正傳の袈裟のことく著せり。一人としても。いま震旦新作の律學
のともからの。所製の袈裟のことくなるなし。くらきともから。律學
の袈裟を信す。あきらかなるものは。抛却するなり。おほよそ。佛佛祖
祖相傳の袈裟の功德。あきらかにして。信受しやすし。正傳まさしく
相承せり。本様まのあたりつたはれり。いまに現在せり。受持しあひ
嗣法して。いまにいたる。受持せる祖師ともに。これ證契傳法の師資
なり。しかあれば。すなはち。佛祖正傳の作袈裟の法によりて。作法す
へし。ひとりこれ正傳なるかゆゑに。凡聖人天龍神。みなひさしく證
知しきたれるところなり。この法の流布に。うまれあひて。ひとたひ
袈裟を身體におほひ。刹那須臾も受持せん。すなはち。これ決定成無
上菩提の護身符子ならん。一句一偈を身心に。そめん。長劫光明の種
子として。つひに無上菩提にいたる。一法一善を身心に。そめん。亦復
如是なるへし。心念も刹那生滅し。無所住なり。身體も刹那生滅し。無

所住なりといへとも。所修の功德。かならず熟脱のときあり。袈裟また作にあらす無作にあらす。有所住にあらす。無所住にあらす。唯佛與佛の究盡するところなりといへとも。受持する行者。その所得の功德。かならず成就するなり。かならず究竟するなり。もし宿善なきものは。一生二生乃至無量生を經歷すといへとも。袈裟をみるへからす。袈裟を著すへからす。袈裟を信受すへからす。袈裟をあきらめしるへからす。いま震旦國日本國をみるに。袈裟をひとたひ身體に著することうるものなり。えさるものあり。貴賤によらず。愚智によらず。ばかりしりぬ宿善によれりといふこと。しかあれはすなはち袈裟を受持せんは。宿善よろこふへし。積功累徳うたかふへからす。いまたえさらんは。ねかふへし。今生いそぎ。そのはしめて下種せんことをいとなむへし。さはりありて受持することえさらんものは。諸佛如來佛法僧の三寔に。慚愧懺悔すへし。佗國の衆生いくはくか。ねかふらん。わかしくにも震旦國のことく。如來の衣法。まさしく正傳

幡幟
清本
に作

一本
のな
し下
絹を
縫ふ
と

親臨せまじと。おのれがくに正傳せさること。慚愧ふかかると。かなしむうらみあるらん。われらなにのさいはひありてか。如來世尊の衣法正傳せる法にあふたてまつれる。宿殖般若の大功德力なり。いま末法惡時世は。おのれか正傳なきをはちす。佗の正傳あるをそねむ。おもはくは魔黨ならん。おのれかいまの所有所住は。前業にひかれて眞實にあらす。たは正傳の佛法に歸敬せん。すなはちおのれか學佛の實歸なるへし。おほよそしるへし。袈裟はこれ諸佛の恭敬歸依しましますところなり。佛身なり。佛心なり。解脫服と稱し。福田衣と稱し。無相衣と稱し。無上衣と稱し。忍辱衣と稱し。如來衣と稱し。大慈大悲衣と稱し。勝幢衣と稱し。阿耨多羅三藐三菩提衣と稱す。まさにかくのことく。受持頂戴すへし。かくのことくなるかゆゑに。こころにしたかふて。あらたむへきにあらず。その衣財。また絹布よろしきにしたかふても。ちるる。かならずしも布は清淨なり。絹は不淨なるにあらず。布をきらふて。絹をとる所見なし。わらふへし。諸佛

る所見
なり
十の
あり
四字

の常法。かならず糞掃衣を上品とす。糞掃に十種あり。四種あり。いはゆる火燒。牛嚼。鼠嚙。死人衣等。五印度人。如此等衣。棄之巷野。事同糞掃。名糞掃衣。行者取之。浣洗縫治。用以供身。そのなかに絹類あり。布類あり。絹布の見をなけすて。糞掃を參學すへきなり。糞掃衣は。むかし阿耨達池にして。浣洗せしに。龍王讚歎。雨華禮拜しき。小乗教師。また化絲の説あり。よるところなかるへし。大乘人わらふへし。いつれかうたかふ。しるへし。糞掃をひろふなかに。絹に相似なる布あらん。布に相似なる絹あらん。土俗萬差にして。造化はかりかたし。肉眼のよくしるところにあらす。かくのとき。ものをえたらん。絹布と論すへからず。糞掃と稱すへし。たとひ人天の糞掃と生長せるありとも。有情ならじ。糞掃なるへし。たとひ松菊の糞掃と生長せるありとも。非情ならじ。糞掃なるへし。糞掃の絹布にあらす。金銀珠玉にあらざる道理を信受するとき。糞掃現成するなり。絹布の見解。いまた脱

清本の
下の
の字
無し

清本
の字
に作

清本
の字
に作

落せされは糞掃也。未夢見在なり。ある僧かつて古佛にとふ。黃梅夜半の傳衣。これ布なりとやせん。絹なりとやせん。畢竟してなにもなりとかせん。古佛いはく。これ布にあらす。これ絹にあらす。しるへし。袈裟は絹布にあらざる。これ佛道の玄訓なり。商那和。修尊者は。第三の付法藏なり。うまるときより衣と俱生せり。この衣。すなはち在家のときは俗服なり。出家すれば袈裟となる。また鮮白比丘尼。發願施既ののち。生生のところ。およひ中有。かならず衣と俱生せり。今日釋迦牟尼佛にあふたてまつりて。出家するとき。生得の俗衣。すみやかに轉して袈裟となる。和修尊者におなし。あきらかにしりぬ。袈裟は絹布等にあらざること。いはんや佛法の功德。よく身心諸法を轉すること。それかくのとし。われら出家受戒のとき。身心依正。すみやかに轉する道理。あきらかなれと。愚蒙にしてしらするのみなり。諸佛の常法。ひとり和修鮮白に加して。われらに加せざることなきなり。隨分の利益。うたかふへからざるなり。かくのことくの道理。

あきらかに功夫參學すへし。善來得戒の披體の袈裟。かならずしも
 布にあらず。絹にあらず。佛化難思なり。衣裏の寔珠は算沙の所能に
 あらず。諸佛の袈裟の體色量の有量無量。有相無相。あきらめ參學す
 へし。西天東地。古往今來の祖師。みな參學正傳せるところなり。祖
 正傳のあきらかにして。うたかふところなきを見聞しなから。いた
 つらにこの祖師に正傳せざらんは。その意樂ゆるしかたからん。愚
 癡のいたり不信のゆゑなるへし。實をすてて虚をもとめ。本をすて
 て末をねかふものなり。これ如來を輕忽したてまつるならん。菩提
 心をおこさんともから。かならず祖師の正傳を傳受すへし。われら
 あひかたき佛法にあふたてまつるのみにあらず。佛袈裟正傳の法
 孫として。これを見聞し。學習し。受持することをえたり。すなはちこ
 れ如來をみたてまつるなり。佛說法をきくなり。佛光明にてらさる
 るなり。佛受用を受用するなり。佛心を單傳するなり。佛隨をえたる
 なり。まのあたり釋迦牟尼佛の袈裟に。おほはれたてまつるなり。釋

清本袈
下の
を
作る

迦牟尼佛。まのあたりわれに袈裟をさつけましますなり。佛にした
 かふたてまつりて。この袈裟はうけたてまつれり。

浣袈裟法

袈裟をたたます。淨桶にいれて。香湯を百沸して。袈裟をひたして。一
 時はかりおく。またの法。きよき灰水を百沸して。袈裟をひたして。湯
 のひややかになるをまつ。いまはよのつねに灰湯をもちある。灰湯
 ここにはあくのゆといふ。灰湯さめぬれは。きよくすみたる湯をも
 て。たひたひこれを浣洗する。あひた。兩手にいれて。もみあらはす。ふ
 ます。あかのそこほり。あふらのそこほるを期とす。そののち沈香栴
 檀香等を冷水に和して。これをあらふ。そののち淨竿にかけて。ほす。
 よくほしてのち。摺襞して。たかく安して。焼香散華して。右邊數帀し
 て。禮拜したてまつる。あるひは三拜。あるひは六拜。あるひは九拜し
 て。胡跪合掌して。袈裟を兩手にささげて。くちに偈を誦してのち。た
 ちて如法に著したてまつる。

巾一
に本
作に
るに

世尊告大衆言。我往昔在審藏佛所時。爲大悲菩薩。爾時大悲菩薩摩訶薩。在審藏佛前。而發願言。世尊。我成佛已。若有衆生入我法中出家。著袈裟者。或犯重戒。或行邪見。若於三審輕毀不信。集諸重罪。比丘比丘尼。優婆塞。優婆夷。若於一念中生恭敬心。尊重僧伽梨衣。生恭敬心。尊重世尊。或於法僧。世尊如是衆生。乃至一人。不於三乘得受記莖。而退轉者。則爲欺誑十方世界。無量無邊阿僧祇等。現在諸佛。必定不成阿耨多羅三藐三菩提。世尊。我成佛已來。諸天龍鬼神。人及非人。若能於此著袈裟者。恭敬供養。尊重讚歎。其人若得見此袈裟少分。即得不退於三乘中。若有衆生。爲飢渴所逼。若貧窮鬼神。下賤諸人。乃至餓鬼衆生。若得袈裟少分。乃至四寸。即得飲食充足。隨其所願。疾得成就。若有衆生。共相違反。起怨賊想。展轉鬪諍。若諸天龍鬼神。乾闥婆阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩睺羅伽。狗。辨茶。毘舍遮。人及非人。共鬪諍時。念此袈裟。依袈裟力。尋生悲心。柔軟之心。無怨賊心。寂滅之心。調伏善心。還得清淨。有人若在兵甲鬪訟斷事之中。持此袈裟少分。至此輩中。爲自護故。供養恭敬尊重。是諸人等。無能侵

弄到本
作に并に

高本に
し衣字な

毀觸燒輕弄。常得勝他。過此諸難。世尊。若我袈裟不能成就。如是五事聖功德者。即爲欺誑十方世界。無量無邊阿僧祇等。現在諸佛。未來不應成就。阿耨多羅三藐三菩提。作佛事也。沒失善法。必定不能破壞外道。善男子。爾時審藏如來。申金色右臂。摩大悲菩薩頂。讚言。善哉善哉。大丈夫。汝所言者。是大珍寶。是大賢善。汝成阿耨多羅三藐三菩提已。是袈裟衣服。能成就此五聖功德。作大利益。善男子。爾時大悲菩薩摩訶薩。聞佛讚歎已。心生歡喜踊躍無量。因佛申此金色之臂。長指合縵。其手柔軟。猶如天衣。摩其頭已。其身即變狀如童子二十歲人。善男子。彼會大衆。諸天龍神。乾闥婆人。及非人。叉手恭敬。向大悲菩薩。供養種種華。乃至伎樂而供養之。復種種讚歎已。默然而住。如來在世。今日にいたるまで。菩薩聲聞の經律のなかより。袈裟の功德をえらひあくるとき。かならずこの五聖功德をむねとするなり。まことにそれ。袈裟は三世諸佛の佛衣なり。その功德無量なりといへとも。釋迦牟尼佛の法のなかにして。袈裟をえたらんは。餘佛の法のなかにして。袈裟をえんにもす

清本に
の無し

くれたるへしゆゑいかんとなれば釋迦牟尼佛むかし因地のとき。大悲菩薩摩訶薩として。審藏佛のみまへにて。五百大願をたてましますとき。ことさらこの袈裟の功德におきて。かくのことく誓願をおこしますます。その功德さらに無量不可思議なるへし。しかあれはすなはち世尊の皮肉骨髓いまに正傳するといふは袈裟衣なり。正法眼藏を正傳する祖師。かならず袈裟を正傳せり。この衣を傳持し頂戴する衆生。かならず二三生のあひたに得道せり。たとひ戲笑のため利益のために身に著せる。かならず得道の因縁なり。

龍樹祖師曰。復次佛法中出家人。雖破戒墮罪。罪畢得解脫。如優婆塞羅華比丘尼。本生經中說。佛在世時。此比丘尼。得六神通阿羅漢。入貴人舍。常讚出家法。語諸貴人婦女言。姉妹可出家。諸貴婦女言。我等少容盛美。持戒爲難。或當破戒。比丘尼言。破戒便破。但出家問言。破戒當墮地獄。云何可破。答言。墮地獄便墮。諸貴婦女皆笑之。言。地獄受罪。云何可墮。比丘尼言。我自憶念本宿命時。作戲女。著種種衣服。而說舊語。或時著比丘尼衣。

清本に
皆字無し

清本に
心無し

清本に
惡人の
二字此
の字無
し
清本に
比丘尼
の三字
無し
清本に
下生
の字無
し

以爲戲笑。以是因縁故。迦葉佛時。作比丘尼。時自恃貴姓端正。心生憍慢。而破禁戒。破禁戒罪故。墮地獄受種種罪。受罪畢竟。值釋迦牟尼佛出家。得六神通阿羅漢道。以是故知。出家受戒。雖復破戒。以戒因縁故。得阿羅漢道。若但作惡。無戒因縁。不得道也。我乃昔時。世世墮地獄。從地獄出。爲惡人。惡人死還入地獄。都無所得。今以此證知。出家受戒。雖復破戒。以是因縁。可得道果。この蓮華色比丘尼。阿羅漢得道の初因。さらに他の功にあらず。たたこれ袈裟を戲笑のために。その身に著せし功德によりて。いま得道せり。二生に。迦葉佛の法にあふたてまつりて。比丘尼となり。三生に釋迦牟尼佛にあふたてまつりて。大阿羅漢となり。三明六通を具足せり。三明とは。天眼宿命漏盡なり。六通とは。神境通。他心通。天眼通。天耳通。宿命通。漏盡通なり。まことにそれ。たた作惡人とありしときは。むなしく死して地獄にいる。地獄よりいて。また作惡人となる。戒の因縁あるときは。禁戒を破して地獄におちたりといへとも。つひに得道の因縁なり。いま戲笑のため袈裟を著せる。

清本も
しの字
無し

なほこれ三生に得道す。いはんや無上菩提のために清淨の信心を
おこして袈裟を著せん。その功德成就せさらめやは。いかにいはん
や。一生のあひた受持したてまつり。頂戴したてまつらん功德。まさ
に廣大無量なるへし。もし菩提心をおこさん人。いそぎ袈裟を受持
頂戴すへし。この好世にあふて。佛種をうゑさらん。かなしむへし。南
洲の人身をうけて。釋迦牟尼佛の法にあふたてまつり。佛法嫡嫡の
祖師にうまれあひ。單傳直指の袈裟をうけたてまつりぬへきをむ
なしくすこさんかなしむへし。いま袈裟正傳はひとり祖師正傳こ
れ正嫡なり。餘師の肩をひとしくすへきにあらず。相承なき師にし
たかふて。袈裟を受持する。なほ功德甚深なり。いはんや嫡嫡面授し
きたれる。正師に受持せん。まさしき如來の法子法孫ならん。まさ
に如來の皮肉骨髓を正傳せるなるへし。おほよそ袈裟は三世十方の
諸佛正傳しきたれること。いままた斷絶せず。三世十方の諸佛菩薩聲
聞緣覺。おなしく護持しきたれるところなり。袈裟をつくるには蠶

清本に
西天の
加胸の
なり布
八字無
し

布を本とす。蠶布なきか。こときは細布をもちゐる。蠶細の布ともに
なきには。絹素をもちゐる。絹布ともになきか。こときは綾羅等をもち
ちゐる。如來の聽許なり。絹布綾羅等の類すへてなきくには。如來
また皮袈裟を聽許します。おほよそ袈裟は。そめて青黃赤黒紫
色ならしむへし。いつれも色のなかの壞色ならしむ。如來はつねに
肉色の袈裟を御しましたせり。これ袈裟色なり。初祖相傳の佛袈裟
は青黒色なり。西天の屈胸布なり。いま曹谿山にあり。西天二十八傳
し。震旦五傳せり。いま曹谿古佛の遺弟。みな佛衣の故實を傳持せり。
餘僧のおよはさる。ところなり。おほよそ衣に三種あり。一者糞掃衣。
二者毳衣。三者衲衣なり。糞掃は。さきにしめすか。ことし。毳衣者。鳥獸
細毛。これをなつけて。毳とす。行者若無糞掃可得取之爲衣。衲衣者。朽
故破弊。縫衲供身。不著世間好衣。

具壽鄔波離請世尊曰。大德世尊。僧伽胝衣。條數有幾。佛言。有九。何謂爲
九。謂九條。十一條。十三條。十五條。十七條。十九條。二十一條。二十三條。二

一本に
豎は豎
に作る

十五條。其僧伽胝衣。初之三品。其中壇隔兩長一短。如是應持。次三品。三長一短。後三品。四長一短。過是條外。便成破衲也。鄔波離復白世尊曰。大德世尊。有幾種僧伽胝衣。佛言。有三種。謂上中下。上者。豎三肘。橫五肘。下者。豎二肘半。橫四肘半。二內名中。鄔波離復白世尊曰。大德世尊。嗚咀羅僧伽衣。條數有幾。佛言。但有七條。壇隔兩長一短。鄔波離復白世尊曰。大德世尊。七條復有幾種。佛言。有其三品。謂上中下。上者。三五肘。下者。各減半肘。二內名中。鄔波離復白佛言。大德世尊。安咀婆娑衣。條數有幾。佛言。有五條。壇隔一長一短。鄔波離復白世尊言。安咀婆娑衣。有幾種。佛言。有三品。謂上中下。上者。三五肘。中下同前。佛言。安咀婆娑衣。復有二種。何爲二。一者豎二肘。橫五肘。二者豎二橫四。僧伽胝者。譯爲重複衣。嗚咀羅僧伽者。譯爲上衣。安咀婆娑者。譯云下衣。又云內衣。又云僧伽梨衣。謂大衣也。又云。入王宮衣。說法衣。薛多羅僧。謂七條衣也。又云。中衣。入衆衣。安陀會。謂五條衣也。又云。小衣。行道作務衣。この三衣。かならず護持すへし。また僧伽胝衣に。六十條袈裟あり。かならず受持すへし。おはよそ。

八萬歳より百歳にいたるまで。壽命の増減にしたかふて。身量の長短あり。八萬歳と。一百歳と。ことなることありといふ。また平等なるへしといふ。そのなかに。平等なるへしといふを。正傳とす。佛と。人と。身量はるかにことなり。人身は。はかりつへし。佛身は。つひには。かるへからず。このゆゑに。迦葉佛の袈裟。いま釋迦牟尼佛著しまし。ますに。長にあらず。ひろきにあらず。いま釋迦牟尼佛の袈裟。彌勒如來著しまし。ますに。みちかきにあらず。せはきにあらず。佛身の長短にあらず。さる道理。あきらかに。觀見し。決斷し。照了し。警察す。へきなり。梵王のたかく。色界にある。その佛頂を。みたてまつらす。目連はるかに。光明旃世界に。いたる。その佛聲を。きはめす。遠近の見聞。ひとしまこと。に不可思議なるものなり。如來の一切の功德。みなかくのことし。この功德を。念したてまつるへし。袈裟を。裁縫するに。割截衣あり。揲葉衣あり。攝葉衣あり。緞衣あり。ともに。これ作法なり。その所得にしたかふて。受持すへし。佛言。三世佛袈裟。必定却刺。その衣財を。えんこと。

また清淨を善なりとす。いはゆる糞掃衣を最上清淨とす。三世の諸佛。ともにこれを清淨とします。そのほか信心檀那の所施の衣。また清淨なり。あるひは淨財をもて。いちにしてかふ。また清淨なり。作衣の日限ありといへとも。いま末法澆季なり。遠方邊邦なり。信心のもよほすところ。裁縫をえて受持せんには。しかじ。在家の人天なれとも。袈裟を受持することは。大乘最極の秘訣なり。いまは梵王釋王。ともに袈裟を受持せり。欲色の勝躑なり。人間には勝計すへからず。在家の菩薩。みなともに受持せり。震旦國には。梁武帝。隋煬帝。ともに袈裟を受持せり。代宗。肅宗。ともに袈裟を著し。僧家に參學し。菩薩戒を受持せり。その餘の居士婦女等の。受袈裟。受佛戒のともから。今の勝躑なり。日本國には。聖德太子。袈裟を受持し。法華勝鬘等の諸經講説のとき。天雨霽華の奇瑞を感得す。それよりこのかた。佛法わかくに流通せり。天下の攝録なりといへとも。すなはち人天の導師なり。佛のつかひとして。衆生の父母なり。いまわかくに。袈裟の體

色量ともに訛謬せりといへとも。袈裟の名字を見聞する。たたこれ聖德太子のおほんちからなり。そのとき。邪をくたき。正をたてすは。今日かなしむへし。のちに聖武皇帝。また袈裟を受持し。菩薩戒をうけまします。しかあれば。すなはち。たとひ帝位なりとも。たとひ臣下なりとも。いそぎ袈裟を受持し。菩薩戒をうくへし。人身の慶幸。これよりもすくれたるあるへからず。有言。在家受持袈裟。一名單縫。二名俗服。乃未用却刺而縫也。又言。在家趣道場時。具三法衣。楊枝。澡水。食器。坐具。應如比丘修行淨行。古徳の相傳かくのことし。たたしいま佛祖單傳しきたれるところ。國王。大臣。居士。士民にさつくる袈裟。みな却刺なり。盧行者。すてに佛袈裟を正傳せる勝躑なり。おほよそ袈裟は。佛弟子の標幟なり。もし袈裟を受持し。をはりなは。毎日に頂戴したてまつるへし。頂上に安して。合掌して。この偈を誦す。大哉解脫服。無相福田衣。披奉如來教。廣度諸衆生。しかうしてのち。著すへし。袈裟にかきては。師想塔想をなすへし。洗衣頂戴のときも。この偈を誦する

なり。

佛言。剃頭著袈裟。諸佛所加護。一人出家者。天人所供養。あきらかにしりぬ。剃頭著袈裟よりこのかた。一切諸佛に加護せられたてまつるなり。この諸佛の加護によりて。無上菩提の功德圓滿すへし。この人をは。天衆人衆ともに供養するなり。世尊告智光比丘言。法衣得十勝利。一者。能覆其身。遠離羞耻。具足慚愧。修行善法。二者。遠離寒熱。及以蚊蟲惡獸毒蟲。安穩修道。三者。示現沙門出家相貌。見者歡喜。遠離邪心。四者。袈裟即是人天審幢之相。尊重敬禮。得生梵天。五者。著袈裟時。生審幢想。能滅衆罪。生諸福德。六者。本制。袈裟染令壞色。離五欲想。不生貪愛。七者。袈裟是佛淨衣。永斷煩惱。作良田。故。八者。身著袈裟。罪業消除。十善業道。念念增長。九者。袈裟猶如良田。能善增長菩薩道故。十者。袈裟猶如甲冑。煩惱毒箭不能害故。智光當知。以此因緣。三世諸佛。緣覺。聲聞。清淨出家。身著袈裟。三聖同坐。解脫寢牀。執智慧劍。破煩惱魔。共入一味諸涅槃界。爾時世尊而說偈言。智光比丘應善聽。大福田衣十勝利。世間衣服

制清本に製るに
通本良の下の
ありの字

樂一本に
作に益に

中阿含經第五卷
梨子水論
告諸

増欲染。如來法服不如是。法服能遮世羞耻。慚愧圓滿。生福田。遠離寒熱。及毒蟲。道心堅固。得究竟。示現出家。離貪欲。斷除五見。正修行。瞻禮袈裟。審幢相。恭敬生於梵王福。佛子披衣生塔想。生福滅罪。感人天。肅容致敬。眞沙門。所爲不染。諸塵俗。諸佛稱讚爲良田。利樂群生。此爲最。袈裟神力。不思議。能令修植菩提行道芽。增長如春苗。菩提妙果。類秋實。堅固金剛。眞甲冑。煩惱毒箭不能害。我今畧讚十勝利。歷劫廣說無有邊。若有龍身披一縷。得脫金翅鳥王食。若人渡海持此衣。不怖龍魚諸鬼難。雷電霹靂。天之怒。披袈裟者無恐畏。白衣若能親捧持。一切惡鬼無能近。若能發心求出家。厭離世間。修佛道。十方魔宮皆振動。是人速證法王身。この十勝利。ひろく佛道のもろもろの功德を具足せり。長行偈頌に。あらゆる功德。あきらかに參學すへし。披閱して。すみやかに。さしかくことなかれ。句句にむかひて久參すへし。この勝利は。ただ袈裟の功德なり。行者の猛利恒修のちからにあらず。佛言。袈裟神力。不思議。いたづらに凡夫賢聖のはかりしるところにあらず。おほよそ速證法王身

諸賢爲 比丘 諸賢爲 五除惱 法云 何爲 五或 有身 不淨口 淨則但 念不 善不 念不 如阿練 若比丘 見糞 聚中 衣大便 小便除 唾及除 不淨之 所染 汗左 執右 被乘 不淨 取淨 處及不 以下云 之

のとき。かならず袈裟を著せり。袈裟を著せざるもの。法王身を證
せること。むかしよりいまたあらざるところなり。○その最第一清
淨の衣財は。これ糞掃衣なり。その功德あまねく大乘小乘の經律論
のなかにあきらかなり。廣學に咨問すへし。その餘の衣財。またかね
あきらむへし。佛佛祖祖。かならずあきらめ。正傳しますところ
なり。餘類のおよふへきにあらず。
中阿含經曰。復次。諸賢。或有一人。身淨行。口意不淨行。若慧者見。設生悲
惱。應當除之。諸賢。或有一人。身不淨行。口意淨行。若慧者見。設生悲
當除之。當云何除。諸賢。猶如阿練若比丘。持糞掃衣。見糞掃中所棄弊衣。
或大便汗。或小便唾。及餘不淨之所染汗。見已。左手執之。右手舒張。若
非大便小便唾。及餘不淨之所汗處。又不穿者。便裂取之。如是。諸賢。或
有一人。身不淨行。口意淨行。莫念彼身不淨行。但當念彼口意之淨行。若
慧者見。設生悲惱。應如是除。これ阿練若比丘の拾糞掃衣の法なり。
四種の糞掃あり。十種の糞掃あり。その糞掃をひろふとき。まつ不穿

のところをえらひとる。つきには大便小便。ひさしくそみて。ふかく
して。浣洗すへからざらん。またとるへからず。浣洗しつへからんこ
れをとるへきなり。

十種糞掃

一牛嚼衣。二鼠嚼衣。三火燒衣。四水衣。五產婦衣。六神廟衣。七塚間衣。
八求願衣。九王職衣。十往還衣。この十種ひとのすつるところなり。人
間のもちゐるところにあらず。これをひろふて。袈裟の淨財とせり。
三世諸佛の讚歎しますところ。もちゐきたり。ましますところ
なり。しかあれはすなはち。この糞掃衣は。人天龍等の。おもくし擁護
するところなり。これをひろふて。袈裟をつくるへし。これ最第一の
淨財なり。最第一の清淨なり。いま日本國。かくのことくの糞掃衣な
したとひもとめんとすとも。あふへからず。邊地小國。かなしむへし。
たた檀那所施の淨財。これをもちゐるへし。人天の布施するところ
の淨財。これをもちゐるへし。あるひは淨命より。うるところのもの

質清本
に貨に
作る

をもて市にして貿易せらん。またこれ袈裟につくりつへし。かくの
こときの糞掃。および淨命よりえたるところは。絹にあらず。布にあ
らず。金銀珠玉綾羅綿繡等にあらず。たたこれ糞掃衣なり。この糞掃
は。弊衣のためにあらず。美服のためにあらず。たたこれ佛法のため
なり。これを用著する。すなはち三世諸佛の皮肉骨髓を正傳せるな
り。正法眼藏を正傳せるなり。この功德さらに。人天に問著すへから
す。佛祖に參學すへし。

正法眼藏袈裟功德

予在宋のそのかみ。長連牀に功夫せしとき。齊肩の隣單をみるに。開
静のときことに。袈裟をささけて頂上に安し。合掌恭敬し。一偈を默
誦す。その偈にいはいく。大哉解脱服。無相福田衣。披奉如來教。廣度諸衆
生。ときに予未曾見のおもひを生し。歡喜身にあまり。感涙ひそかに
おちて衣襟をひたす。その旨趣は。そのかみ阿含經を披閱せしとき。
頂戴袈裟の文をみるといへとも。その儀則いまたあきらめず。いま

まのあたりみる。歡喜隨喜し。ひそかにおもはく。あはれむへし。郷土
にありしとき。をしゆる師匠なし。すすむる善友あらず。いくはくか
いたつらにすくる光陰を。をしまざる。かなしまさらめやは。いまの
見聞するところ。宿善よるこふへし。もしいたつらに郷間にあらけ。
いかてか。まさしく佛衣を相承著用せる。僧室に隣肩することをえ
ん。悲喜ひとかたならず。感涙千萬行。ときにひそかに發願す。いかに
してか。われ不肖なりといふとも。佛法の嫡嗣となり。正法を正傳し
て。郷土の衆生をあはれむに。佛祖正傳の衣法を見聞せしめん。かの
ときの發願いまむなしからず。袈裟を受持せる在家出家の菩薩お
ほし。歡喜するところなり。受持袈裟のともから。かならず日夜に頂
戴すへし。殊勝最勝の功德なるへし。一句一偈の見聞は。若樹若石の
因縁もあるへし。見聞あまねく九道にかきらさるへし。袈裟正傳の
功德は。十方に難遇ならむ。わづかに一日一夜なりとも。最勝最上な
るへし。天宋嘉定十七年癸未冬十月中に。高麗僧二人ありて。慶元府

にきたれり。一人は智玄となつて。一人は景雲といふ。この二人しきりに佛經の義を談すといへとも。さらに文學の士なり。しかあれとも袈裟なし鉢盂なし俗人のことし。あはれむへし。比丘形なりといへとも。比丘法なし。小國邊地のしかあらしむるならん。日本國の比丘形のともから。他國にゆかんと。またかの智玄等に。ひとしからん。釋迦牟尼佛十二年中頂戴して。さしおきましまささりき。すてに遠孫なり。これを學すへし。いたつらに。名利のために。天を拜し神を拜し。王を拜し。臣を拜する頂門をめぐらして。佛衣頂戴に回向せん。よろこぶへきなり。

ときに仁治元年庚子開冬日在觀音導利興聖霽林寺示衆

正法眼藏袈裟功德

正法眼藏傳衣

佛々正傳の衣法。まさに震且に正傳することは。少林の高祖のみなり。高祖はすなはち釋迦牟尼佛より第二十八代の祖師なり。西天二十八代嫡々あひつたはれ。震且に六代まのあたり正傳す。西天東地都盧三十三代なり。第三十三代の祖大鑑禪師。この衣法を黃梅の夜半に正傳し。生前護持きたる。いまなほ曹谿の寶林寺に安置せり。諸代の帝王あひつきて。内裏に請入して。供養す。神物護持せるものなり。唐朝の中宗。肅宗。代宗しきりに。歸内供養しき。請するにも。おくるにも。勅使をつかはし。詔をたまふ。すなはちこれおもくする儀なり。代宗皇帝あるとき。佛衣を曹溪山におくる詔にいはく。今遣鎮國大將軍劉崇景。頂戴而送。朕爲之國寶。卿可於本寺安置。令僧衆親承。宗旨者。嚴加守護。勿令遺墜。しかあれば。すなはち。數代の帝者。ともに。くこの重寶とせり。まことに無量恒河沙の三千世界を統領せんより。もこの佛衣。くにたもてるは。ことにすぐれたる大寶なり。下壁に

準すべからざるものなり。たとひ傳國璽となるともいかにてか傳佛の奇寶とならん。大唐よりこのかた瞻禮せる緇白かならず信法の大機なり。宿善のたすくるにあらずよりはいかでかこの身をもちて。まのあたり佛々正傳の佛衣を瞻禮することあらん。信受することあたはさらんは。みつからなりといふともうらむべし。佛種子にあらざることを。俗なほいはくその人の行李をみるは。すなはちその人を見るなり。いま佛衣を瞻禮せんは。すなはち佛をみたてまつるなり。百千萬の塔を起立して。この佛衣に供養すべし。天上海中にもこゝろあらんは。おもくすべし。人間にも轉輪聖王等のまことをしり。すぐれたるをしらんは。おもくすべきなり。あはれむへし。よに國主となれるや。からわかくに。重寶のあるをしらさること。まに道士の教にまとはされて。佛法を廢せるおほし。そのとき袈裟をかけす。圓頂に葉巾をいたく。講するところは。延壽長年の方なり。唐朝にもあり。宋朝にもあり。これらのたくひは。國主なりといへと

も國民よりもいやしかるへきなり。しつかに觀察しつへし。わかくに佛衣とまりて。現在せり。衣佛國土なるへきかとも思惟すへきなり。舍利等よりもすぐれたるへし。舍利は輪王にもあり。獅子にもあり。人にもあり。乃至辟支佛等にもあり。しかあれとも輪王には袈裟なし。獅子に袈裟なし。人に袈裟なし。ひとり諸佛のみに袈裟あり。ふかく信受すへし。いまの愚人。おほく舍利はおもくすといへとも。袈裟をしらす。護持すへきとしれるものまれなり。これすなはち先來より袈裟のおもきことをきけるものまれなり。佛法正傳いまたきかさるかゆへにしかあるなり。つらつら。釋尊在世をおもひやれば。わづかに二千餘年なり。國寶神器のいまにつたはれるも。これよりもすぎて。ふるくなれるもおほし。この佛法佛衣は。ちかくあらたなり。若田若里に展轉せんこと。たとひ五十轉々になれりとも。その益これ妙なるべし。かれなほ功德あらたなり。この佛衣かれとおなしかるへからず。かれは正嫡より正傳せず。これは正嫡より正傳

せり。しるべし。四句偈をきくに得道す。一句子をきくに得道す。四句偈および一句子。なにとしてか。恁麼の靈驗ある。いはゆる佛法なるによりてなり。いま一頂衣九品衣。まさしく佛法より正傳せり。四句偈よりも劣なるへからず。一句法よりも驗なかるへからず。このゆへに二千餘年よりこのかた。信行法行の諸機。ともに隨佛學者。みな袈裟を護持して身心とせるものなり。諸佛の正法にくらきたぐひは。袈裟を崇重せざるなり。いま釋提桓因および阿那跋達多龍王等。ともに在家の天主なりといへとも。龍王なりといへども。袈裟を護持せり。しかあるに剃頭のたぐひ。佛子と稱するともから。袈裟におきては。受持すべきものとしらず。いはんや體色量をしらんや。いはんや着用の法をしらんや。いはんやその威儀ゆめにも。いまたみざるところなり。袈裟をば。ふるくより。いはく。除熱惱服となづく。解脫服となづく。おほよそ功德はかるべからざるなり。龍鱗の三熱よく。袈裟の功德より解脫するなり。諸佛成道するとき。かならずこの衣を

もちゐるなり。まことに邊地にむまれ。末法にあふといへとも。相傳あると。相傳なきと。たくらぶることあらば。相傳の正嫡なるを信受護持すへし。いつれの家門にか。わか正傳のごとく。まさしく釋迦の衣法ともに正傳せる。ひとり佛道のみであり。この衣法にあはんと。きたれか恭敬供養をゆるくせん。たとひ一日に無量恒河沙の身命をすて。も供養すべし。生々世々。值遇頂戴をも發願すべし。われら佛生國をへたつること。十萬餘里の山海のほかにむまれて。邊方の愚蒙なりといへとも。この正法をききて。この袈裟を一日一夜なりといへとも。受持し。一句一偈なりといへとも。參究する。これた。た一佛二佛を供養せる福德のみにはあるへからず。無量百千億のほとけを供養奉觀せる福德なるべし。たとひ自己なりといへとも。たとふとふべし。愛すべし。おもくすべし。祖師傳法の大恩。ねんころに報謝すべし。畜類なほ恩を報す。人類いかてか恩をしらざらん。もし恩をしらずは。畜類よりも劣なるべし。畜類よりも愚なるべし。この佛衣

の功德。その傳佛正法の祖師にあらざる餘人はゆめにもいまたし
らざるなり。いはんや體色量をあきらむるにおよはんや。諸佛のあ
とをしたふべくは。まさにこれをしたふへしたとひ百千萬代のの
ちも。この正傳を正傳せんは。まさに佛法なるへし。證驗これあらた
なり。俗なほいはく。先王の服にあらざれば服せず。先王の法にあら
されは。おこなはず。佛道もまたしかあるなり。先佛の法服にあらざ
れば。もちゐるへからず。もし先佛の法服にあらざらんほかは。なに
を服してか佛道を修行せん。諸佛に奉觀せん。これを服せざらんは。
佛會にいたりがたかるへし。後漢孝明皇帝。永平年中よりこのかた。
西天より東地に來到する僧侶。くびすをつぎてたゑす。震旦より印
度におもむく僧侶。ままにきこゆれとも。たれ人にあいて。佛法を面
授せりけるといはす。たいたつらに論師およひ三藏の學者に習
學せる名相のみなり。佛法の正嫡をきかす。このゆえに佛衣正傳す
へきといひつたへるにも。およはず。佛衣正傳せりける人にあひあ

るひい
に一本

ふといはず。傳衣の人を見聞すとかたらず。はかりしりぬ佛家の闢
輿にいらざりけるといふことを。これらのたぐひは。ひとへに衣服
とのみ認して佛法を尊重なりとしらす。まことにあはれむべし。佛
法藏相傳の正嫡に。佛衣も相傳相承するなり。法藏正傳の祖師は。佛
衣を見聞せざるなきむねは。人中天上あまねくしれるところなり。
しかあれば。すなはち佛袈裟の躰色量を正傳しきたり。正しく見聞し
きたり。佛袈裟の大功德を正傳し。佛袈裟の身心骨髓を正傳せるこ
と。ただまさに正傳の家業のみにあり。もろもろの阿笈摩教の家風
には。しらするところなり。おのおの今案に自立せるは。正傳にあら
ず。正嫡にあらず。わか大師釋迦牟尼如來。正法眼藏無上菩提を摩訶
迦葉に附授するに。佛衣ともに傳授せりしより。嫡々相承して。曹谿
山大鑑禪師にいたるに。三十三代なり。その躰色量を親見親傳せる
こと。家門ひさしくつたはれて。受持いまにあらたなり。すなはち五
宗の高祖。おのおの受持せる。それ正傳なり。あるひは五十餘代ある

九條と十條と十一條と十二條と十三條と十四條と十五條と十六條と十七條と十八條と十九條と二十條と二十一條と二十二條と二十三條と二十四條と二十五條と二十六條と二十七條と二十八條と二十九條と三十條と三十一條と三十二條と三十三條と三十四條と三十五條と三十六條と三十七條と三十八條と三十九條と四十條と

ひは四十餘代。おのおの師資みたることなく先佛の法によりて搭し。先佛の法によりて製することも唯佛與佛の相傳し證契して代々をふるに。おなしくあらたなり。嫡々正傳する佛訓にいはく。

- 九條衣 三長一短(或四長一短) 十一條衣 三長一短(或四長一短)
- 十三條衣 三長一短(或四長一短) 十五條衣 三長一短
- 十七條衣 三長一短 十九條衣 三長一短
- 廿一條衣 四長一短 廿三條衣 四長一短
- 廿五條衣 四長一短 二百五十條衣 四長一短
- 八萬四千條衣 八長一短

いま略して擧するなり。このほか諸般の袈裟あるなり。ともにこれ僧伽梨衣なるべし。あるひは在家にしても受持しあるひは出家にもちたらんずるにあらざるなり。たとひかみひげをそれとも袈裟を受持せず。袈裟をにくみいとひ袈裟をおそるるは天魔外道なり。

百丈大智禪師いへ 宿殖の善種なきものは袈裟をいむなり。袈裟をいとふなり。正法をおそれいとふなり。

佛言。若有衆生入我法中。或犯重罪。或墮邪見。於一念中。敬心尊重。僧伽梨衣。諸佛及我。必於三乘授記此人。當得作佛。若天。若龍。若人。若鬼。若能恭敬此人。袈裟少分功德。即得三乘不退不轉。若有鬼神及諸衆生。能得袈裟乃至四寸。飲食充足。若有衆生。共相違反。欲墮邪見。念袈裟力。依袈裟力。尋生悲心。還得清淨。若有人在兵陣。持此袈裟少分恭敬尊重。當得解脫。しかあれはしりぬ。袈裟の功德。それ無上不可思議なり。これを信受護持するところに。かならず得受記あるべし。得不退あるべし。たた釋迦牟尼佛のみにあらず。一切諸佛またかくのごとく宣説しましたすなり。しるべしただ諸佛の體相すなはち袈裟なり。かるがゆへに佛言。當墮惡道者。厭惡僧伽梨。しかあればすなはち袈裟を見聞せんところに。厭惡の念おこらんには。當墮惡道のわかみなるべし。と悲心を生すべきなり。慚愧懺悔すべきなり。いはんや釋迦牟尼

の袈裟を正傳すべし。信受すべし。僞作の袈裟を受持すべからず。その正傳の袈裟といふは。いま少林曹谿より正傳せるは。これ如來より嫡々相承すること。一代も虧闕せざるところなり。このゆゑに道業まさしく稟受し佛衣したしく手にいれるによりてなり。佛道は佛道に正傳す。閑人の傳得に一任せざるなり。俗諺にいはく。千聞は一見にしかず。千見は一經にしかず。これをもてかへりみれば。千見萬聞たとひありとも。一得にしかず。佛衣正傳せるにしくべからざるなり。正傳あるをうたかふべくは。正傳をゆめにもみざらんはいよいようたかふべし。佛經を傳聞せんよりは。佛衣正傳せらんは。したしかるべし。千經萬得ありとも。一證にしかじ。佛祖は證契なり。教律の凡流にならふべからず。おほよそ祖門の袈裟の功德は。正傳まさしく相承せり。本様まのあたりつたはれり。受持しあひ嗣法して。いまにたえず。正受せるひとみなこれ證契傳法の祖師なり。十聖三賢にもすぐる。奉觀恭敬し。禮拜頂戴すべし。ひとたびこの佛衣正傳

の道理。この身心に信受せられん。すなはち値佛の兆なり。學佛の道なり。不堪受是法ならんは。悲生なるべし。この袈裟をひとたび身體におほはん。決定成菩提の護身符子なりと深肯すべし。一句一偈を信心にそめつれば。長劫の光明にして。虧闕せずといふ。一法を身心にそめんも。亦復如是なるべし。かの心念も無所住なり。我有にかゝはれすといへとも。その功德すてにしかあり。身體も無所住なりといへとも。しかあり。袈裟も無所從來なり。亦無所去なり。我有にあらす。他有にあらすといへとも。所持のところに現住し。受持の人に加す。所得功德もまたかくのことくなるへし。作袈裟の作は。凡聖等の作にあらず。その宗旨。十聖三賢の究盡するところにあらず。宿殖の道種なきものは。一生二生乃至無量生を經歷すといへとも。袈裟をみず。袈裟をきかず。袈裟をしらず。いかにいはんや受持することあらんや。ひとたび身體にふるゝ功德も。うるものあり。えざるものあり。すてにうるは。よろこぶべし。いまたえざらんは。ねがふべし。うべ

からざらんはかなしむべし。大千界の内外にたゞ佛祖の門下のみに佛衣つたはれること。人天ともに見聞普知せり。佛衣の様子をあきらむること。たゞ祖門のみなり。餘門にはしらす。これをしらすらんもの。自己をうらみさらんは愚人なり。たとひ八萬四千の三昧陀羅尼をしれりとも。佛祖の衣法を正傳せず。袈裟の正傳をさきらめさらんは。諸佛の正嫡なるべからず。他界の衆生は。いくばくかねがふらん。震旦國に正傳せるがごとく。佛衣まさしく正傳せんことを。おのれがくに、正傳せざることはづるおもひあるらん。かなしむこゝろふかゝるらん。まことに如來世尊の衣法正傳せる法に値遇する。宿殖般若の大功德種子によるなり。いま末法惡時世は。おのれが正傳なきことをはぢす。正傳をそねむ魔儻おほし。おのれか所有所住は。眞實のおのれにあらざるなり。たゞ正傳を正傳せん。これ學佛の直道なり。おほよそしるべし。袈裟はこれ佛身なり。佛心なり。また解脫服と稱し。福田衣と稱し。忍辱衣と稱し。無相衣と稱し。慈

悲衣と稱し。如來衣と稱し。阿耨多羅三藐三菩提衣と稱するなり。まさにかくのこくとく受持すべし。いま現在大宋國の律學と名稱するともから。聲聞の酒に醉狂するによりて。おのれが家門にしらぬいゑを傳來することを慚愧せず。うらみす。覺知せず。西天より傳來せる袈裟。ひさしく漢唐につたはれることをあらためて。小量にしたかふるこれ小見によりてしかあり。小見のはづべきなり。もしいままんぢか小量の衣をもちゐるがごときは。佛威儀おほく虧闕することあらん。佛儀を學傳せること。のあまねからざるによりて。かくのこととくあり。如來の身心。たゞ祖門に正傳して。かれらが家業に流散せざること。あきらかなり。もし萬一も佛儀をしらは。佛衣をやぶるへからず。文なほあきらめず。宗いまたきくへからず。又ひとへに。龜布を衣財にさたむこと。ふかく佛法にそむく。ことに佛衣をやぶれり。佛弟子きるへきにあらす。ゆゑはいかん。布見を擧して。袈裟をやふれり。あはれむべし。小乘聲聞の見。まさに迂曲なることを。なん

ちか布見やふれてのち佛衣現成すへきなり。いふところの絹布の用は。一佛二佛の道にあらず。諸佛の大法として。糞掃を上品清淨の衣財とせるなり。そのなかに。しはらく十種の糞掃をつらぬるに。絹類あり。布類あり。餘帛の類もあり。絹類の糞掃をとるべからざるか。もしかくのことくならば。佛道に相違す。絹すてにきは。布またきはふべし。絹布きはふべき。そのゆゑなにかある。絹絲は殺生より生せるときらふ。おほきにわらふべきなり。布は生物の縁にあらざるか。情非情の情。いまた凡情を解脱せず。いかてか佛袈裟をしらん。又化絲の説をむたして。亂道することあり。又わらふへし。いつれか化にあらざる。なんぢ化をきくみ。を信ずといへとも。化をみる目をうたがふ。目に耳なし。耳に目なきか。ことし。いまの耳目。いつれのところにかある。しはらくしるべし。糞掃をひろふなかに。絹にいたる布あり。布のことくなる絹あらん。これをもちぬんには。絹となつくべからず。布と稱すへからず。まさに糞掃と稱すべし。糞掃なる

かゆゑに。糞掃にして絹にあらず。布にあらざるなり。たとひ人天の糞掃と生長せるありとも。有情といふへからず。糞掃なるべし。たとひ松菊の糞掃となれるありとも。非情といふへからず。糞掃なるべし。糞掃の絹布にあらず。珠玉をはなれたる道理をしるとき。糞掃衣は現成するなり。糞掃衣にはむまれあふなり。絹布の見。いまた零落せざるは。いまた糞掃を夢也。未見なり。たとひ龜布を袈裟として。一生受持すとも。布見をおほゑらんは。佛衣正傳にあらざるなり。又數般の袈裟のなかに。布袈裟あり。絹袈裟あり。皮袈裟あり。ともに諸佛のもちあるところ。佛衣佛功德なり。正傳せる宗旨あり。いまた斷絶せず。しかあるを凡情。いまた解脱せざるとも。から。佛法をかるくし。佛語を信せず。凡情に隨他去せんと擬する。附佛法の外道といふつへし。壞正法のたぐひなり。あるひはいふ。天人のおしへによりて。佛衣をあらたむと。しかあらば。天佛をねかふべし。又天の流類となれるか。佛弟子は佛法を天人のために宣説すべし。道を天人にとふべ

からず。あはれむべし。佛法の正傳なきは。かくのごとくなり。天衆の見と佛子の見と。大小はかるにことなることあれども。天くたりて法を佛弟子にとぶらふ。そのゆゑは佛見と天見とはるかにことなるがゆゑなり。律家聲聞の小見をすててまなぶことなかれ。小乗なりとしるべし。佛言。殺父殺母は懺悔しつべし。謗法は懺悔すべからず。おほよそ小見狐疑の道は佛の本意にあらず。佛法の大道は。小乗およふところなきなり。諸佛の大戒を正傳すること。附法藏の祖道のほかに。ありとしれるものなし。むかし。黄梅の夜半に。佛の衣法すてに六祖の頂上に正傳す。まことにこれ傳法傳衣の正傳なり。五祖の人をしるによりてなり。四果三賢のやから。および十聖等のたぐひ。教家の論師經師等のたぐひは。神秀にさづくべし。六祖に正傳すべからず。しかあれとも佛祖の佛祖を選するに。凡情路を超越するかゆゑに。六祖すてに六祖となれるなり。しるべし。佛祖嫡々の知人知己の道理。なほざりに測量すへきところにあらざるなり。のち

にある僧。すなはち六祖にとふ。黄梅の夜半の傳衣。これ布なりとやせん。絹なりとやせん。帛なりとやせん。畢竟してこれなにものかせん。六祖いはく。これ布にあらず。これ絹にあらず。これ帛にあらず。曹谿高祖の道かくのごとし。しるべし。佛衣は絹にあらず。布にあらず。屈晦にあらざるなり。しかあるをいたつらに絹と認し。布と認し。屈晦と認するは。謗佛法のたぐひなり。いかにしてか。佛袈裟をしらん。いはんや。善來得戒の機縁あり。かれらが所得の袈裟。さらに絹布の論にあらざるは。佛道の佛訓なり。また商那和修か衣は。在家の時は俗服なり。出家すれば袈裟となる。この道理しつかに。思量功夫すべし。見聞せざるがごとくして。さしおくへきにあらず。いはんや。佛祖正傳しきたれる宗旨あり。文字かぞふるたくひ。覺知すべからず。測量すべからず。まことに佛道の千變萬化。いかてか。庸流の境界ならん。三昧あり。陀羅尼あり。算沙のともから。絹裏の寶珠をみるへからず。いま佛祖正傳せる袈裟の體色量。を諸佛の袈裟の正本と

すべし。その例すてに西天東地古往今來ひさしきなり。正邪を分別せし人。すてに超證しき。祖道のほかに。袈裟を稱するありとも。いまた枝葉とゆるす。本祖あらず。いかてか善根の種子をきざさん。いはんや果實あらんや。われらいま廣劫已來。いまだあはざる佛法を見聞するのみにあらず。佛衣を見聞し。佛衣を學習し。佛衣を受持すること。をふたり。すなはち。これまさしく佛を見たてまつるなり。佛音聲をきく。佛光明をはなつ。佛受用を受用す。佛心を單傳するなり。得佛髓なり。袈裟をつくる。衣財かならず清淨なるをもちゐる。清淨といふは。淨信檀那の供養するところの衣財。あるひは市にて買得するもの。あるひは天衆のおくるところ。あるひは龍神の淨施。あるひは鬼神の淨施。あるひは國王大臣の淨施。あるひは淨皮。かくのことく衣財。共にもちゐるべし。また十種の糞掃衣を清淨なりとす。いはゆる十種糞掃衣。

- 一者牛嚼衣
- 二者鼠嚙衣
- 三者火燒衣
- 四者月水衣

- 五者産婦衣
- 六者神廟衣
- 七者塚間衣
- 八者求願衣

- 九者王職衣
- 十者往還衣

この十種をことに清淨の衣財とせるなり。世俗には拋捨す。佛道にはもちゐる。世間と佛道と。その家業はかりしるべし。しかあればすなはち清淨をもとめんとときは。この十種をもとむべし。これをふて。淨をしり不淨を辨肯すべし。心をしり身を辨肯すへし。この十種をふて。たとひ絹類なりとも。たとひ布類なりとも。その淨不淨を商量すへきなり。この糞掃衣をもちゐることは。いたつらに敝衣にやつれたらんがためと學するは至愚なるべし。莊嚴奇麗ならんかために佛道に用着しきたれるところなり。佛道にやつれたる衣服とならんことは。錦繡綾羅金銀珍珠等の衣服の不淨よりきたれるを。やつれたるとはいふなり。おほよそ此土他界の佛道に。清淨奇麗をもちゐるには。この十種それなるへし。これ淨不淨の邊際を超越せるのみにあらず。漏無漏の境界にあらず。色心を論ずることなかれ。得

失にかゝはれざるなり。たゞ正傳受持するはこれ佛祖なり。佛祖たる
るとき正傳稟受するかゆゑに。佛祖としてこれを受持するは。身の
現不現によらず。心の擧不擧によらず。正傳せられゆくなり。たまた
さにこの日本國には。近來の僧尼ひさしく袈裟を着せざりつること
をかなしむべし。いま受持せんことをよるこぶべし。在家の男女。
なほ佛戒を受持せんは。五條七條九條の袈裟を着すべし。いはんや
出家人いかてか着せざらん。はじめ梵王六天より。姪男姪女奴婢に
いたるまでも。佛戒をうくべし。袈裟を着すべしといふ。比丘比丘尼
これを着せざらんや。畜生なほ佛戒をうくべし。袈裟をかくへしと
いふ。佛子なにとしてか佛衣を着せざらん。しかあれば佛子となら
んは。天上人間國王百宮をとはず。在家出家。奴婢畜生を論せず。佛戒
を受持し。袈裟を正傳すべし。まさに佛位に正入する直道也。
予在宋のそのかみ長連床に功夫せしとき。齊肩の隣單をみるに。毎
曉の開靜のとき。袈裟をささげて頂上に安置し。合掌恭敬しき。一偈

を默誦す。ときに予未曾見のおもひをなし。歡喜みにあまり。感涙ひ
そかにおちて。衣襟をうるほす。阿舍經を披閱せしとき。頂戴袈裟の
文をみるといへとも不分曉なり。いまはまのあたりみる。歡喜隨喜
し。ひそかにおもはく。あはれむべし。郷土にありしには。おしふる師
匠なし。かたる善友にあはず。いくはくかいたつらにすぐる光陰を
おしまざる。かなしまさらめや。いまこれを見聞す。宿善よろこぶべ
し。もしいたつらに本國の諸寺に交肩せば。いかてかまさしく佛衣
を着せる僧寶と隣肩なることをゑん。悲喜ひとかたにあらず。感涙
千萬行。ときにひそかに發願す。いかにしてかは。不肖なりといふと
も。佛法の正嫡を正傳して。郷土の衆生をあはれむに。佛々正傳の衣
法を見聞せしめん。かのときの發願いまむなしからず。袈裟を受持
せる在家出家の菩薩おほし。歡喜するところなり。受持袈裟のとも
から。かならず日夜に頂戴すべし。殊勝最勝の功德なるべし。一句一
偈を見聞することは。若樹若石の因縁もあるべし。袈裟正傳の功德

は十方に難遇ならん。大宋嘉定十七年癸未冬十月中、三韓の僧二人ありて慶元府にきたれり。一人はいはく智玄。一人は景雲。この二人ともにしきりに佛經の儀を談す。あまつさへ文學の士なり。しかあれとも袈裟なし。鉢盂なし。俗人のごとし。あはれむへし比丘形なりといへとも。比丘法なきこと。小國邊地のゆゑなるべし。我朝の比丘形のともがら他國にゆかんととき。かの二僧のことくならん。釋迦牟尼佛すてに十二年中頂戴して。さしおきましまさるゝなり。すてに遠孫としてこれを學すべし。いたつらに名利のために天を拜し。神を拜し。王を拜し。臣を拜する頂門を。いま佛衣頂戴に廻向せん。よろこふべき大慶なり。

正法眼藏傳衣

ときに仁治元年庚子開冬日記于觀音導利興聖寶林寺

入宋傳法沙門 道元

袈裟澆濯之時。須用衆末香和水。灑乾之後。疊收安置高處。以香華而供。

養之。三拜然後踞跪。頂戴合掌。致信唱此偈。

大哉解脫服。無相福田衣。披奉如來教。廣度諸衆生。

三唱而後。立地披奉。

正法眼藏山水經

而今の山水は古佛の道現成なり。ともに法位に住して究盡の功德を成せり。空劫已前の消息なるかゆゑに而今の活計なり。朕兆未萌の自己なるかゆゑに現成の透脱なり。山の諸功德高廣なるをもて。乘雲の道德かならず山より通達す。順風の妙功。さためて山より透脱するなり。

大陽山楷和尚示衆云。青山常運歩。石女夜生兒。

山はそなはるへき功德の虧闕することなし。このゆゑに常安住なり。常運歩なり。その運歩の功德。まさに審細に參學すへし。山の運歩は人の運歩のことくなるへきかゆゑに人間の行歩におなしくみえされはとて山の運歩をうたかふことなかれ。いま佛祖の説道すてに運歩を指示す。これその得本なり。常運歩の示衆を究辨すへし。運歩のゆゑに常なり。青山の運歩は其疾如風よりもすみやかなれとも。山中人は不覺不知なり。山中とは世界裏の華開なり。山外人は

究福本
に窮に
作る

不覺不知なり。山をみる眼目あらざる人は不覺不知。不見不聞。這箇道理なり。もし山の運歩を疑著するは自己の運歩をもいまたしらざるなり。自己の運歩なきにはあらず。自己の運歩いまたしらざるなり。あきらめざるなり。自己の運歩をしらんかとき。まさに青山の運歩をもしるへきなり。青山すてに有情にあらず。非情にあらず。自己すてに有情にあらず。非情にあらず。いま青山の運歩を疑著せんことうへからず。いく法界を量局として。青山を照鑑すへしとしらす。青山の運歩。およひ自己の運歩。あきらかに檢點すへきなり。退歩退。ともに檢點あるへし。未朕兆の正當時。およひ空王那畔より。進歩退歩に。運歩しはらくもやまさること。檢點すへし。運歩もし休すること。あらは佛祖不出現なり。運歩もし究極。あらは佛法不到。今日ならん。進歩いまたやます。退歩いまたやます。進歩のとき退歩に乖向せず。退歩のとき進歩を乖向せず。この功德を山流とし。流山とす。青山も運歩を參究し。東山も水上行を參學するかゆゑに。この參

とを福
本と山
をに作
るを本
小聞清
本に少
間に作

學は山の參學なり。山の身心をあらためず。山の面目なから。廻途參學しきたれり。青山は運步不得なり。東山水上行不得なるとを。誹謗することなかれ。低下の見處のいやしきゆゑに。青山運步の句をあやしむなり。小聞のつたなきによりて。流山の語をおとろくなり。いま流水の言も。七通八達せずといへとも。小見小聞に沈溺せるのみなり。しかあれば。所積の功德を擧せるを。形名とし命脈とせり。運步あり流行あり。山の山兒を生ずる時節あり。山の佛祖となる道理によりて。佛祖かくのことく出現せるなり。たとひ艸木土石牆壁の現成する眼睛あらんときも。疑著にあらず。動著にあらず。全現成にあらず。たとひ七寶莊嚴なりと見取せらるる時節現成すとも。實歸にあらず。たとひ諸佛行道の境界と見現成あるも。あなかちの愛處にあらず。たとひ諸佛不思議の功德と見現成の頂顛をうとも。如實これのみにあらず。各各の見成は。各各の依正なり。これらを佛祖の道業とするにあらず。一隅の管見なり。轉境轉心は。大聖の所呵なり。説

心説性は。佛祖の所不肖なり。見心見性は。外道の活計なり。滯言滯句は。解脱の道著にあらず。かくのことくの境界を透脱せるあり。いはゆる青山常運步なり。東山水上行なり。審細に參究すへし。石女夜生兒は石女の生兒するときを夜といふ。おほよそ男石女石あり。非男女石あり。これよく天を補し地を補す。天石あり地石あり。俗のいふところなりといへとも。人のしるところまれなるなり。生兒の道理しるへし。生兒のときは。親子並化するか。兒の親となるを。生兒現成と參學するのみならんや。親の兒となるときを。生兒現成の修證なりと參學すへし。究徹すへし。雲門匡眞大師いはく。東山水上行。この道現成の宗旨は。諸山は東山なり。一切の東山は水上行なり。このゆゑに九山迷虛等の現成せり。修證せり。これを東山といふ。しかあれとも雲門いかてか。東山の皮肉骨髓。修證活計に透脱ならん。いま現在大宋國に杜撰のやから。一類あり。いまは群をなせり。小實の擊不能なるところなり。かれらはいはく。いまの東山水上行話。およひ南泉

の鎌子話のときは無理會話なり。その意旨はもろもろの念慮にかかはれる語話は佛祖の禪話にあらず。無理會話これ佛祖の語話なり。かるかゆゑに黄檗の行棒。および臨濟の舉喝。これら理會およびかたたく念慮にかかはれず。これを朕兆未萌已前の大悟とするなり。先徳の方便。おほく葛藤斷句をもちゐるといふは。無理會なり。かくのことくいふやから。かつていまた正師をみず。參學眼なし。いふにたらさる小獸子なり。宋土ちかく二三百よりこのかた。かくのことく。の魔子六群。禿子おほし。あはれむへし。佛祖の大道の廢するなり。これらか所解。なほ小乘聲聞におよはず。外道よりもおろかなり。俗にあらず。僧にあらず。人にあらず。天にあらず。學佛道の畜生よりもおろかなり。禿子かいふ無理會話。なんちのみ無理會なり。佛祖はしかあらず。なんちに理會せられされはとて。佛祖の理會路を參學せざるへからず。たとひ畢竟無理會なるへくは。なんちかいまいふ理會も。あたるへからず。しかのことく。のたくひ。宋朝の諸方にお

ほしまのあたり見聞せしところなり。あはれむへしかれら念慮の語句なることをしらす。語句の念慮を透脱することをしらす。在宋のときかれらをわらふに。かれら所陳なし。無語なりしのみなり。かれらかいまの無理會の邪計なるのみなり。たれかなんちにをしふる天真の師範なしといへとも。自然の外道見なり。しるへしこの東山水上行は。佛祖の骨髓なり。諸水は東山の脚下に現成せり。このゆゑに諸山くもにのり天をあゆむ。諸水の頂嶺は諸山なり。向上直下の行歩。ともに水上なり。諸山の脚尖。よく諸水を行歩し。諸水を趣出せしむるゆゑに。運歩七縦八横なり。修證即不無なり。水は強弱にあらず。濕乾にあらず。動靜にあらず。冷暖にあらず。有無にあらず。迷悟にあらず。なり。こりては金剛よりもかたしたれか。これをやふらん。融しては乳水よりもやはらかなり。たれかこれをやふらん。しかあれはす。なほち現成所有の功德をあやしむこと。あたはず。しはらく十方の水を十方にして。著眼看すへき時節を參學すへし。人天の

水をみるときのみの參學にあらず。水の水をみる參學あり。水の水を修證するかゆゑに。水の水を道著する參究あり。自己の自己に相逢する通路を現成せしむへし。佗己の佗己を參徹する活路を進退すへし。跳出すへし。おほよそ山水をみることに種類にしたかひて不同あり。いはゆる水をみるに瓔珞とみるものあり。しかあれとも瓔珞を水とみるにはあらず。われらかなにとみるかたちをかれか水とすらん。かれか瓔珞はわれ水とみる。水を妙華とみるあり。しかあれとも華を水ともちるるにあらず。鬼は水をもて猛火とみる。濃血とみる。龍魚は宮殿とみる。樓臺とみるあるひは七寶摩尼珠とみる。あるひは樹林牆壁とみる。あるひは清淨解脱の法性とみる。あるひは眞實人體とみる。あるひは身相心性とみる。人間これを水とみる。殺活の因縁なり。すてに隨類の所見不同なり。しはらくこれを疑著すへし。一境をみるに諸見しななりとやせん。諸象を一境なりと誤錯せりとやせん。功夫の頂嶺にさらに功夫すへし。しかあれは

福本水
はの字
無し
清本風
下に空
字無し

すなはち修證辨道も一般兩般なるへからず。究竟の境界も千種萬般なるへきなり。さらにこの宗旨を憶想するに。諸類の水たとひおほしといへとも本水なきかことし。諸類の水なきかことし。しかあれとも隨類の諸水それ心によらず身によらず。業より生せず。依自にあらず。依佗にあらず。依水の透脱あり。しかあれは水は地水火風空識等にあらず。水は青黃赤白黒等にあらず。色聲香味觸法等にあらず。れとも。地水火風空等の水おのつから現成せり。かくのことくなれば而今の國土宮殿なもの。能成所成とあきらめいはんことかたかるへし。空輪風輪にかかると道著する。わかまことにあらず。佗のまことにあらず。小見の測度を擬議するなり。かかれるところなくは住すへからずとおもふによりて。この道著するなり。佛言。一切諸法。畢竟解脱。無有所住。しるへし。解脱にして繫縛なしといへとも。諸法住位せり。しかあるに人間の水をみるに。流注してととまらざるとみる一途あり。その流に多般あり。これ人見の一端な

り。いはゆる地を流通し空を流通し。上方に流通し。下方に流通す。一
 曲にもなかれ。九淵にもなかる。のほりて雲をなし。くたりてふちを
 なす。文子曰。水之道。上天爲雨露。下地爲江河。いま俗のいふところな
 ほかくのことし。佛祖の兒孫と稱せんともから。俗よりもくから。ら
 んはもともはつへし。いはく水の道は水の所知覺にあらされとも。
 水よく現行す。水の不知覺にあらされとも。水よく現行するなり。上
 天爲雨露といふ。しるへし。水はいくそはくの上。天上方えものほり
 て雨露をなすなり。雨露は世界にしたかふてしななり。水のい
 たらさるところあるといふは。小乘聲聞教なり。あるひは外道の邪
 教なり。水は火焰裏にもいたるなり。心念思量分別裏にもいたるな
 り。覺知佛性裏にもいたるなり。下地爲江河。しるへし。水の下地する
 とき。江河をなすなり。江河の精よく賢人となる。いま凡愚庸流のお
 もはくは。水はかならず江河海川にあるとおもへり。しかにはあら
 ず。水のなかに江海をなせり。しかあれば江海ならぬところにも水

え一本
へに作
る

清本佛
上には
字無し

清本火
字無し

はあり。水の下地するとき。江海の功をなすのみなり。また水の江海
 をなしつるところなれば。世界あるへからず。佛土あるへからずと
 學すへからず。一滴のなかにも無量の佛國土現成なり。しかあれば
 佛土のなかに水あるにあらず。水裏に佛土あるにあらず。水の所在
 すでに三際にかかはれず。法界にかかはれず。しかもかくのことく
 なりといへとも。水現成の公案なり。佛祖のいたるところには水か
 ならずいたる。水のいたるところには。佛祖かならず現成するなり。
 これによりて佛祖かならず水を拈して身心とし。思量とせり。しか
 あれば。すなはち水はかみにのほらすといふは。内外の典籍にあら
 ず。水之道は。上下縦横に通達するなり。しかあるに佛經のなかに。火
 風は上にのほり。地水は下にくたると。この上下は。參學するところあ
 り。いはゆる佛道の上下を參學するなり。いはゆる地水のゆくところ
 ろを下とするなり。下を地水のゆくところとするにあらず。火風の
 ゆくところは上なり。法界かならずしも上下四維の量にかかはる

る清本
しのは下無

流なり。拈一はこれ不流なり。一回は流なり。一回は不流なり。この参
 究なきかこときは。如來正法輪にあらす。古佛いはく。欲得不招無間
 業。莫謗如來正法輪。この道を皮肉骨髓に銘すへし。身心依正に銘す
 へし。空に銘すへし。色に銘すへし。若樹若石に銘せり。若田若里に銘
 せり。おほよそ山は國界に屬せりといへとも。山を愛する人に屬す
 るなり。山かならず主を愛するとき。聖賢高德やまに在るなり。聖賢
 やまにすむとき。やまこれに屬するかゆゑに。樹石鬱茂なり。禽獸靈
 秀なり。これ聖賢の徳をかうふらしむるゆゑなり。しるへし山は賢
 をこのむ實あり。聖をこのむ實あり。帝者おほく山に幸して賢人を
 拜し大聖を拜問するは。古今の勝躅なり。このとき師禮をもてうや
 まふ。民間の法に準することなし。聖化のおよふところ。またく山賢
 を強爲することなし。山の人間をはなれたることしりぬへし。崆峒
 華封のそのかみ。黃帝これを拜請するに膝行して叩頭して廣成に
 とふしなり。釋迦牟尼佛。かつて父王の宮をいてて山えいれり。しか

一本よ
をひに
えをへ
に作る

人清本
る水に作

あれとも父王やまをうらみす。父王やまにありて太子ををしふる
 ともからをあやします。十二年の修道おほく山にあり。法王の運啓
 も在山なり。まことに輪王なほ山を強爲せず。しるへし山は人間の
 さかひにあらす。上天のさかひにあらす。人慮の測度をもて山を知
 見すへからす。もし人間の流に比準せすは。たれか山流山不流等を
 疑著せん。あるひはむかしよりの賢人聖人。ままに水にすむもあり。
 水にすむとき。魚をつるあり。人をつるあり。道をつるあり。これとも
 に古來水中の風流なり。さらにすすみて自己をつるあるへし。釣を
 つるあるへし。釣につらるるあるへし。道につらるるあるへし。むか
 し徳誠和尚。たちまちに薬山をはなれて。江心にすみし。すなはち華
 亭江の賢聖をえたるなり。魚をつらさらんや。人をつらさらんや。水
 をつらさらんや。みつからをつらさらんや。人の徳誠をみることを
 うるは徳誠なり。徳誠の人を接するは。人にあふなり。世界に水あり
 といふのみにあらす。水界に世界あり。水中のかくのことくあるの

みにあらず。雲中にも有情世界あり。風中にも有情世界あり。火中にも有情世界あり。地中にも有情世界あり。法界中にも有情世界あり。一莖艸中にも有情世界あり。一拄杖中にも有情世界あり。有情世界あるか。こときは。そのところかならず。佛祖世界あり。かくのことくの道理。よくよく參學すへし。しかあれば。水はこれ眞龍の宮なり。流落にあらず。流のみなりと認するは。流のことは。水を誇するなり。たとへは。非流と強爲するかゆゑに。水は水の如是實相のみなり。水是水功德なり。流にあらず。一水の流を參究し。不流を參究するに。萬法の究盡。たちまちに現成するなり。山も塞にかくるる山あり。澤にかくるる山あり。空にかくるる山あり。山にかくるる山あり。藏に藏山する參學あり。古佛いはく。山是山水是水。この道取は。山是山といふにあらず。山是山といふなり。しかあれば。山を參究すへし。山を參究すれば。山に功夫なり。かくのことくの山水。おのつから賢をなし。聖をなすなり。

正法眼藏山水經

爾時仁治元年庚子十月十八日在于觀音導利興聖塞林寺示衆

正法眼藏佛祖

宗禮佛祖の現成は佛祖を舉拈して奉觀するなり。過現當來のみにあらず。佛向上よりも。向上なるへし。まさに佛祖の面目を保任せるを拈して。禮拜し相見す。佛祖の功德を現舉せしめて。住持しきたり。禮證しきたれり。

禮一作
るに作

毘婆尸佛大和尚(此云廣說) 尸棄佛大和尚(此云火) 毘舍浮佛大和尚(此云一切慈) 拘留孫佛大和尚(此云金仙人) 拘那含牟尼佛大和尚(此云金色仙) 迦葉佛大和尚(此云飲光) 釋迦牟尼佛大和尚(此云能仁寂默)

- 第一 摩訶迦葉大和尚
- 第二 阿難陀大和尚
- 第三 商那和修大和尚
- 第四 優婆鞠多大和尚
- 第五 提多迦大和尚

- 第六 彌遮迦大和尚
- 第七 婆須蜜多大和尚
- 第八 佛陀難提大和尚
- 第九 伏駄蜜多大和尚
- 第十 婆栗濕縛大和尚
- 第十一 富那夜奢大和尚
- 第十二 馬鳴大和尚
- 第十三 迦毘摩羅大和尚
- 第十四 那伽闍刺樹那大和尚(又龍樹又龍勝又龍猛)
- 第十五 伽那提婆大和尚
- 第十六 羅睺羅多大和尚
- 第十七 僧伽難提大和尚
- 第十八 伽耶舍多大和尚
- 第十九 鳩摩羅多大和尚

第二十 闇夜多大和尚

第二十一 婆修盤頭大和尚

第二十二 摩奴羅大和尚

第二十三 鶴勒那大和尚

第二十四 獅子大和尚

第二十五 婆舍斯多大和尚

第二十六 不如蜜多大和尚

第二十七 般若多羅大和尚

第二十八 菩提達磨大和尚

慧可大和尚

道信大和尚

慧能大和尚

希遷大和尚

曇晟大和尚

僧璨大和尚

弘忍大和尚

行思大和尚

惟儼大和尚

良价大和尚

道膺大和尚

觀志大和尚

警玄大和尚

道階大和尚

清了大和尚

智鑑大和尚

道丕大和尚

緣觀大和尚

義青大和尚

子淳大和尚

宗珽大和尚

如淨大和尚

道元大宋國寶慶元年乙酉夏安居時。先師天童古佛大和尚に參侍して。この佛祖を禮拜頂戴することを究盡せり。唯佛與佛なり。

正法眼藏佛祖

爾時仁治二年辛丑正月三日書于日本國雍州宇治縣觀音導利興聖寶林寺而示衆

正法眼藏嗣書

の一本
に作る

佛佛かならず佛佛に嗣法し。祖祖かならず祖祖に嗣法する。これ證契なり。これ單傳なり。このゆへに無上菩提なり。佛にあらされは佛を印證することあたはず。佛の印證を承されは佛となることなし。佛にあらすよりはたれかこれを最尊なりとし。無上なりと印可することあらん。佛の印證をうるべき。無師獨悟するなり。無自獨悟するなり。このゆへに。佛佛證嗣し。祖祖證契すといふなり。この道理の宗旨は佛佛にあらされは。あきらむべきにあらず。いはんや十地等覺の所量ならんや。いかにいはんや。經師論師等の測度するところならんや。たとひ爲説すとも。かれらきくへからず。佛佛相嗣するかゆへに。しるへし。佛道はたゞ佛佛の究盡にして。佛佛にあらざる時節あらず。たとへは石は石に相嗣し。玉は玉に相嗣することあり。菊も相嗣あり。松も印證するに。みな前菊後菊如如なり。前松後松如如なるか。ことし。かくのことくなるを。あきらめさるとも。から佛佛正

一本
につか
は作る

傳の道にあふといへとも。いかにある道得ならんと。あやしむにも。およはず。佛佛相嗣し。祖祖證契すといふ。領覽あることなし。あはれむへし。佛種族に相似なりといへとも。佛子にあらざること。子佛にあらざること。曹溪あるとき。衆にしめして。いはく。七佛より慧能にいたるに。四十佛あり。慧能より七佛にいたるに。四十祖あり。この道理あきらかに。佛祖正嗣の宗旨なり。いはゆる七佛は過去莊嚴劫に出現せるもあり。現在賢劫に出現せるもあり。しかあるを。四十祖の面授をつらぬるは。佛道なり。佛嗣なり。しかあはれは。すなはち六祖より向上して七佛にいたれば。四十祖の佛嗣あり。七佛より向下して六祖にいたるに。四十佛の佛嗣なるへし。佛道祖道かくのことし。證契にあらず。佛祖にあらされは。佛智慧にあらず。祖究盡にあらず。佛智慧にあらず。されは。佛信受なし。祖究盡にあらず。されは。祖證契せず。しは。らく四十祖といふは。ちかきをか。つ。擧するなり。これによりて。佛佛の相嗣すること。深遠にして。不退不轉なり。不斷不絶なり。そ

ひ一本
しに作
る

の宗旨は釋迦牟尼佛は七佛已前に成道すといへともひさしく迦葉佛に嗣法せるなり。降生より三十歳十二月八日に成道すといへとも七佛已前の成道なり。諸佛齊肩同時の同成道なり。諸佛已前の成道なり。一切の諸佛より末上の成道なり。さらに迦葉佛は釋迦牟尼佛に嗣法すると參究する道理あり。この道理をしらざるは佛道をあきらめず佛道をあきらめされは佛嗣にあらず佛嗣といふは佛子といふことなり。釋迦牟尼佛あるとき阿難にとはしむ過去の諸佛はこれ我釋迦牟尼佛の弟子なり。諸佛の佛義かくのことし。この諸佛に奉觀して佛嗣を成就せん。すなはち佛佛の佛道にてあるへし。この佛道かならず嗣法するとき。さためて嗣書あり。もし嗣法なきは天然外道なり。佛道もし嗣法を決定するにあらずよりは。いかてか今日にいたらん。これによりて佛佛なるには。さためて佛佛の嗣書あるなり。佛佛の嗣書をうるなり。その嗣書の爲體は日月星辰

せんに
むせし
るに作
る

をあきらめて嗣法す。あるひは皮肉骨髓を得せしめて嗣法す。あるひは袈裟を相嗣し。あるひは拄杖を相嗣し。あるひは松枝を相嗣し。あるひは拂子を相嗣し。あるひは優曇華を相嗣し。あるひは金襴衣を相嗣す。鞞鞋の相嗣あり。竹篋の相嗣あり。これらの嗣法を相嗣するときは。あるひは指血をして嗣書し。あるひは舌血をして嗣書す。あるひは油乳をもてかき嗣法する。ともにこれ嗣書なり。嗣せるもの。得せるもの。ともにこれ佛嗣なり。まことにそれ佛祖として現成するときは。嗣法かならず現成す。現成するとき。期せされともきたり。もとめされとも嗣法せる佛祖おほし。嗣法あるはかならず佛佛祖なり。

第二十八祖西來よりこのかた佛道に嗣法ある宗旨を東土に正聞するなり。それよりさきは。かつていまたきかざりしなり。西天の論師法師等およはすし。らさるところなり。およひ十聖三賢の境界およばざるところ。三藏義學の咒術師等は。あるらんと疑著するにも

系一本
えに作

系一本
えに作

およはず。かなしむへし。かれら道器なる人身をうけなから。いたつらに教網にまつはれて。透脱の法をしらす。跳出の期を期せざることをかるかゆへに。學道を密細にすへきなり。參究の志氣をもはらすへきなり。道元在宋のとき。嗣書を禮拜することを。系しに。多般の嗣書ありき。そのなかに。惟一西堂とて。天童に掛錫せしは。越上の人事なり。前住廣福寺の堂頭なり。先師と同郷人なり。先師つねにいはいく。境風は一西堂に問取すへし。あるとき西堂いはいく。古蹟の可觀は人間の珍玩なり。いくはくか見來せる。道元いはいく。見來すくなし。ときに西堂いはいく。吾那裏に一軸の古蹟あり。恁麼次第なり。與老兄看といひて。携來をみれば。嗣書なり。法眼下の嗣書にてありけるを。老宿の衣鉢のなかより。系たりけり。惟一長老のには。あらさりけり。かれにかきたりしは。

初祖摩訶迦葉。悟於釋迦牟尼佛。釋迦牟尼佛。悟迦葉佛。かくのことくかきたり。道元これをみしに。正嫡の正嫡に嗣法あることを決定信

系一本
へに作

五一本
吾に作
ら一本
るに作
子師一本
るに作

受す。未曾見の法なり。佛祖の冥感して。兒孫を護持する時節なり。感激不勝なり。

雲門下の嗣書とて。宗月長老の天童の首座職に充せしとき。道元にみせしは。いま嗣書をうる人のつきかみの師。およひ西天東地の佛祖をならへつらねて。その下頭に嗣書をうる人の名字あり。諸佛祖より直にいまの新祖師の名字につらぬるなり。しかあれは如來より四十餘代ともに新嗣の名字へきたれり。たと。系は各々の新祖にさつけたるかことし。摩訶迦葉阿難陀等は。餘門のことくにつらぬれり。ときに道元宗月首座にとふ。和尚いま五家の宗派をつらぬるに。いさゝか同異あり。そのころいはいかん。西天より嫡々相嗣せらば。なんそ同異あらんや。宗月いはいく。たとひ同異はるかなりとも。たたまさに雲門山の佛はかくのことく。なると學すへし。釋迦老師。なによりてか尊重他なる。悟道によりて尊重なり。雲門大師。なにによりてか尊重他なる。悟道によりて尊重なり。道元この説をきくに。い

一本はくしの三字なる

お一本ほに作る

ささか領覽あり。いま江浙に大利の主とあるは。おほく臨濟雲門洞山等の嗣法なり。しかあるに臨濟の遠孫と自稱するやから。ままたくはたつる不是あり。いはく。善知識の會下に參して。頂相一幅。法語一軸を懇請して。嗣法の標準にそなふ。しかあるに一類の狗子あり。尊宿のおとりに。法語頂相等を懇請して。かくしたくはふること。あまたあるに。晩年におよびて官家に陪錢し。一院を討得して。住持職に補するときは。法語頂相の師に嗣法せず。當代の名譽のともから。あるひは王臣に親附なる長老等に嗣法するときは。得法をとはず。名譽をむさほるのみなり。かなしむへし末法惡時かくのことくの邪風あることを。かくのことくのやからのなかに。いまたかつて一人としても。佛祖の道を夢にも見聞せるあらず。おほよそ法語頂相等をゆるすことは。教家の講師。およひ在家の男女等にもさつく。行者商客等にもゆるすなり。そのむね諸家の録にあきらかなり。あるひはそのひとにあらざるが。みたりに嗣法の證據をのそむにより

師嗣に一本作る

多一本るまに作る

て。一軸の書をもとむるに。有道のいたむところなりといへとも。なまじひに援筆するなり。しかのときは。古來の書式によらず。いささか嗣吾のよしをかく。近來の法は。たたその師の會下にて得力すれば。すなはちかの師を師と嗣法するなり。かつてその師の印を。ふされとも。たた入室上堂に咨參して。長連牀にあるともから。住院のときは。その師承を擧するにいとまあらされとも。大事打開するときは。その師を師とせるのみおほし。また龍門佛眼禪師。清遠和尚の遠孫にて。傳藏主といふものありき。かの傳藏主また嗣書を帶せり。嘉定のはしめに。隆禪上座。日本國の人なりといへとも。かの傳藏主やまひしけるに。隆禪よく傳藏主を看病しけるに。勤勞しきりなるによりて。看病の勞を謝せんかため。嗣書をとりいたして。禮拜せしめけり。みがたきものなり。與備禮拜といひけり。それよりこのかた八年のち。嘉定十六年癸未あきのころ。道元はしめて。天童山に寓止するに。隆禪上座ねんころに。傳藏主に請して。嗣書を道元にみせ

し。その嗣書の様は。七佛よりのち臨濟にいたるまで。四十五祖をつらねかきて。臨濟よりのちの師は。一圓相をつくりて。そのなかにめぐらして。法諱と華字とをうつしかけり。新嗣はおはりに年月の下頭にかけり。臨濟下の尊宿に。かくのことく不同ありとしるへし。先師天童堂頭。ふかく人のみたりに嗣法を稱することをいましむ。まことに先師の會は。これ古佛の會なり。叢林の中興なり。みづからもまたらなる袈裟をかけず。芙蓉山の道楷禪師の衲法衣つたはれりといへとも。上堂陞座にもちるす。おほよそ住持職として。またらなる法衣かつて。一生のうちにかけず。ころあるものしらさるも。ともにほめき。眞善知識なりと尊重す。先師古佛上堂するにつねに諸方をいましめていはいはく。近來おほく祖道に名をかれるやから。みたりに法衣を搭し。長髪をこのみ。師號に署するを出世の舟航とせり。あはれむへしたれかこれをすくはん。うらむらくは諸方長老無道心にして。學道せざることを。嗣書嗣法の因縁を見聞せるもの

夷一本
遅に作
る

一本
はの二
字なし

なほまれなり。百千人中一箇也。無これ祖道陵夷なり。かくのことくよのつねにいましむるに。天下の長老うらみす。しかあればすなはち。誠心辨道することあらは。嗣書あることを見聞すへし。見聞することあるは。學道なるへし。臨濟の嗣書は。まつその名字をかきて。某甲子われに參すともかき。わか會にきたれりともかき。入吾堂奥ともかき。嗣吾ともかきて。ついでのことく。前代をつらぬるなり。かれもいささかいひきたれる法訓あり。いはゆる宗趣は。嗣はおはりはしめにかかはれず。たた眞善知識を相見する。的々の宗旨なり。臨濟にはかくのことくかけるもあり。まのあたりみしによりてしるす。了派藏主者。威武人也。今吾子也。德光參待徑山。杲和尚。徑山嗣。夾山勤。勤嗣。楊岐演。演嗣。海會端。端嗣。楊岐會。會嗣。慈明圓。圓嗣。汾陽照。照嗣。首山念。念嗣。風穴沼。沼嗣。南院顛。顛嗣。興化契。契是臨濟高祖之長嫡也。これは阿育王山佛照禪師德光。かきて派無際にあたふるを。天童の住持なりしとき。小師僧知庾。ひそかにもちきたりて。了然寮にて道

以一本
嗣に作

元にみせし。ときに大宋嘉定十七年甲申正月二十一日はしめてこれ
れをみる。喜感いくそはくそすなはち佛祖の冥感なり。焼香禮拜し
て披看す。この嗣書を請出することは。去年七月のころ。師廣都寺ひ
そかに寂光堂にて道元にかたれり。道元ちなみに都寺にとふ。如今
たれ人かこれを帶持せる。都寺いはく。堂頭老漢那裏有相似。のちに
請出ねんころにせは。さためてみすることあらん。道元このことは
をききしより。もとむるころさし日夜に休せず。このゆへに今年
ねんころに小師の僧智庾を屈請し。一片心をなけて請得せりしな
り。そのかける地は。白絹の表背せるにかく。表紙はあかき錦なり。軸
は玉なり。長九寸はかり。潤七尺餘なり。閑人にはみせず。道元すなは
ち智庾を謝す。さらに即時に堂頭に參して焼香し。無際和尚に禮謝
す。ときに無際云。這一段事。少得見知。如今老兄知得。便是學道之實飯
也。ときに道元喜感無勝。のちに寶慶のころ道元台山雁山等に雲遊
するつゝ。平田の萬年寺にいたる。ときの住持は福州の元熹和

一本
いに作

一本
の下の
字に
あり
あか
る
え
る

尚なり。宗鑑長老退院ののち。熹和尚補す。叢席を一興せり。人事のつ
いてに。むかしよりの佛祖の家風往來せしむるに。大瀉仰山の令嗣
話を擧するに。長老いはく。曾看我箇裏嗣書也否。道元いはく。いかに
して。みることを。えん。長老すなはちみつからたちて。嗣書をささけ
て。いはく。這箇はたとひ親人なりといへとも。たとひ侍僧のとしを
へたるといへとも。これをみせしめす。これすなはち佛祖の法訓な
り。しかあれとも。元熹ひころ出城し。見知府のために在城のとき。一
夢を感するに。いはく。大梅山法常禪師とおほしき高僧ありて。梅華
一枝をさしあけて。いはく。もしすてに船舷をこゆる實人あらんに
は。華をおしむことなかれといひて。梅華をわれにあたふ。元熹おほ
えずして。夢中に吟して。いはく。未跨船舷。好與三十棒。しかあるに。不
經五日。與老兄相見。いはんや老兄すてに船舷にまたかりきたる。こ
の嗣書また梅華の綾にかけり。大梅のおしふるところならん。夢想
と符合するゆへにとりいたすなり。老兄もしわれに嗣法せんとも

とむや。たとひもとむとも。おしむへきにあらず。道元信感おくとこ
ろなし。嗣書を請すへしといへとも。たた焼香禮拜して。恭敬供養す
るのみなり。ときに焼香侍者法寧といふあり。はしめて嗣書をみる
といひき。道元ひそかに思惟しき。この一段の事。まことに佛祖の冥
資にあらされは。見聞なほかたし。邊地の愚人として。なにのさいは
ひありてか。數番これをみる。感涙霑袖。ときに維摩室大舍堂等に閑
閑無人なり。この嗣書は。落地梅綾のしろきにかけり。長九寸餘。闕一
尋餘なり。軸子は黄玉なり。表紙は錦なり。道元台山より天童にかへ
る路程に。大梅山護聖寺の且過に宿するに。大梅祖師きたりて。開華
せる一枝の梅華をさつくる。靈夢を感す。祖鑒もとも仰憑するもの
なり。その一枝華の縦横は一尺餘なり。梅華あに優曇華にあらさら
んや。夢中と覺中と。おなしく眞實なるへし。道元在宋のあひた。版國
よりのち。いまた人にかたらず。
いまわか洞山門下に。嗣書をかけるは臨濟等にかけるにはことな

り。佛祖の衣裏にかかれりけるを。青原高祖したしく曹谿の机前に
して。手指より淨血をいたしてかき。正傳せられけるなり。この指血
に曹谿の指血を合して。書傳せられけると相傳せり。初祖二祖のと
ころにも。合血の儀おこなはれけりと相傳す。これ吾子參吾なとは
かかず。諸佛およひ七佛のかきつたへられける。嗣書の儀なり。しか
あれはしるへし。曹谿の血氣は。かたしけなく。青原の淨血に和合し。
青原の淨血したしく。曹谿の親血に和合して。まのあたり印證をう
ることは。ひとり高祖青原和尚のみなり。餘祖のおよふところにあ
らず。この事子をしれるとも。からは。佛法はたた青原のみに正傳せ
ると道取す。

正法眼藏嗣書

于時日本仁治二年歲次辛丑三月七日。觀音導利興聖寶林寺入宋
傳法沙門道元記

寛元癸卯九月二十四日。掛錫於越前吉田縣吉峰古寺草庵 華字

一本の
しな

先師古佛天童堂上大和尚しめしていはく。諸佛かならず嗣法あり。いはゆる釋迦牟尼佛は迦葉佛に嗣法す。迦葉佛は拘那含牟尼佛に嗣法す。拘那含牟尼佛は拘留孫佛に嗣法するなり。かくのこごとく相嗣して。いまにいたると信受すべし。これ學佛の道なり。ときに道元まうす。迦葉佛入涅槃ののち。釋迦牟尼佛はしめて出世成道せり。いはんやまた賢劫の諸佛。いかにしてか莊嚴劫の諸佛に嗣法せん。この道理いかん。先師いはく。なんちかいふところは。聽教の解なり。十聖三賢等のみちなり。佛祖嫡嫡のみちにあらず。わか佛佛相傳のみちはしかあらず。釋迦牟尼佛まさしく迦葉佛に嗣法せりとならひきたるなり。釋迦佛の嗣法してのちに。迦葉佛は入涅槃すと參學するなり。釋迦佛もし迦葉佛に嗣法せさらんは。天然外道とおなしかるへし。たれか釋迦佛を信するあらん。かくのこごとく佛佛相嗣して。いまにおよひきたれるによりて。箇箇佛ともに正嗣なり。つらなれるにあらず。あつまれるにあらず。まさにかくのこごとく佛佛相嗣す

一本か
かはる
か
へは
か
す
に
ら
る

ると學するなり。諸阿笈摩教のいふところの劫量壽量等にかかはれ。さるへし。もしひとへに釋迦佛よりおこれりといはは。わつかに二千餘年なり。ふるきにあらず。相嗣もわつかに四十餘代なり。あらたなるといひぬへし。この佛嗣は。しかのこごとく學するにあらず。釋迦佛は迦葉佛に嗣法すると學し。迦葉佛は釋迦佛に嗣法せりと學するなり。かくのこごとく學するとき。まさに諸佛諸祖の嗣法にてあるなり。このとき道元はしめて佛祖の嗣法あることを稟受するのみにあらず。從來の舊業をも脱落するなり。

正法眼藏法華轉法華

十方佛土中は法華の唯有なり。これに十方三世一切諸佛阿耨多羅三藐三菩提衆は轉法華あり。法華轉あり。これすなはち本行菩薩道の不退不轉なり。諸佛智慧甚深無量なり。難解難入の安詳三昧なり。あるひはこれ文殊師利佛として大海佛土なる唯佛與佛の如是相あり。あり。ひはこれ釋迦牟尼佛として唯我知是相。十方佛亦然なる。出現於世あり。これすなはち我及十方佛。乃能知是事と欲令衆生開示悟入せしむる一時なり。あるひはこれ普賢なり。不可思議の功德なる法華轉を成就し。深大久遠なる阿耨多羅三藐三菩提を闍浮提に流布せしむるに三艸二木大小諸樹を能生する地なり。能潤するあめなり。法華轉を所不能知に盡行成就なるのみなり。普賢の流布いまたをはらさるに靈山の大會きたる。普賢の往來する。釋尊これを白毫光相と證す。釋迦の佛會いまたなかはにあらさるに文殊の惟付すみやかに彌勒に授記する法華轉あり。普賢諸佛文殊大會と

賢なり
一本賢
として
に作る

一本如
是なり
の法に
住たり
位なり
一因事
縁あり
三有十
り

もに初中後善の法華轉を知見波羅蜜なるへし。このゆゑに唯以一乗爲一大事として出現せるなり。この出現すなはち一大事なるかゆゑに唯佛與佛乃能究盡諸法實相とあるなり。その法かならず一佛乘にして唯佛さためて唯佛に究盡せしむるなり。諸佛七佛。おのの佛佛に究盡せしめ。釋迦牟尼佛に成就せしむるなり。西天竺東震旦にいたる。十方佛土中なり。三十三祖大鑑禪師にいたるも。すなはち究盡にてある唯佛一乘法なり。唯以のさためて一大事なる一佛乘なり。いま出現於世なり。出現於此なり。青原の佛風。いまにつたはれ。南嶽の法門。よに開演する。みな如來如實知見なり。まことに唯佛與佛の究盡なり。嫡佛佛嫡の開示悟入なりと法華轉すへし。これを妙法蓮華經ともなつく。教菩薩法なり。これを諸法となつけきたれるゆゑに。法華を國土として靈山もあり。虚空もあり。大海もあり。大地もあり。これはすなはち實相なり。如是なり。佛之知見なり。世相常住なり。如實なり。如來壽量なり。甚深無量なり。諸行無常なり。法華

三昧なり。釋迦牟尼佛なり。轉法華なり。法華轉なり。正法眼藏涅槃妙心なり。現身度生なり。授記作佛なる保任あり。住持あり。大唐國廣南東路韶州曹谿山寶林寺大鑑禪師の會に。法達といふ僧まゐれりき。みづから稱すわれ法華經を讀誦することすてに三千部なり。祖いはく。たとひ萬部におよぶとも。經をえさらんはとかをしるにも。およはさらん。法達いはく。學人は愚鈍なり。從來たた文字にまかせて誦念す。いかてか宗趣をあきらめん。祖いはく。なんちこころみに一遍を誦すへし。われなんちかために解説せん。法達すなはち誦經す。方便品にいたりて。祖いはく。ととまるへし。この經はもとより因縁出世を宗旨とせり。たとひおほくの譬諭をとくも。これよりこゆることなし。何者因縁といふに。唯一大事なり。唯一大事は。即佛知見なり。開示悟入なり。おのづからこれ佛之知見なり。已具知見。彼既是佛なり。なんちいままさに信すへし。佛知見者。只汝自心なり。かさねてしめす偈にいはいはく。心迷法華轉。心悟轉法華。誦久不明已。

與義作譬家。無念念即正。有念念成邪。有無俱不計。長御白牛車。法達すなはち偈をききてかさねて祖にまうす。經にいはいはく。諸大聲聞。乃至菩薩。みな盡思度量するに。佛智はかることあたはず。いま凡夫をしてたたし自心をさとしめんを。すなはち佛之知見となつけん。上根にあらずよりは。疑謗をまぬかれかたし。また經に三車をとくに。大牛車と白牛車といかなる區別かあらん。ねかはくは和尙ふたたひ宣説をたれんことを。祖いはく。經意はあきらかなり。なんちおのづから迷背す諸三乘人の佛智をはかることあたはず。是は。度量にあるなり。たとひかれら盡思共推すとも。うたた懸遠ならん。佛は本爲凡夫説のみなり。不爲佛説なり。この理を信すること不肖にして退席すとも。ことにしらす白牛車に坐しなから。さらに門外にして三車をもとむることを。經文あきらかになんちにむかひていふ無二亦無三と。なんちいかかさたらさる。三車はこれ假なり。昔時なるかゆゑに。一乘はこれ實なり。今時なるかゆゑに。たたなんちをし

て假をは去とし實をは歸とせしむ。歸實するには實も名にあらず。しるへし所有はみな珍寶なり。ことごとくなんちに屬す。由汝受用なり。さらに父想ならず。また子想ならず。また用想なしといへとも。これは法華經となつくるなり。劫より劫にいたり。晝より夜にいたるに。手不釋卷なれとも。誦念にあらさるときなきなり。法達すてに啓發をかうふりて。踊躍歡喜して。偈を呈し贊していはく。經誦三千部。曹谿一句亾。未明出世旨。寧歇累生狂。羊鹿牛權設。初中後善揚。唯知火宅內。元是法中王。この偈を呈するに。祖いはく。なんちいまよりは念經僧となつけつへし。法達禪師の曹谿に參せし因縁かくのことし。これより法華轉と轉法華との法華は開演するなり。それよりさきはきかす。まことに佛之知見をあきらめんことはかならず。正法眼藏ならん佛祖なるへし。いたづらに沙石をかそふる文字の學者は。しるへきにあらずといふこと。いまこの法達の從來にてもみるへし。法華の正宗をあきらめんことは。祖師の開示を唯一大事因縁

なり
一
本なる
に作る

と究盡すへし。餘乘にとふらはんとすることなかれ。いま法華轉の實相實性實體實力實因實果の如是なり。祖師より以前には。震旦國にいまたきかさるところ。いまたあらさるところなり。いはゆる法華轉といふは。心迷なり。心迷はすなはち法華轉なり。しかあれはすなはち心迷は法華に轉せらるるなり。その宗趣は。心迷たとひ萬象なりとも。如是相は法華に轉せらるるなり。この轉せらるる。よろこふへきにあらず。まづへきにあらず。うるにあらず。きたるにあらず。しかあれとも。法華轉はすなはち無二亦無三なり。唯一佛乘にてあれは。如是相の法華にてあれは。能轉所轉といへとも。一佛乘なり。一大事なり。唯以の赤心片片なるのみなり。しかあれは。心迷をうらむることなかれ。汝等所行。是菩薩道なり。本行菩薩道の奉觀於諸佛なり。開示悟入。みな各各の法華轉なり。火宅に心迷あり。當門に心迷あり。門外に心迷あり。門前に心迷あり。門内に心迷あり。心迷に門内門外。乃至當門火宅等を現成せるかゆ系に。白牛車のうへにも開示

悟入あるへし。この車上の莊校として人を存せんとし。露地を所入とや期せん。火宅を所出とや認せん。當門は經歷のところなるのみ究盡すへきか。まさにしてへし。くるまのなかに火宅を開示悟入せしむる轉もあり。露地に火宅を開示悟入せしむる轉もあり。當門の全門に開示悟入を轉するあり。普門の一門に開示悟入を轉するあり。開示悟入の各各に普門を開示悟入する轉あり。門内に開示悟入を轉するあり。門外に開示悟入を轉するあり。火宅に露地を開示悟入するあり。このゆゑに火宅も不識なり。輪轉三界をたれかくるまの一乗せん。開示悟入をたれか門なりと出入せん。火宅よりくるまをもとむれば。いくはくの輪轉を。露地より火宅をのそめは。そこはくの深遠のみなり。露地に靈山を安穩せりとや究盡せん。靈山に露地の平坦なるとや修行せん。衆生所遊樂を我淨土不毀と常在せるをも。審細に本行すへきなり。一心欲見佛は。みつからなりとや參究する。佗なりとや參究する。分身と成道せしとき

あり。全身と成道せしときあり。俱出靈鷲山は。身命を自惜せざるによりてなり。常住此說法なる。開示悟入あり。方便現涅槃なる。開示悟入あり。而不見の雖近なる。たれか一心の會不識を信せざらん。天人常充滿のところは。すなはち釋迦牟尼佛毘盧遮那の國土。常寂光土なり。おのつから四土に具するわれら。すなはち如一の佛土に居するなり。微塵をみるとし。法界をみざるにあらず。法界を證するに微塵を證せざるにあらず。諸佛の法界を證するにわれらを證にあらざらしむるにあらず。その初中後善なり。しかあれば。いまも證の如是相なり。驚疑怖畏も如是にあらざるなし。たたこれ佛之知見をも。微塵をみるとし。微塵に坐することなるのみなり。法界に坐せるとき。廣にあらす。微塵に坐するとき。せはきにあらざるゆゑは。保任にあらざれば。坐すへからす。保任するには。廣狹に驚疑なきなり。これ法華の體力を究盡せるによりてなり。しかあれば。われら。かいまの相性。この法界に本行すとやせん。微塵に本行すとやせん。驚疑

なし。怖畏なし。たた法華轉の本行なる深遠長遠なるのみなり。この微塵をみると法界をみると。有作有量にあらざるなり。有量有作も法華量をならひ法華作をならふへし。開示悟入をきかんには。欲令衆生ときくへし。いはゆる開佛知見の法華轉なる。示佛知見にならふへし。悟佛知見の法華轉なる。入佛知見にならふへし。示佛知見の法華轉なる。悟佛知見にならふへし。かくのことく開示悟入の法華轉。おのおの究盡のみちあるへし。おほよそこの諸佛如來の知見波羅蜜は。廣大深遠なる法華轉なり。授記はすなはち自己の開佛知見なり。佗のさつくるにあらざる法華轉なり。これすなはち心迷法華轉なり。心悟轉法華といふは。法華を轉するといふなり。いはゆる法華のわれらを轉するちから究盡するときにかへりてみつからを轉する如是力を現成するなり。この現成は轉法華なり。從來の轉いまでもさらにやむことなしといへとも。おのつからかへりて法華を轉するなり。驢事いまたをはらされとも馬事到來すへし。出現於此

の唯以一大事因緣あり。地涌千界の衆。ひさしき法華の大聖尊なりといへとも。みつからに轉せられて地涌し。佗に轉せられて地涌す。地涌のみを轉法華すへからす。虚空涌をも轉法華すへし。地空のみにあらず法華涌とも佛知すへし。おほよそ法華のときは。かならず父少而子老なり。子の子にあらざるにはあらず。父の父にあらざるにはあらず。まさに子は老なり。父は少なりとならふへし。世の不信にならふておとろくことなかれ。世の不信なるは法華の時なり。これをもて一時佛住を轉法華すへし。開示悟入に轉せられて地涌し。佛之知見に轉せられて地涌す。この轉法華のとき。法華の心悟あるなり。心悟の法華あるなり。あるひは下方といふ。すなはち空中なり。この下この空。すなはち轉法華なり。すなはち佛壽量なり。佛壽と法華と法界と一心とは。下とも現成し。空とも現成すると轉法華すへし。かるかゆゑに下方空といふは。すなはち轉法華の現成なり。おほよそこのとき法華を轉して三艸ならしむることあり。法華を轉し

て二木ならしむることもあり。有覺とまつへきにあらす。無覺とあやしむへきにあらす。自轉して發菩提なるときすなはち南方なり。この成道もとより南方に集會する靈山なり。靈山かならず轉法華なり。虚空に集會する十方佛土あり。これ轉法華の分身なり。すてに十方佛土と轉法華す。一微塵のいるへきところなし。色即是空の轉法華あり。若退若出にあらす。空即是色の轉法華あり。無有生死なるへし。在世といふへきにあらす。滅度のみにあらんや。われに親友なるは。われもかれに親友なり。親友の禮勤わするへからさるゆゑに。髻珠をもあたふ衣珠をもあたふる時節よくよく究盡すへし。佛前に寶塔ある轉法華あり。高五百由旬なり。塔中に佛坐する轉法華あり。量二百五十由旬なり。從地涌出住在空中の轉法華あり。心も罣礙なし。色も罣礙なし。從空涌出住在地中の轉法華あり。まなこにもさへらる身にもさへらる。塔中に靈山あり。靈山に寶塔あり。寶塔は虚空に寶塔し。虚空は寶塔を虚空す。塔中の古佛は座を靈山のほとけ

るへに
え一本
作

にならへ。靈山のほとけは證を塔中のほとけに證す。靈山のほとけ塔中え證入するには。すなはち靈山の依正なから。轉法華入するなり。塔中のほとけ靈山に涌出するには。古佛土なから。久滅度なから。涌出するなり。涌出も轉入も。凡夫二乘にならはされ。轉法華を學すへし。久滅度は佛上にそなはれる證莊嚴なり。塔中と佛前と。寶塔と。虚空と。靈山にあらす。法界にあらす。半段にあらす。全界にあらす。是法位のみにかかはれす。非思量なるのみなり。或現佛身而爲說法。或現此身而爲說法なる轉法華あり。或現提婆達多なる轉法華あり。或現退亦佳矣なる轉法華あり。合掌瞻仰待かならず六十小劫とはかることなかれ。一心待の量をつつめて。しはらくいく無量劫といふともなほこれ不能測佛智なり。待なる一心。いく佛智の量とかせん。この轉法華は。本行菩薩道のみなりと認することなかれ。法華一座のところ。今日如來說大乘と轉法華なる功德なり。法華のいまし法華なる不覺不知なれとも。不識不會なり。しかあれば五百塵點は。し

はらく一毛許の轉法華なり。赤心片片の佛壽の開演せらるるなり。おほよそ震旦にこの經つたはれ轉法華してよりこのかた數百歲あるひは疏釋をつくるともからままにしけし。またこの經によりて上人の法をうるもあれとも。いまわれら高祖曹谿古佛のことく。法華轉の宗旨をえたるなし。轉法華の宗旨つかふあらず。いまこれをきき。いまこれにあふ。古佛の古佛にあふにあへり。古佛土にあらざらんや。よろこふへし。劫より劫にいたるも法華なり。晝より夜にいたるも法華なり。法華これ從劫至劫なるかゆゑに。法華これ乃晝乃夜なるかゆゑに。たとひ自身心を強弱すとも。さらにこれ法華なり。あらゆる如是は。珍寶なり。光明なり。道場なり。廣大深遠なり。深大久遠なり。心迷法華轉なり。心悟轉法華なる。實にこれ法華轉法華なり。

心迷法華轉。心悟轉法華。究盡能如是。法華轉法華。かくのことく供養恭敬尊重讚歎する法華是法華なるへし。

正法眼藏法華轉法華

仁治二年辛丑夏安居日。これをかきて慧達禪人にさつく。これ出家修道を感喜するなり。たた鬢髮をそるなほ好事なり。かみをそりまたかみをそる。これ眞出家兒なり。今日の出家は。從來の轉法華如是力の如是果報なり。いまの法華かならず法華の法華果あらん。釋迦の法華にあらず。諸佛の法華にあらず。法華の法華なり。ひころの轉法華は。如是相も不覺不知にかかれり。しかあれとも。いまの法華。さらに不識不會にあらはる。昔時も出息入息なり。今時も出息入息なり。これを妙難思の法華と保任すへし。

開山觀音尊利興聖寶林寺入宋傳法沙門

道元記押華字

嘉元三年乙巳孟春初於寶慶寺書寫了

正法眼藏心不可得

釋迦牟尼佛言。過去心不可得。現在心不可得。未來心不可得。これ佛祖の參究なり。不可得裏に過去現在未來の窟籠を剗來せり。しかあれとも自家の窟籠をもちおきたれり。いはゆる自家といふは。心不可得なり。而今の思量分別は。心不可得なり。使得十二時の渾身これ心不可得なり。佛祖の入室よりこのかた心不可得を會取す。いまた佛祖の入室あらされは。心不可得の問取なし。道著なし見聞せざるなり。經師論師のやから。聲聞緣覺のたくひ。夢也未見在なり。その驗ちかきにあり。いはゆる徳山宣鑒禪師。そのかみ金剛般若經をあきらめたりと自稱す。あるひは周金剛王と自稱す。ことに青龍疏をよくせりと稱す。さらに十二擔の書籍を撰集せり。齊肩の講者なきかことし。しかあれとも文字の法師の末流なり。あるとき南方に嫡嫡相承の無上の佛法あることをききて。いきとほりにたへす。經疏をたつさへて山河をわたりゆく。ちなみに龍潭の信禪師の會にあへ

河一本
川に作
る

り。かの會に投せんとおもむく。中路に歇息せり。ときに老婆子きたりあひて。みちのかたはらに歇息せり。ときに鑒講師とふ。なんぢはこれなに人ぞ。婆子いはく。われは賣餅の老婆子なり。徳山いはく。わかつたかたにもちひをうるへし。婆子いはく。和尚もちひをかふてなにかせん。徳山いはく。もちひをかふて點心にすへし。婆子いはく。和尚のそこはくたつさへてあるはそれなものぞ。徳山いはく。なんぢきかすや。われはこれ周金剛王なり。金剛經に長せり。通達せずといふところなし。わかいたつさへたるは。金剛經の解釋なり。かくいふをききて。婆子いはく。老婆に一間あり。和尚これをゆるすやいなや。徳山いはく。われいまゆるす。なんぢここにまかせてとふへし。婆子いはく。われかつて金剛經をきくにいはく。過去心不可得。現在心不可得。未來心不可得。いまいつれの心をかもちひをしていかに點せんとかする。和尚もし道得ならんには。もちひをうるへし。和尚もし道不得ならんには。もちひをうるへからず。徳山ときに茫然

として祇對すへきところをおぼえさりき。婆子すなはち拂袖して
いてぬつひにもちひを徳山にうらす。うらむへし數百軸の釋主。數
十年の講者。わつかに弊婆の一間をうるに。たちまちに負處に墮し
て。祇對におよはさること。正師をみると正師に嗣承せると。正法を
きけるといまた正法をきかす正師をみさると。はるかにことなる
によりてかくのことし。徳山このときはしめていはく。書にかける
もちひはうゑをやむるにあたはずと。いまは龍潭に嗣法すと稱す。
つらつらこの婆子と徳山と相見する因縁をおもへは。徳山のむか
しあきらめさることはいまきこゆるところなり。龍潭をみしより
のちもなほ婆子を怕却しつへし。なほこれ參學の晩進なり。超證の
古佛にあらず。婆子そのとき徳山を杜口せしむとも。實にその人な
ること。いまたさためかたし。そのゆゑは。心不可得のことはきき
ては。心うへからす心あるへからすとのみおもひて。かくのことく
とふ。徳山もし丈夫なりせば。婆子を勘破するちからあらまし。すて

に勘破せましかは。婆子まことにその人なる道理もあらはるへし。
徳山いまた徳山ならされは。婆子その人なることもいまたあらは
れず。現在大宋國にある雲衲霞袂。いたつらに徳山の對不得をわら
ひ。婆子か靈利なることをほむるは。いとほかなかるへし。おろかな
るなり。そのゆゑは。婆子を疑著するゆゑなきにあらず。いはゆるそ
のちなみ徳山道不得ならんに。婆子なんそ徳山にむかふていはさ
る。和尚いま道不得なり。さらに老婆にとふへし。老婆かへりて和尚
のためにいふへし。かくのことくいひて。徳山の問をえて徳山にむ
かふていふこと。道是ならは。婆子まことにその人なりといふこと
あらはるへし。問著たとひありとも。いまた道處あらず。むかしより
いまた一語をも道著せざるを。その人といふこと。いまたあらず。い
たつらなる自稱の始終。その益なき。徳山のむかしにてみるへし。い
また道處なきものをゆるすへからさること。婆子にてしるへし。こ
ころみに徳山にかはりていふへし。婆子まさしく恁麼問著せんに。

徳山すなはち婆子にむかひていふへし。恁麼則備莫與吾賣餅もし徳山かくのことくいはましかは。靈利の參學ならん。婆子もし徳山とはん。現在心不可得。過去心不可得。未來心不可得。いまもちひをしていつれの心をか點せんとかする。かくのことくとはんに。婆子すなはち徳山にむかふていふへし。和尚はたたもちひの心を點すへからすとのみしりて。心のもちひを點することをしらす。心の心を點することをもしらす。恁麼いはんに。徳山さためて擬議すへし。當恁麼時。もちひ三枚を拈して。徳山に度與すへし。徳山とらんと擬せんととき。婆子いふへし。過去心不可得。現在心不可得。未來心不可得。もしまた徳山。展手擬取せずは。一餅を拈して。徳山をうちて。いふへし。無魂屍子。備莫茫然かくのことくいはんに。徳山いふことあらはよし。いふことなからんには。婆子さらに徳山のためにいふへし。たた拂袖して。さる。そてのなかに蜂ありともおほえす。徳山もわれはいふことあたはず。老婆わかためにいふへしともいはす。しかあれは

さる福
本さり
たるに
作るに

福著
唱作
本に
作る

いふへきをいはさるのみにあらず。とふへきをもとはす。あはれむへし。婆子。徳山。過去心。未來心。問著道著。未來心不可得なるのみなり。おほよそ徳山それよりのちもさせる發明ありともみえす。たたあらあらしき造次のみなり。ひさしく龍潭にとふらひせは。頭角觸折することもあるまじ。領珠を正傳する時節にもあはまし。わつかに吹滅紙燭をみる。傳燈に不足なり。しかあれは參學の雲水。かならず勤學なるへし。容易にせしは不足なり。勤學なりしは佛祖なり。おほよそ心不可得とは。晝餅一枚を買弄して。一口に咬著嚼著するをいふ。

正法眼藏心不可得

爾時仁治二年辛丑夏安居于雍州宇治郡觀音導利興聖審林寺示衆

正法眼藏心不可得

心不可得は諸佛なり。みづから阿耨多羅三藐三菩提と保任しきたり。

金剛經曰。過去心不可得。現在心不可得。未來心不可得。これすなはち諸佛なる心不可得の保任の現成せるなり。三界心不可得なり。諸法心不可得なりと保任しきたれるなり。これをあきらむる保任は諸佛にならばされは證取せず。諸祖にならばされは正傳せざるなり。諸佛にならふといふは。丈六身にならひ。一莖艸にならふなり。諸祖にならふといふは。皮肉骨髓にならひ。破顏微笑にならふなり。この宗旨は正法眼藏あきらかに正傳しきたりて。佛佛祖祖の心印。まさに直指なること。嫡嫡單傳せるにとふらひならふに。かならずその骨髓面目つたはれ。身體髮膚うくるなり。佛道をならはす。祖室にいらさらんは。見聞せず。會取せず。問取の法におよはす。道取の分ゆめにも。いまたみさるところなり。徳山のそのかみ不丈夫なりしとき。

金剛經に長せりき。ときの人これを周金剛王と稱しき。八百餘家のなかに王なり。ことに青龍の疏をよくせるのみにあらず。さらに十二擔の書籍を釋集せり。齊肩の講者あることなし。ちなみに南方に無上道の嫡嫡相承せるありと。ききて書をたつさへて山川をわたりゆく。龍潭にいたらんとするみちのひたりに歇息するに。婆子きたりあふ。徳山とふ。なんちはこれなにひとそ。婆子いはく。われはもちひうる老婆なり。徳山いはく。わかためにもちひをうるへし。婆子いはく。和尚かふてなにかせん。徳山いはく。もちひをかふて。點心にすへし。婆子いはく。和尚のそこはくたつさへてあるは。これなにも。のそ。徳山いはく。汝きかすや。われこれ周金剛王なり。金剛經に長せり。通達せずといふところなし。このたつさへてあるは。金剛經の解釋なり。これをききて。婆子いはく。老婆に一間あり。和尚これをゆるすやいなや。徳山いはく。ゆるす。なんちかこころにまかせてとふへし。いはく。われかつて金剛經をきくに。いはく。過去心不可得。現在心

不可得。未來心不可得。いまもちひをしていつれの心をか點せんとする。和尚もし道得ならんには。もちひをうるへし。和尚もし道不得ならんには。もちひをうるへからず。徳山ときに茫然として祇對すへきことをえさりき。婆子すなはち拂袖して出ぬ。つひにもちひを徳山にうらす。うらむへし。數百軸の釋主。數十年の講者。わつかに弊婆の一間をうるに。すみやかに負處におちぬること。師承あると師承なきと。正師の室にとふらふと。正師の室にいらさると。はるかにことなるによりてかくのことし。不可得の言をききては。彼此ともにおなしくうるることあるへからずとのみ解せり。さらに活路なし。またうへからずといふは。もとよりそなはれるゆゑにいふなんとおもふひともあり。これをいかにもあたらぬことなり。徳山このときはしめて畫にかけるもちひはうゑをやむるにあたはすとしり。また佛道修行には。かならずそのひとにあふへきとおもひしりき。またいたつらに經書にのみかかはれるがまことのちからをうへ

からさることをもおもひしりき。つひに龍潭に參して。師資のみち見成せりしより。まさにそのひとなりき。いまは雲門法眼の高祖なるのみにあらず。人中天上の導師なり。この因縁をおもふに。徳山むかしあきらめさることは。いまみゆるところなり。婆子いま徳山を杜口せしむれば。とても實にそのひとにてあらんことも。さためかたし。しはらく心不可得のことばをききて。心あるへきにあらずとはかり。おもひてかくのことくとふにてあるらんとおぼゆ。徳山の丈夫にてありしかは。かんかふるちからもありなまし。かんかふることあらは。婆子がそのひとにてありけることも。きこゆへかりしかとも。徳山の徳山にてあらさりしときにて。あれは。婆子がそのひとなることも。いまたしられすみえさるなり。またいま婆子を疑著すること。ゆゑなきにあらず。徳山道不得ならん。なとか徳山にむかふていはさる。和尚いま道不得なり。さらに老婆にとふへし。老婆かへりて和尚のためにいふへしと。このとき徳山の問をえて。徳山

にむかひていふことありせば老婆かまことにてあるちからもあらはれぬへし。かくのことく古人の骨髓も面目も古佛の光明も現端も同參の功夫ありて徳山をも婆子をも不可得をも可得をも餅をも心をも把定にわつらはさるのみにあらず放行にもわつらはさるなり。いはゆる佛心はこれ三世なり。心と三世とあひへたたること。毫釐にあらすといへども。あひはなれあひさることを論するにはすなはち十萬八千よりもあまれる淡遠なり。いかにあらんかこれ過去心といははかれにむかひていふへし。これ不可得といかにあらんかこれ現在心といははかれにむかひていふへし。これ不可得といかにあらんかこれ未來心といははかれにむかひていふへし。これ不可得といはくのところは心をしはらく不可得となつくる心ありとはいはすしはらく不可得なりといふ心うへからすとはいはすひとへに不可得といふ心うへしとはいはすひとへに不可得といふなり。またいかなるか過去心不可得といはは生死去

來といふへし。いかなるか現在心不可得といはは生死去來といふへし。いかなるか未來心不可得といはは生死去來といふへし。おほよそ牆壁瓦礫にてある佛心あり。三世諸佛ともにこれを不可得にてありと證す。佛心にてある牆壁瓦礫のみあり。諸佛三世にこれを不可得なりと證す。いはんや山河大地にてある不可得のみつからにてあるあり。艸木風水なる不可得のすなはち心なるあり。また應無所住而生其心の不可得なるあり。また十方諸佛の一代の代にて八萬法門をとく不可得の心。それかくのことし。

また大證國師のとき大耳三藏はるかに西天より到京せり。佗心通をえたりと稱す。唐の肅宗皇帝ちなみに國師に命して試験せしむるに。三藏わつかに國師をみて。すみやかに禮拜して右にたつ。國師つひにとふ。なんち佗心通をえたりやいなや。三藏まうす不取と。國師いはく。なんちいふへし。老僧いまいつれのところにかある。三藏まうす。和尚はこれ一國の師なり。なんそ西川にゆきて競渡のふね

をみる。國師ややひさしくして再問す。なんちいふへし老僧いまい
つれのところにかある。三藏まうす。和尚はこれ一國の師なり。なん
そ天津橋上にゆきて。獼猴を弄するをみる。國師またとふ。なんちい
ふへし老僧いまいつれのところにかある。三藏ややひさしくあれ
ともしることなし。みるころなし。國師ちなみに叱していはく。這
野狐精。なんちか佗心通いつれのところにかある。三藏また祇對な
し。かくのことくのことし。らされはあし。きかされはあやし。みぬ
へし。佛祖と三藏と。ひとしかるへからす。天地懸隔なり。佛祖は佛法
をあきらめてあり。三藏はいまたあきらめず。まことにそれ三藏は
在俗も三藏なることあり。たとへは文華にところをえたらんかこ
とし。しかあれはひろく竺漢の言音をあきらめてあるのみにあら
す。佗心通をも修得せりといへとも。佛道の身心におきてはゆめに
もいまたみさるゆゑに。佛祖の位に證せる國師にまみゆるには。す
なはち勘破せらるるなり。いはゆる佛道に心をならふには。萬法即

心なり。三界唯心なり。唯心これ唯心なるへし。是佛即心なるへし。た
とひ自なりともたとひ佗なりとも佛道の心をあやまらさるへし。
いたつらに西川に流落すへからす。天津橋におもひわたるへから
す。佛道の身心を保任すへくは。佛道の智通を學習すへし。いはゆる
佛道には盡地みな心なり。起滅にあらたまらず。盡法みな心なり。盡
心を智通とも學すへし。三藏すてにこれをみず。野狐精のみなり。し
かあれは以前兩度もいまた國師の心をみず。國師の心に通するこ
となし。いたつらなる西川と天津と。競渡と獼猴とのみにたはふるへ
る野狐子なり。いかにしてか國師をみん。また國師の在處をみるへ
からさる道理あきらけし。老僧いまいつれのところにかあるとみ
たひとふに。このことはをきかす。もしきくことあらは。たつぬへし。
きかされは蹉過するなり。三藏もし佛法をならふことあり。せは。國
師のことはをきかまし。國師の身心をみることあらまし。みころ佛
法をならはさるかゆゑに。人中天上の導師にうまれあふといへと

もいたつらにすきぬるなり。あはれむへしかなしむへし。おほよそ三藏の學者。いかてか佛祖の行履におよはん。國師の邊際をしらん。いはんや西天の論師。およひ竺乾の三藏。たゞて國師の行履をしるへからず。三藏のしらんことは。天帝もしるへし。論師もしるへし。論師天帝しらんこと。補處の智力およはさらんや。十聖三賢もおよはさらんや。國師の身心は。天帝もしるへからず。補處もいまたあきらめさるなり。身心を佛家に論することかくのことし。しるへし。信すへし。わか大師釋尊の法。いまた二乘外道等の野狐精にはおなしからさるなり。しかあるにこの一段の因縁。ふるくより諸代の尊宿。おのおの參究するにその話のこれり。僧ありて趙州にとふ。三藏なにしてか第三度に國師の所在をみさる。趙州いはく。國師在三藏鼻孔上。所以不見。また僧ありて玄沙にとふ。既在鼻孔上。爲甚不見。玄沙いはく。只爲太近。海會端いはく。國師若在三藏鼻孔上。有什麼難見。殊不知國師在三藏眼睛裏。また玄沙三藏を徵していはく。汝道前兩度

還見麼。雪竇顯いはく。敗也敗也。また僧ありて仰山にとふ。第三度なにとしてか三藏ややひさしくあれとも。國師の所在をみさる。仰山いはく。前兩度は涉境心。後入自受用三昧。所以不見。この五位の尊宿ともに諦當なれとも。國師の行履は蹉過せり。いはゆる第三度しらすとのみ論して。前兩度はしれりとゆるすにいたり。これすなはち古先の蹉過するところなり。晚進のしるべきところなり。興聖いま五位の尊宿を疑著すること。兩般あり。一にはいはく。國師の三藏を試験する意趣をしらす。二にはいはく。國師の身心をしらす。しはらく。國師の三藏を試験する意趣をしらすといふは。第一番に國師いはく。汝道老僧。即今在什麼處と。いふところは三藏もし佛法をしれりや。いまたしらすやと試問するとき。三藏もし佛法をきくことあらは。老僧即今在什麼處ときくことは。佛法にならふへきなり。佛法にならふといふは。國師の老僧。いまいつれのところにかあるといふは。這邊にあるか。那邊にあるか。無上菩提にあるか。般若波羅蜜

こ
こ
一
本
こ
ろ
に
作
る

にあるか。空にかかれるか。地にたてるか。艸菴にあるか。寶所にあるか。とふなり。三藏のころをしらす。いたつらに凡夫二乗等の見解をたてまつる。國師かさねてとふ。汝道老僧。今在什麼處。ここに三藏さらにいたつらのことは。をたてまつる。國師かさねてとふ。汝道老僧。今在什麼處。ときに三藏ややひさしくあれともものいはす。こ。こ。茫然なり。ちなみに國師すなはち三藏を叱していはく。這野狐精。佗心通在甚麼處。かくいふに。三藏なほいふことなし。つらつらこの因縁をおもふに。古先ともにおもはくは。いま國師の三藏を叱すること。前兩度は國師の所在をしるといへとも。第三度しらするかゆえに叱するなりと。しかにはあらず。おほよそ三藏の野狐精のみにして。佛法は夢也。未見在なることを叱するなり。前兩度はしれり。第三度はしらするといはぬなり。叱するは總して三藏を叱するなり。國師のころは。まつ佛法を佗心通といふことありやいなやともおもふ。またたとひ佗心通といふとも。佗も佛道にならふ

佗を擧すへし。心も佛道にならふ。心を擧すへし。通も佛道にならふ。通を擧すへきに。いま三藏いふところ。は。かつて佛道にならふところにあらず。いかてか佛法といはんと。國師はおもふなり。試験すといふは。たとひ第三度いふところありとも。前兩度のことくならは。佛法の道理にあらず。國師の本意にあらず。されは。叱すへきなり。三度問著するは。三藏もし國師のことは。をきくことやあると。かさねて問著するなり。二には。國師の身心をしらすといふは。いはゆる國師の身心は。三藏のしるへきにあらず。通すへきにあらず。十聖三賢およはす。補處等覺のまきらむるにあらず。凡夫三藏いかてかしらんと。この道理。あきらかに決定すへし。國師の身心は。三藏もしるへし。およふへしと擬するは。おのれすてに國師の身心をしらするによりてなり。佗心通をえんとも。から。國師をしるへしといはは。二乗さ。らに國師をしるへきか。しかあるへからず。二乘人は。たえて國師の邊際におよふへからざるなり。いま大乘經をよむ。二乘人おほし。か

れらも國師の身心をしるへからず。また佛法の身心ゆめにもみるへからざるなり。たとひ大乘經を讀誦するにたれとも。またくかれば小乘人なりとあきらかにしるへし。おほよそ國師の身心は神通修證をうるともからのしるへきにあらざるなり。國師の身心は。國師なほはかりかたからんゆゑはいかん。行履ひさしく作佛を圖せず。ゆゑに佛眼も覩不見なり。去就はるかに窠窟を脱落せり。籠羅の拘牽すへきにあらざるなり。いま五位の尊宿ともに勘破すへし。趙州いはく。國師は三藏の鼻孔上にあるゆゑにみす。この話なにかいふ。本をあきらめずして末をいふには。かくのことく。のあやまりあり。國師いかにしてか三藏の鼻孔上にあらん。三藏いまた鼻孔なし。また國師と三藏と。あひみるたよりあるにあひにたれとも。あひちかつくみちなし。明眼はまさに辨旨すへし。玄沙いはく。只爲太近。まことに太近はさもあらはあれ。あたりにはあたらす。いかなるをか太近といふ。なにをか太近と擧する。玄沙いまた太近をしらす。

太近を參せず。佛法におきては遠之遠矣。仰山いはく。前兩度涉境心。後入自受用三昧。所以不見。これ小釋迦のほまれ。西天にたかくひひくといへとも。この不是なきにあらず。相見のところはかならず。涉境なりといはは佛祖相見のところなきか。ことし。授記作佛の功德ならはざるにたり。前兩度は實に三藏よく國師の所在をしれり。といふ。國師の一毛の功德をしらすといふへし。玄沙の徴にいはく。前兩度還見麼。この還見麼の一句。いふへきをいふにたりといへとも。見如不見といはんとす。ゆゑに是にあらず。これをききて。雪竇明覺禪師いはく。敗也敗也。これ玄沙の道を道とするとき。しかいふへし。道にあらずとせんと。きしかいふへからず。海會端いはく。國師若在三藏鼻孔上。有什麼難見。殊不知國師在三藏眼睛裏。これまた第三度を論するなり。前兩度もみさることを呵すへきを呵せず。いかんか。國師の鼻孔上にあり。眼睛裏にありとも。しらん。五位尊宿。いづれも國師の功德にくらし。佛法の辨道。ちからなきにたり。しるへ

し國師はすなはち一代の佛なり。佛正法眼藏あきらかに正傳せり。小乗の三藏論師等さらに國師の邊際をしらさる。その證これなり。佗心通といふこと小乗のいふかときは。佗念通といひぬへし。小乗三藏の佗心通のちから國師の一毛端をも半毛端をもしるへし。とおもへるはあやまりなり。小乗の三藏すへて國師の功德の所在みるへからすと。一向ならふへきなり。たとひもし國師さきの兩度は所在をしらるといへとも。第三度にしらさらんは三分に兩分の能あらん。叱すへきにあらす。たとひ叱すとも全分虧闕にあらす。これを叱せんたれか國師を信せん。意趣は三藏すへていまた佛法の身心あらさることを叱せしなり。五位の尊宿すへて國師の行李をしらさるによりて。かくのことくの不是あり。このゆゑにいま佛道の心不可得をきかしむるなり。この一法を通することえさらんともから。自餘の法を通せりといはんこと信じかたしといへとも。古先もかくのことく將錯就錯ありとしるへし。あるとき僧ありて國

師にとふ。いかにあらんかこれ古佛心。國師いはく。牆壁瓦礫。これも心不可得なり。あるとき僧ありて國師にとふ。いかにあらんかこれ諸佛常住心。國師いはく。幸遇老僧參内。これも不可得の心を參究するなり。天帝釋あるとき國師にとふ。いかにしてか有爲を解脱せん。國師いはく。天子修道して有爲を解脱すへし。天帝釋かさねてとふ。いかならんかこれ道。國師いはく。造次心是道。天帝釋いはく。いかならんかこれ造次心。國師ゆひをもてさしていはく。這箇是般若臺。那箇是真珠網。天帝釋禮拜す。おほよそ佛道に身心を談すること。佛佛祖祖の會におほし。ともにこれを參學せんことは。凡夫賢聖の念慮知覺にあらず。心不可得を參究すへし。

正法眼藏心不可得

仁治二年辛丑夏安居日書于興聖靈林寺

正法眼藏古鏡

諸佛諸祖の受持し單傳するは古鏡なり。同見同面なり。同像同鑄なり。同參同證す。胡來胡現。十萬八千。漢來漢現。一念萬年なり。古來古現し。今來今現し。佛來佛現。祖來祖現するなり。

第十八祖伽耶舍多尊者は西域の摩提國の人なり。姓は鬱頭藍。父名天蓋。母名方聖。母氏かつて夢みるにいはく。ひとりの大神おほきなるかかみを持してむかへりと。ちなみに懐胎す。七日ありて師をうめり。師はしめて生せるに。肌體みかける瑠璃のことし。いまたかつて洗沐せざるに。自然に香潔なり。いとけなくより閑靜をこのむ言語よのつねの童子にことなり。うまれしより一の淨明の圓鑑おのつから同生せり。圓鑑とは圓鏡なり。奇代の事なり。同生せりといふは。圓鑑も母氏の胎よりうめるにはあらず。師は胎生す。師の出胎する同時に。圓鑑きたりて天真として師のほとりに現前して。ひころの調度のことくありしなり。この圓鑑。その儀よのつねにあらず。童

子むかひきたるには。圓鑑を兩手にささけきたるかことし。しかあれとも童面かくれず。童子さりゆくには。圓鑑をおほふてさりゆかことし。しかあれとも童身かくれず。童子睡眠するときは。圓鑑そのうへにおほふたとへは華蓋のことし。童子端坐のときは。圓鑑その面前にあり。おほよそ動容進止にあひしたかふなり。しかのみにあらず。古來今の佛事。ことごとくこの圓鑑にむかひてみることを。う。また天上人間の衆事。諸法みな圓鑑にうかみてくもれるところなし。たとへは經書にむかひて照古照今をうるよりも。この圓鑑よりみるはあきらかなり。しかあるに童子すてに出家受戒するとき。圓鑑これより現前せず。このゆえに近里遠方おなしく奇妙なりと讃歎す。まことにこの娑婆世界に比類すくなしといふとも。さらに佗那裏に親族のかくのことくなる種胤あらんことを莫怪なるへし。遠慮すへし。まさにしるへし。若樹若石に化せる經卷あり。若田若里に流布する知識あり。かれも圓鑑なるへし。いまの黄紙朱軸は圓

生來福
本來生
に作る

鑑なり。たれか師をひとへに希夷なりとおもはん。あるとき出遊するに。僧伽難提尊者にあふて。直にすすみて難提尊者の前にいたる。尊者とふ汝か手中なるはまさし何の所表かある。有何所表を問著にあらずとききて。參學すへし。師いはく。諸佛大圓鑑。内外無瑕翳。兩人同得見。心眼皆相似。しかあれは諸佛大圓鑑。なにしてか師と同生せる。師の生來は。大圓鑑の明なり。諸佛は。この圓鑑に同參同見なり。諸佛は。大圓鑑の鑄像なり。大圓鑑は。智にあらず。理にあらず。性にあらず。相にあらず。十聖三賢等の法のなかにも。大圓鏡の名あれとも。いまの諸佛の大圓鑑にあらず。諸佛かならずしも。智にあらず。さるかゆゑに。諸佛に智慧あり。智慧を諸佛とせるにあらず。參學するへし。智を説著するは。いまた佛道の究竟説にあらず。なるなり。すてに諸佛大圓鑑。たとひわれと同生せりと見聞すといふとも。さらに道理あり。いはゆるこの大圓鑑。この生に接すへからず。佗生に接すへからず。玉鏡にあらず。銅鏡にあらず。肉鏡にあらず。隨鏡にあらず。圓鑑

福本
下に
有り
字像

の言偈なるか。童子の説偈なるか。童子この四句の偈をとくことも。かつて人に學習せるにあらず。かつて或從經卷にあらず。かつて或從知識にあらず。圓鑑をささけてかくのこととくとなり。師の幼稚のときよりかかみにむかふの常儀とせるのみなり。生知の辯慧あるか。ことし。大圓鑑の童子と同生せるか。童子の大圓鑑と同生せるか。まさし前後生もあるへし。大圓鑑は。すなはち諸佛の功德なり。このかかみ。内外にくもりなしといふは。外にまつ内にあらず。内にくもれる外にあらず。面背あることなし。兩箇おなしく得見あり。心と眼とあひにたり。相似といふは。人の人にあふなり。たとひ内の形像も。心眼あり。同得見あり。たとひ外の形像も。心眼あり。同得見あり。いま現前せる依報正報。ともに内に相似なり。外に相似なり。われにあらず。たれにあらず。これは。兩人の相見なり。兩人相似なり。かれもわれといふ。われもかれとなる。心と眼と皆相似といふは。心は心に相似なり。眼は眼に相似なり。相似は。心眼なり。たとへは。心眼各相似と

いはんかことし。いかならんかこれ心の心に相似せる。いはゆる三祖六祖なり。いかならんかこれ眼の眼に相似なる。いはゆる道眼被眼礙なり。いま師の道得する宗旨かくのことし。これはしめて僧伽難提尊者に奉覲する本由なり。この宗旨を擧括して大圓鑑の佛面祖面を參學すへし。古鏡の眷屬なり。

第三十三祖大鑑禪師。かつて黃梅山の法席に功夫せしとき。壁書して祖師に呈する偈にいほく。菩提本無樹。明鏡亦非臺。本來無一物。何處有塵埃。しかあればこの道取を學取すへし。大鑑高祖よの人これを古佛といふ。圓悟禪師いほく。稽首曹谿眞古佛。しかあればしるへし。大鑑高祖の明鏡をしめす。本來無一物。何處有塵埃なり。明鏡非臺。これ命脈あり。功夫すへし。明明はみな明鏡なり。かるかゆえに明頭來明頭打といふ。いづれのところにあらされはいづれのところなし。いはんやかかみにあらさる一塵の盡十方界にのこれらんや。かかみにあらさる一塵のかかみにのこれらんや。しるへし。盡界は塵

本ま
ちの下
に字あ
り

刹にあらさるなり。ゆえに古鏡面なり。

南嶽大慧禪師の會にある僧といふ。如鏡鑄像。光歸何處。師云。大德未出家時相貌。向甚麼處去。僧曰。成後爲甚麼不鑑照。師云。雖不鑑照。瞞他一點也不得。いまこの萬像はなにもとあきらめさるに。たつぬれは鏡の鑄成せる證明すなはち師の道にあり。鏡は金にあらず玉にあらず。明にあらず像にあらずといへとも。たちまち鑄像なるまことに鏡の究辨なり。光歸何處は。如鏡鑄像の如鏡鑄像なる道取なり。たとへは像歸像處なり。鑄能鑄鏡なり。大德未出家時相貌。向甚麼處去といふは。鏡をささけて照面するなり。このときいづれの面をかすなはち自己面ならん。師云。雖不鑑照。瞞他一點也不得といふは。鑑照不得なり。瞞他不得なり。海枯不到露底を參學すへし。莫打破莫動著なり。しかありといへとも。さらに參學すへし。拈像鑄鏡の道理あり。當恁麼時は。百千萬の鑑照にて。瞞瞞點點なり。

雪峰眞覺大師あるとき衆にしめすに。いほく。要會此事。我這裏如一

而古鏡相似。胡來胡現。漢來漢現。時玄沙出問。忽遇明鏡來時如何。師云。胡漢俱隱。玄沙曰。某甲卽不然。峰云。爾作麼生。玄沙曰。請和尚問峰云。忽遇明鏡來時如何。玄沙曰。百雜碎。しはらく雪峰道の此事といふは。是什麼事と參學すへし。しはらく雪峰の古鏡をならひみるへし。如一面古鏡の道は。一面とは。邊際なく斷して。内外さらさらあらさるなり。一珠走盤の自己なり。いま胡來胡現は。一隻の赤鬚なり。漢來漢現はこの漢は。混沌よりこのかた。盤古よりのち。三才五才の現成せるといひきたれるに。いま雪峰の道には。古鏡の功德の漢現せり。いまの漢は漢にあらさるかゆゑに。すなはち漢現なり。いま雪峰道の胡漢俱隱。さらにいふへし。鏡也自隱なるへし。玄沙道の百雜碎は。道也須是怎麼道なりとも。比來責爾還吾碎片來。如何還我明鏡來なり。』
 黃帝のとき十二面の鏡あり。家訓にいはく天授なり。また廣成子の崆峒山にして與授せりけるともいふ。その十二面のもちゐる儀は。十二時に。時時に一面をもちゐる。また十二月に。毎月毎面にもちゐ

る。十二年に。年年面にもちゐる。いはく鏡は。廣成子の經典なり。黃帝に傳授するに。十二時等は鏡なり。これより照古照今するなり。十二時もし鏡にあらすよりはいかてか照古あらん。十二時もし鏡にあらすはいかてか照今あらん。いはゆる十二時は。十二面なり。十二面は十二鏡なり。古今は十二時の所使なり。この道理を指示するなり。これ俗の道取なりといへとも。漢現の十二時中なり。軒轅黃帝膝行進崆峒問道乎廣成子。于時廣成子曰。鏡是陰陽本。治身長久。自有三鏡。曰天。曰地。曰人。此鏡無視無聽。抱神以靜。形將自正。必靜必清。無勞汝形。無搖汝精。乃可以長生。むかしはこの三鏡をもちて。天下を治し大道を治す。この大道にあきらかなるを。天地の主とするなり。俗のいはく。太宗は人をかかみとせり。安危理亂これによりて照悉するといふ。三鏡のひとつをもちゐるなり。人を鏡とするとききては。博覽ならん人に古今を問取せば。聖賢の用舍をしりぬへしたとへは。魏微をえしかことく。房玄齡をえしかことしと。おもふ。これをかくの

ことく會取するは太宗の人を鏡とすると道取する道理にはあらざるなり。人を鏡とすといふは鏡を鏡とするなり。自己を鏡とするなり。五行を鏡とするなり。五常を鏡とするなり。人物の去來をみるに來無迹去無方を人鏡の道理といふ。賢不肖の萬般なる天象に相似なり。まことに經緯なるへし。人而鏡而日月面なり。五嶽の精。および四瀆の精。世をへて四海をすます。これ鏡の慣習なり。人物をあきらめて經緯をはかるを太宗の道といふなり。博覽人をいふにあらざるなり。日本國自神代有三鏡璽之與劔而共傳來至今。一枚在伊勢太神宮。一枚在紀伊國日前社。一枚在內裏內侍所。しかあればすなはち國家みな鏡を傳持することあきらかなり。鏡をえたるは國をえたるなり。人つたふらくはこの三枚の鏡は神位とおなしく傳來せり。天神より傳來せりと相傳す。しかあれば百練の銅も陰陽の化成なり。今來今現古來古現ならん。これ古今を照臨するは古鏡なるへし。雪峰の宗旨は新羅來新羅現。日本來日本現ともいふへし。天來

天現。人來人現ともいふへし。現來をかくのことくの參學すといふとも。この現いまわれらか本末をしれるにあらず。たた現を相見するのみなり。かならずしも來現をそれ知なり。それ會なりと學すへきにあらずるなり。いまいふ宗旨は胡來は胡現なりといふか。胡來は一條の胡來にて。胡現は一條の胡現なるへし。現のための來にあらず。古鏡たとひ古鏡なりとも。この參學あるへきなり。玄沙いててとふ。たちまちに明鏡來にあはんにかん。この道取。たつねあきらむへし。いまいふ明の道得は幾許なるへきぞ。いはくの道はその來はかならずしも胡漢にはあらずるを。これは明鏡なり。さらに胡漢と現成すへからずと道取するなり。明鏡來はたとひ明鏡來なりとも。二枚なるへからざるなり。たとひ二枚にあらずといふとも。古鏡はこれ古鏡なり。明鏡はこれ明鏡なり。古鏡あり明鏡ある證驗すなはち雪峰と玄沙と道取せり。これを佛道の性相とすへし。この玄沙の明鏡來の道話の七通八達なるとしるへし。八面玲瓏なることし

翻本と
有り

一本の時
上に来り
二の字あり

るへし。逢人には即出なるへし。出即には接渠なるへし。しかあれば
明鏡の明と古鏡の古と。同なりとやせん。異なりとやせん。明鏡に古
の道理ありやなしや。古鏡に明の道理ありやなしや。古鏡といふ言
によりて明なるへしと學することなかれ。宗旨は吾亦如是あり。汝
亦如是あり。西天諸祖亦如是の道理はやく練磨すへし。祖師の道得
に古鏡は磨ありと。道取す。明鏡もしかあるへきか。いかん。まさには
ろく諸佛諸祖の道にわたる參學あるへし。雪峰道の胡漢俱隱は。胡
も漢も。明鏡時は俱隱なりとなり。この俱隱の道理いかにいふそ。胡
漢すてに來現すること。古鏡を相聖礙せざるに。なにとしてか。いま
俱隱なる。古鏡はたとひ胡來胡現漢來漢現なりとも。明鏡來は。おの
つから明鏡來なるかゆゑに。古鏡現の胡漢は。俱隱なるなり。しかあ
れば雪峰道にも古鏡一面あり。明鏡一面あるなり。正當明鏡來のと
き。古鏡現の胡漢を聖礙すへからざる道理。あきらめ決定すへし。い
ま道取する古鏡の胡來胡現漢來漢現は。古鏡上に來現すといはず。

古鏡裏に來現すといはず。古鏡外に來現すといはず。古鏡と同參來
現すといはず。この道を聽取すへし。胡漢來現の時節は。古鏡の胡漢
を現來せしむるなり。胡漢俱隱ならん時節も。鏡は存取すへきと道
得せるは。現にくらく來におろそかなり。錯亂といふにおよはざる
ものなり。ときに玄沙いはく。某甲はすなはちしかあらず。雪峰いは
く。なんち作麼生。玄沙いはく。請すらくは和尚とふへし。いま玄沙の
いふ請和尚問のことば。いたつらに蹉過すへからず。いはゆる和尚
問の來なる和尚問の請なる。父子の投機にあらずは。爲甚如此なり。
すてに請和尚問ならん時節は。恁麼人さためて問處を若會すへし。
すてに問處の霹靂するには。無迴避處なり。雪峰いはく。忽遇明鏡來
時如何。この問處は。父子ともに參究する一條の古鏡なり。玄沙いは
く。百雜碎。この道取は。百千萬に雜碎するとなり。いはゆる忽遇明鏡
來時は。百雜碎なり。百雜碎を參得せんは。明鏡なるへし。明鏡を道得
ならしむるに。百雜碎なるへきかゆゑに。雜碎のかかれるところ明

鏡なり。さきに未雜碎なるときあり。のちにさらに不雜碎ならん時節を管見することなかれ。たた百雜碎なり。百雜碎の對面は孤峻の一なり。しかあるにいまいふ百雜碎は古鏡を道取するか明鏡を道取するか。要請一轉語なるへし。また古鏡を道取するにあらす。明鏡を道取するにあらす。古鏡明鏡はたとひ問來得なりといへとも。玄沙の道取を擬議するとき。沙磔牆壁のみ現前せる舌端となりて。百雜碎なりぬへきか。碎來の形段作麼生。萬古碧潭空界月。雪峰眞覺大師と三聖院慧然禪師と行次に。ひとむれの獼猴をみる。ちなみに雪峰いはく。この獼猴おのおの一面の古鏡を背せり。この語よくよく參學すへし。獼猴といふはさるなり。いかならんか。雪峰のみる獼猴。かくのことく問取して。さらに功夫すへし。經劫をかへりみることをなかれ。おのおの一面の古鏡を背せりとは。古鏡たとひ諸佛祖面なりとも。古鏡は向上にも古鏡なり。獼猴おのおの面に背せりといふは。面面に大面小面あらす。一面古鏡なり。背すとい

ふは。たとへは繪像の佛のうらをおしつくるを背すとはいふなり。獼猴の背を背するに。古鏡にて背するなり。使得什麼糊來。こころみにいはばさるのうらは古鏡にて背すへし。古鏡のうらは獼猴にて背するか。古鏡のうら古鏡にて背す。さるのうらさるにて背す。各背一面のことば。虛設なるへからす。道得是の道得なり。しかあれは獼猴か。古鏡か。畢竟作麼生道。われらすてに獼猴か。獼猴にあらさるか。たれにか問取せん。自己の獼猴にある。自知にあらす。佗知にあらす。自己の自己にある。摸索およはず。三聖いはく。歷劫無名なり。なにゆゑにかあらはして古鏡とせん。これは三聖の古鏡を證明せる一面一枚なり。歷劫といふは。一心一念未萌以前なり。劫裏の不出頭なり。無名といふは。歷劫の日面月面古鏡面なり。明鏡面なり。無名眞箇に無名ならんには。歷劫いまた歷劫にあらす。歷劫すてに歷劫にあらすは。三聖の道得これ道得にあらさるへし。しかあれとも一念未萌以前といふは。今日なり。今日を蹉過せしめず。練磨すへきな

りまことに歴劫無名。この名たかくきこゆ。なにをあらはしてか古鏡とする。龍頭蛇尾。このとき三聖にむかいて雪峰いふへし古鏡古鏡と。雪峰恁麼いはす。さらに瑕生也といふは。きすいてきぬるとなり。いかてか古鏡に瑕生也ならんとおほゆれとも。古鏡の瑕生也は。歴劫無名といふをきすとせるなるへし。古鏡の瑕生也は。全古鏡なり。三聖いまた古鏡の瑕生也の窟をいてさりけるゆゑに。道來せる參究は。一任に古鏡瑕なり。しかあれば古鏡にも瑕生なり。瑕生なるも古鏡なりと參學する。これ古鏡を參學するなり。三聖いはく。有什麼死急話頭也。不識いはく。の宗旨は。なにとしてか死急なる。いはゆるの死急は。今日か明日か自己か。佗門か。盡十方界か。大唐國裏か。審細に功夫參學すへきなり。話頭也。不識は話といふは。道來せる話あり。未道得の話あり。すてに道了也の話あり。いまは話頭なる道理現成するなり。たとへは話頭も大地有情同時成道しきたれるか。さらに再全の錦にはあらざるなり。かるかゆゑに不識なり。對朕者不識

なり。對面不相識なり。話頭はなきにあらす。祇是不識なり。不識は條條の赤心なり。さらにまた明明の不見なり。雪峰いはく。老僧罪過。いはゆるはあしくいひにけるといふにも。かくいふこともあれとも。しかはこころうまじ。老僧といふことは。屋裏の主人翁なり。いはゆる餘事を參學せず。ひとへに老僧を參學するなり。千變萬化あれとも。神頭鬼面あれとも。參學は唯老僧一著なり。佛來祖來。一念萬年あれとも。參學は唯老僧一著なり。罪過は住持事繁なり。おもへはそれ雪峰は徳山の一角なり。三聖は臨濟の神足なり。兩位の尊宿おなし。く系譜いやしからす。青原の遠孫なり。南嶽の遠派なり。古鏡を住持しきたれる。それかくのことし。晚進の龜鏡なるへし。

雪峰示衆云。世界闊一丈。古鏡闊一丈。世界闊一尺。古鏡闊一尺。時玄沙指火爐云。且道火爐闊多少。雪峰云。似古鏡闊。玄沙云。老和尚脚跟未點地在。一丈これを世界といふ。世界はこれ一丈なり。一尺これを世界とす。世界これ一尺なり。而今の一丈をいふ。而今の一尺をいふ。さ

らにことなる尺丈にはあらざるなり。この因縁を參學するに。世界のひろさはよのつねにおもはくは無量無邊の三千大千世界。および無盡法界といふも。たた少量の自己にして。しはらく隣里の彼方をさすかことし。この世界を拈して。一丈とするなり。このゆゑに雪峰いはく。古鏡關一丈。世界關一丈。この一丈を學せんには。世界關の一端を見取すへし。また古鏡の道を聞取するにも。一枚の薄氷の見をなす。しかにはあらず。一丈の關は世界の關一丈に同參なりとも。形與かならずしも世界の無端に齊肩なりや。同參なりやと功夫すへし。古鏡はさらに一顆珠のことくにあらず。明味を見解することなかれ。方圓を見取することなかれ。盡十方界。たとひ一顆明珠なりとも。古鏡にひとしかるへきにあらず。しかあれは古鏡は胡漢の來現にかかはれず。縦横の玲瓏に條條なり。多にあらず。大にあらず。關はその量を擧するなり。廣をいはんとはあらず。關といふはよのつねの二寸三寸といふ。七箇八箇とかそふるかことし。佛道の算數

には大悟不悟と算數するに。二兩三兩をあきらめ。佛佛祖祖と算數するに。五枚十枚を見成す。一丈は古鏡關なり。古鏡關は一枚なり。玄沙のいふ火爐關多少。かくれざる道得なり。千古萬古にこれを參學すへし。いま火爐をみるたれ人となりてかこれをみる。火爐をみるに七尺にあらず。八尺にあらず。これは動執の時節話にあらず。新條特地の現成なり。たとへは。是什麼物。恁麼來なり。關多少の言きたりぬれは。向來の多少は。多少にあらず。さるへし。當處解脫の道理うたかは。さりぬへし。火爐の諸相諸量にあらず。宗旨は。玄沙の道をきくへし。現前の一團子。いたつらに落地せしむることなかれ。打破すへし。これ功夫なり。雪峰いはく。如古鏡關。この道取。しつかに照顧すへし。火爐關一丈といふへきにあらず。されはかくのことく道取するなり。一丈といはんは。道得是にて。如古鏡關は。道不是なるにあらず。如古鏡關の行履をかかみるへし。おほく人のおもはくは。火爐關一丈といはざるを。道不是とおもへり。關の獨立をも功夫すへし。古鏡の

清本正
上脚本
と脚
四と
り字は
有の眼

一片をも鑑照すへし。如如の行李をも蹉過せしめさるへし。動容揚古路。不墮悄然機なるへし。玄沙いはく。老漢脚跟未點地在。いはく。のころは。老漢といひ。老和尚といへとも。かならず雪峰にあらず。雪峰は老漢なるへきかゆ系に。脚跟といふはいつれのところそと問取すへきなり。脚跟といふはなにをいふそと參究すへし。參究すへしといふは。正法眼藏をいふか。虚空をいふか。盡地をいふか。命脈をいふか。幾箇あるものそ。一箇あるか。半箇あるか。百千萬箇あるか。恁麼勤學すへきなり。未點地在は地といふは。是什麼物なるそ。いまの大地といふは。一類の所見に準して。しはらく地といふ。さらに諸類あるひは不思議解脫法門とみるあり。諸佛諸行道とみる一類あり。しかあれは脚跟の點すへき地は。なにものか地とせる。地は實有なるか。實無なるか。またおほよそ地といふものは。大道のなかに寸許もなかるへきか。問來問去すへし。道佗道已すへし。脚跟は點地也。是なる。不點地也。是なる。作麼生なればか。未點地在と道取する。大地

無寸土の時節は點地也未。未點地也未なるへし。しかあれは老漢脚跟未點地在は老漢の消息なり。脚跟の造次なり。

婺州金華山國泰院弘瑠禪師。ちなみに僧とふ。古鏡未磨時如何。師云。古鏡。僧曰。磨後如何。師云。古鏡。しるへし。いまいふ古鏡は。磨時あり。未磨時あり。磨後あれとも。一面に古鏡なり。しかあれは磨時は古鏡の全古鏡を磨するなり。古鏡にあらさる水銀等を和して磨するにあらず。磨自自磨にあらされとも。磨古鏡なり。未磨時は古鏡くらきにあらず。くろしと道取すれとも。くらきにあらさるへし。活古鏡なり。おほよそ鏡を磨して鏡となす。甞を磨して鏡となす。塼を磨して塼となす。鏡を磨して塼となす。磨してなささるあり。なることあれとも磨することえさるあり。おなしく佛祖の家業なり。

江西馬祖むかし南嶽に參學せしに。南嶽かつて心印を馬祖に密受せしむ。磨塼のはしめのはしめなり。馬祖傳法院に住して。よのつねに坐禪することわつかに二十餘歳なり。雨夜の艸菴おもひやるへ

し。封雪の寒牀におこたるといはず。南嶽あるとき馬祖の菴にいたるに馬祖侍立す。南嶽とふ。なんち近日作什麼。馬祖いはく。近日道一。祇管打坐するのみなり。南嶽いはく。坐禪なにかをか圖する。馬祖いはく。坐禪は作佛を圖す。南嶽すなはち一片の磚をもちて。馬祖の菴のほとりの石にあてて磨す。馬祖これをみて。すなはちとふ。和尚作什麼。南嶽いはく。磨磚。馬祖いはく。磨磚用作什麼。南嶽いはく。磨作鏡。馬祖いはく。磨磚豈得成鏡耶。南嶽いはく。坐禪豈得作佛耶。この一段の大事。むかしより數百歳のあひた。人おほくおもへらくは。南嶽ひとへに馬祖を勸勵せしむると。いまたかならずしもしかあらず。大聖の行履はるかに凡境を出離せるのみなり。大聖もし磨磚の法なくはいかてか爲人の方便あらん。爲人のちからは佛祖の骨髓なり。たとひ搆得すとも。なほこれ家具なり。家具調度にあらずれば。佛家につたはれざるなり。いはんや。すてに馬祖を接することすみやかなり。ばかりしりぬ。佛祖正傳の功德。これ直指なることをまこ

とにしりぬ。磨磚の鏡となるとき。馬祖作佛す。馬祖作佛するとき。馬祖すみやかに馬祖となる。馬祖の馬祖となるとき。坐禪すみやかに坐禪となる。かるかゆゑに磚を磨して鏡となすこと。古佛の骨髓に住持せられきたる。しかあれば磚のなれる古鏡あり。この鏡を磨しきたるとき。從來も未染汗なるなり。磚のちりあるにはあらず。たたた磚なるを磨磚するなり。このところに作鏡の功德の現成する。すなはち佛祖の功夫。磨磚もし作鏡せずは。磨鏡も作鏡すへからざるなり。たれかはかることあらん。この作に作佛あり。作鏡あることを。また疑著すらくは古鏡を磨するとき。あやまりて磚と磨しなすことのあるへきか。磨時の消息は。餘時のはかるところにあらず。しかあれとも。南嶽の道まさに道得を道得すへきか。ゆゑに畢竟し。すなはちこれ磨磚作鏡なるへし。いまの人もいまの磚を拈し磨して。こころみるへし。さためて鏡とならん。磚もし鏡とならずは。人ほとけになるへからず。磚を泥團なりと。かるしめは。人も泥團なりと

かるからん。人もし心あらは。博も心あるへきなり。たれかしらん。博來博現の鏡子あることを。またたれかしらん。鏡來鏡現の鏡子あることを。

正法眼藏古鏡

仁治二年辛丑九月九日在觀音導利興聖審林寺示衆

正法眼藏看經

阿耨多羅三藐三菩提の修證あるひは知識をもちあるひは經卷をもちある。知識といふは。全自己の佛祖なり。經卷といふは。全自己の經卷なり。全佛祖の自己。全經卷の自己なるかゆゑに。かくのことがなり。自己と稱すといへとも。我爾の拘牽にあらず。これ活眼晴なり。活拳頭なり。しかあれとも。念經看經。誦經書經。受經持經あり。ともに佛祖の修證なり。しかあるに佛經にあふこと。たやすきにあらず。於無量國中。乃至名字不可得聞なり。於佛祖中。乃至名字不可得聞なり。於命脈中。乃至名字不可得聞なり。佛祖にあらされは。經卷を見聞。讀誦解義せず。佛祖參學より。かつかつ經卷を參學するなり。このとき耳處。眼處。舌處。鼻處。身心塵處。到處聞處。話處の聞持。受說經等の現成あり。爲求名聞。故說外道論議の輩。佛經を修行すへからず。そのゆゑは。經卷は。若樹若石の傳持あり。若田若里の流布あり。塵刹の演出あり。虚空の開講あり。

修證
清修
證修
本證
修證
に作
る

福本
祖の二
字無し

藥山・曇祖・弘道大師。久不陞堂。院主白云。大衆久思和尚慈誨。山云。打鐘著。院主打鐘。大衆才集。山陞堂。良久。便下座歸。方丈。院主隨後白云。和尚適來聽許。爲衆說法。如何不垂一言。山云。經有經師。論有論師。爭怪得老僧。曇祖の慈誨するところは。拳頭有拳頭師。眼睛有眼睛師なり。しかあれとも。しはらく曇祖に拜問すへし。争怪得和尚はなきにあらす。いふかし和尚は何師。

韶州曹谿山大鑑高祖會下。誦法華經僧。法達來參。高祖爲法達說偈云。心迷法華轉。心悟轉法華。誦久不明己。與義作讎家。無念念即正。有念念成邪。有無俱不計。長御白牛車。しかあれは心迷は法華に轉せられ。心悟は法華を轉す。さらに迷悟を跳出するときは。法華の法華を轉するなり。法達まさには偈をききて。踊躍歡喜。以偈讚曰。經誦三千部。曹谿一句亡。未明出世旨。寧歇累生狂。羊鹿牛權設。初中後善揚。誰知火宅內。元是法中王。その時高祖曰。汝今後方可名爲念經僧也。しるへし佛道に念經僧あることを。曹谿古佛の直指なり。この念經僧の念は有

福本
字無し

度清
土に作

力福
身に作

念無念等にあらす。有無俱不計なり。たたそれ從劫至劫。手不釋卷。從晝至夜。無不念時なるのみなり。從經至經。無不經なるのみなり。

第二十七祖東印度般若多羅尊者。因東印度國王。請尊者齋次。國王乃問。諸人盡轉經。唯尊者爲甚不轉。祖曰。貧道出息不隨衆緣。入息不居蘊界。常轉如是經。百千萬億卷。非但一卷兩卷。般若多羅尊者は天竺國東印度の種艸なり。迦葉尊者より第二十七世の正嫡なり。佛家の調度ことごとく正傳せり。頂顛。眼睛。拳頭。鼻孔。拄杖。鉢盂。衣法。骨髓等を住持せり。われらか曇祖なり。われらは雲孫なり。いま尊者の渾力道は。出息の衆緣に不隨なるのみならず。衆緣も出息に不隨なり。衆緣たとひ頂顛。眼睛にてもあれ。衆緣たとひ渾身にてもあれ。衆緣たとひ渾心にてもあれ。擔來。擔去。又擔來。たた不隨衆緣なるのみなり。不隨は渾隨なり。このゆゑに築著。磕著なり。出息これ衆緣なりといへとも。不隨衆緣なり。無量劫來。いまた出息入息の消息をしらされとも。而今まさにはしめてしるへき時節。到來なるかゆゑに。不居蘊

清本の一
卷の二
字の無

界をきく。不隨衆縁をきく。衆縁はしめて入息等を參究する時節なり。この時節。かつてさきにあらず。さらにのちにあるへからず。たた而今のみにあるなり。蘊界といふは。五蘊なり。いはゆる色受想行識をいふ。この五蘊に不居なるは。五蘊いまた到來せざる世界なるかゆゑなり。この關楨子を拈せるゆゑに。所轉の經。た一卷兩卷にあらず。常轉百千萬億卷なり。百千萬億卷は。しはらく多の一端をあくといへとも。多の量のみにあらず。一息出の不居蘊界を。百千萬億卷の量とせり。しかあれとも。有漏無漏智の所測にあらず。有漏無漏法の界にあらず。このゆゑに。有智の知の測量にあらず。有知の智の卜度にあらず。無智の知の商量にあらず。無知の智の所到にあらず。佛佛祖祖の修證。皮肉骨髓。眼睛。拳頭。頂顛。鼻孔。拄杖。拂子。踔跳造次なり。

趙州觀音院眞際大師因有婆子。施淨財請大師轉大藏經。師下禪牀。遶一布。向使者云。轉藏已畢。使者回舉似婆子。婆子曰。比來請轉一藏。如何

清本の
字の上
無の未

和尚只轉半藏。あきらかにしりぬ。轉一藏半藏は。婆子經三卷なり。轉藏已畢は。趙州經一藏なり。おほよそ轉大藏經のていたらくは。禪牀をめぐる趙州あり。禪牀ありて趙州をめぐる。趙州をめぐる趙州あり。禪牀をめぐる禪牀あり。しかあれとも。一切の轉藏は。遶禪牀のみにあらず。禪牀遶のみにあらず。

益州大隋山神照大師。法諱法眞。嗣長慶寺大安禪師。因有婆子。施淨財請師轉大藏經。師下禪牀。一布向使者曰。轉大藏經已畢。使者歸舉似婆子。婆子云。比來請轉一藏。如何。和尚只轉半藏。いま大隋の禪牀をめぐると學することなかれ。禪牀の大隋をめぐると學することなかれ。拳頭眼睛の團圓のみにあらず。作一圓相せる打一圓相なり。しかあれども。婆子それ有限なりや。未具眼なりや。只轉半藏。たとひ道取を拳頭より正傳すとも。婆子さらにいふへし。比來請轉大藏經。如何。和尚只管弄精魂。あやまりてもかくのことく道取せましかは。具眼睛の婆子なるへし。

高祖洞山悟本大師。因有官人設齋施淨財。請師看轉大藏經。大師下禪
 牀。向官人揖。官人揖。大師引官人俱遶禪牀一匝。向官人揖。良久。向官人
 云。會麼。官人云。不會。大師云。我與汝看轉大藏經。如何不會。それ我與
 汝看轉大藏經。あきらかなり。遶禪牀を看轉大藏經と學するにあら
 ず。看轉大藏經を遶禪牀と會せざるなり。しかありといへとも高祖
 の慈誨を聽取すへし。この因縁。先師古佛。天童山に住せりしとき。高
 麗國の施主。入山施財。大衆看經。請先師陞座のとき。擧するところを
 り。擧しをはりて。先師すなはち拂子をもて。おほきに圓相をつくる
 こと一市して。いはく。天童今日與汝看轉大藏經。使擲下拂子。下座。い
 ま先師の道處を看轉すへし。餘者に比準すへからず。しかありとい
 ふとも。看轉大藏經には。一隻眼をもちゐるとやせん。半隻眼をもち
 ゐるとやせん。高祖の道處と先師の道處と。用眼睛。用舌頭。いくはく
 をかもちゐきたれる。究辨看。

爰祖藥山弘道大師。尋常不許人看經。一日將經自看。因僧問。和尚尋常

過下福の
 なるすに
 本するに
 作するに

不許人看經。爲甚麼却自看。師云。我只要遮眼。僧云。某甲學和尚得麼。師
 云。爾若看牛皮也須穿。いま我要遮眼の道は遮眼の自道處なり。遮
 眼は。打失眼睛なり。打失經なり。渾眼遮なり。渾遮眼なり。遮眼は。遮中
 開眼なり。遮裏活眼なり。眼裏活遮なり。眼皮上更添一枚皮なり。遮裏
 拈眼なり。眼自拈遮なり。しかあれば。眼睛經にあらされは。遮眼の功
 徳。いまたあらざるなり。牛皮也須穿は。全牛皮なり。全皮牛なり。拈牛
 作皮なり。このゆゑに。皮肉骨髓頭角鼻孔を。牛牯の活計とせり。學和
 尚のとき。牛爲眼睛なるを遮眼とす。眼睛爲牛なり。
 治父道川禪師云。億千供佛。福無邊。爭似常將古教看。白紙上邊書墨字。
 請君開眼目前觀。しるへし古佛を供すると古教をみると。福德齊
 肩なるへし。福德超過なるへし。古教といふは。白紙の上に墨字を書
 せる。たれかこれを古教としらん。當恁麼の道理を參究すへし。
 雲居山弘覺大師。因有一僧在房內念經。大師隔窻問云。閻梨念底。是什
 麼經。僧對曰。維摩經。師云。不問爾。維摩經。念底是什麼經。此僧從此得入。

大師道の念底是什麼經は。一條の念底年代渙遠なり。不欲舉似於念なり。路にしては死蛇にあふ。このゆゑに什麼經の問著現成せり。人にあふては錯舉せず。このゆゑに維摩經なり。おほよそ看經は。盡佛祖を把拈しあつめて。眼睛として看經するなり。正當恁麼時。たちまちに佛祖作佛し說法し。說佛し佛作するなり。この看經の時節にあらされは。佛祖の頂額面目いまたあらざるなり。現在佛祖の會に。看經の儀則。それ多般あり。いはゆる施主入山請大衆看經。あるひは常轉請僧看經。あるひは僧衆自發心看經等なり。このほか大衆爲亡僧看經あり。施主人山請僧看經は。當日の粥時より。堂司あらかしめ看經牌を僧堂前およひ諸寮にかく。粥罷に拜席を聖僧前にしく。ときいたりて。僧堂前鐘を三會うつ。あるひは一會うつ。住持人の指揮にしたかふなり。鐘聲罷に首座大衆搭袈裟入雲堂。就被位正面而坐。つきに童行をして。きに住持人入堂し。向聖僧問訊燒香罷。依位而坐。つきに童行をして。經を行せしむ。この經さきより庫院にととのへ安排しまうけて。と

きいたりて供達するなり。經は。あるひは經函なから行し。あるひは盤子に安して行す。大衆すてに經を請してすなはちひらきよむ。このとき知客いまし施主をひきて雲堂にいる。施主まさに雲堂前にて手爐をとりてささけて入堂す。手爐は院門の公界にあり。あらかしめ裝香して行者をして雲堂前にまうけて。施主まさに入堂せんとするとき。めしによりて施主にわたす。手爐をめすことは。知客これをめすなり。入堂するときは。知客はさき施主はのち雲堂の前門の南頬よりいる。施主聖僧前にいたりて。燒一片香拜三拜あり。拜のあひた手爐をもちながら拜するなり。拜のあひた知客は拜席のきたに。おもてを南にしてすこしき施主にむかひて。叉手してたつ。施主の拜をはりて。施主みきに轉身して住持人にむかひて手爐をささけて曲躬し掛す。住持人は椅子にゐながら經をささけて合掌して掛をうく。施主つきに北にむかひて掛す。掛をはりて首座のまへより巡堂す。巡堂のあひた知客さきにひけり。巡堂一市して。聖僧前

にいたりて。なほ聖僧にむかひて。手爐をささけて揖す。このとき知客は雲堂の門限のうちに。拜席のみなみに面を北にして。又手して。たてり。施主揖聖僧をはりて。知客にしたかひて。雲堂前にいて。巡堂前一市して。なほ雲堂内にいりて。聖僧にむかひて。拜三拜す。拜をはりて。交椅につきて。看經を證明す。交椅は。聖僧のひたりの柱のほとりに南にむかひて。これをたつ。あるひは南柱のほとりに北にむかひて。たつ。施主すてに座につきぬれば。知客すへからく。施主にむかひて。揖してのちくらむにつくへし。あるひは施主巡堂のあひた。梵音あり。梵音の座あるひは聖僧のみき。あるひは聖僧のひたり。便宜にしたかふ。手爐には沈香棧香等の名香をさしはさみたくなり。この香は施主みつから辨備するなり。施主巡堂のときは。衆僧合掌す。つきに看經錢を俵す。錢の多少は施主のころにしたかふ。あるひは綿あるひは扇等の物子。これを俵す。施主みつから俵す。あるひは知事。これを俵す。あるひは行者。これを俵す。俵する法は。僧のまへ

にこれをおくなり。僧の手にいれず。衆僧は。俵錢をまへに俵すると。きかのおの合掌してうくるなり。俵錢あるひは當日の齋時に。これを俵す。もし齋時に俵するか。ときは。首座施食のち。さらに打椎一下して。首座施財す。施主回向の旨趣を紙片にかきて。聖僧のみき。のはしらに貼せり。雲堂裏看經のとき。揚聲してよます。低聲によむ。あるひは經卷をひらきて。文字をみるのみなり。句讀におよはす。看經するのみなり。かくのことく。の看經おほくは。金剛般若經。法華經。普門品。安樂行品。金光明經等をいく百千卷となく。常住にまうけかけり。毎僧一卷を行するなり。看經をはりぬれば。もとの盤もしは函をもちて。座のまへをすくれは。大衆おのの經を安す。とるとき。おくと。きとも。に。合掌するなり。とるときは。まつ合掌して。のちにとる。おくと。きは。まつ經を安して。のちに合掌す。そののちおのの合掌して。低聲に回向するなり。もし常住公界の看經には。都鑑寺僧。燒香。禮拜。巡堂。俵錢。みな施主のことし。手爐をささく。ことも。施主のこ

一本が
上し字
無し

としもし衆僧のなかに施主となりて。大衆の看經を請するも俗施主のことし。焼香禮拜巡堂。俵錢等あり。知客これをひくこと。俗施主のことくなるへし。聖節の看經といふことあり。しかれば今上の聖誕の假令もし正月十五日なれば。まつ十二月十五日より聖節の看經はしまる。今日上堂なし。佛殿の釋迦佛のまへに連牀を二行にし。いはゆる東西にあひむかへて。おのおの南北行にし。く東西牀のまへに臺盤をたつ。そのうへに經を安す。金剛般若經。仁王經。法華經。最勝王經。金光明經等なり。堂裏の僧を一日に幾僧と請して。齋前に點心をおこなふ。あるひは麪一椀。羹一杯を毎僧に行す。あるひは饅頭六七箇。羹一分。毎僧に行するなり。饅頭これと椀にもれり。はしをそへたり。かひをそへす。おこなふときは。看經の座につきなから座をうこかすして。おこなふ。點心は。經を安せる臺盤に安排せり。さらに棹子をきたせることなし。行點心のあひた。經は臺盤に安せり。點心おこなひをはりぬれば。僧おのおの座をたちて。漱口して。かへり

牌牌
一本
に作
る

て座につく。すなはち看經す。粥罷より齋時にいたるまで看經す。齋時三下鼓響に座をたつ。今日の看經は。齋時をかきりとせり。はしむる日より。建祝聖道場の牌を佛殿の正面の東の簷頭にかく。黄牌なり。また佛殿のうちの正面の東の柱に祝聖の旨趣を障子牌にかきてかく。これ黄牌なり。住持人の名字は。紅紙あるひは白紙にかく。その二字を小片紙にかきて。牌面の年月日の下頭に貼せり。かくのこくとく看經して。その御降誕の日にいたるに。住持人上堂し。祝聖するなり。これ古來の例なり。いまにふりさるところなり。また僧のみつから發心して看經するあり。寺院もとより公界の看經堂あり。かの堂につきて看經するなり。その儀。いま清規のことし。
高祖藥山弘道大師問高沙彌云。汝從看經得從請益得。高沙彌云。不從看經得。亦不從請益得。師云。大有人不看經。不請益。爲什麼不得。高沙彌云。不道。佗無只是佗不承當。佛祖の屋裏に承當あり。不承當ありといへとも。看經請益は家常の調度なり。

正法眼藏看經

于時仁治二年辛丑秋九月十五日在雍州宇治縣興聖塞林寺示衆

正法眼藏佛性

釋迦牟尼佛言。一切衆生。悉有佛性。如來常住。無有變易。これわれら
 か大師釋尊の師子吼の轉法輪なりといへとも。一切諸佛。一切祖師
 の頂額眼睛なり。參學しきたること。すてに二千一百九十年當日本に
治二年辛
 丑正嫡わつかに五十代至先師天
童淨和尚西天二十八代。代代住持しきたり。東
 地二十三世。世世住持しきたる。十方の佛祖ともに住持せり。世尊道
 の一切衆生。悉有佛性は。その宗旨いかん。是什麼物。恁麼來の道轉法
 輪なり。あるひは衆生といひ。有情といひ。群生といひ。群類といふは。
 衆生なり。群有なり。すなはち悉有は佛性なり。悉有の一。悉を衆生と
 いふ。正當恁麼時は。衆生の内外。すなはち佛性の悉有なり。單傳する
 皮肉骨髓のみにあらず。汝得吾皮肉骨髓なるかゆゑに。しるへしい
 ま佛性に悉有せらるる有は。有無の有にあらず。悉有は佛語なり。佛
 舌なり。佛祖眼睛なり。衲僧鼻孔なり。悉有の言。さらに始有にあらず。
 本有にあらず。妙有等にあらず。いはんや縁有妄有ならんや。心境性

諸本衆
生なり
の上悉
の言五
有の五
一字有
一分一
るに作

清本生上も
生上も
し字有
り力上
字の福
有下本

忙忙一
本に忙
茫に茫
るに作

相等にかかはれず。しかあれはすなはち衆生悉有の依正。しかしなから業増上力にあらず。妄縁起にあらず。法爾にあらず。神通修證にあらず。衆生の悉有。それ業増上。およひ縁起法爾等ならんには。諸聖の證道。およひ諸佛の菩提。佛祖の眼睛も。業増上力。およひ縁起法爾なるへし。しかあらざるなり。盡界はすへて客塵なし。直下さらに第二人あらず。直截根源人未識。忙忙業識幾時休なるかゆゑに。妄縁起の有にあらず。徧界不曾藏のゆゑに。徧界不曾藏といふは。かならずしも満界是有といふにあらず。徧界我有は。外道の邪見なり。本有の有にあらず。亙古亙今のゆゑに。始起の有にあらず。不受一塵のゆゑに。條條の有にあらず。合取のゆゑに。無始有の有にあらず。是什麼物。恁麼來のゆゑに。始起有の有にあらず。平常心是道のゆゑに。まさにしるへし。悉有中に衆生快便難逢なり。悉有を會取することかくのことくなれば。悉有それ透體脱落なり。佛性の言をききて。學者おほく先尼外道の我のことく邪計せり。それ人にあはず。自己に

清本唐
字下唐
有下唐
おもへ
るもへ
る清本
るに作

あはず。師をみざるゆゑなり。いたつらに風火の動著する心意識を佛性の覺知覺了とおもへり。たれかいふし。佛性に覺知覺了ありと。覺者知者は。たとひ諸佛なりとも。佛性は覺知覺了にあらず。なり。いはんや。諸佛を覺者知者といふ。覺知は。なんたちか云云の邪解を覺知とせず。風火の動靜を覺知とするにあらず。たに一兩の佛而祖而。これ覺知なり。往往に古老先德あるひは。西天に往還し。あるひは人天を化導する。漢より宋朝にいたるまで。稻麻竹葦のことくなる。おほく風火の動著を佛性の知覺とおもへる。あはれむへし。學道轉疎なるによりて。いまの失誤あり。いま佛道の晚學初心しかあるへからず。たとひ覺知を學習すとも。覺知は動著にあらず。なり。たとひ動著を學習すとも。動著は恁麼にあらず。なり。もし眞箇の動著を會取することあらば。眞箇の覺知覺了を會取すへきなり。佛之與性。達彼達此なり。佛性かならず。悉有なり。悉有は佛性なるかゆゑに。悉有は百雜碎にあらず。悉有は一條鐵にあらず。拈拳頭なるかゆゑ

に大小にあらず。すてに佛性といふ。諸聖と齊肩なるへからず。佛性と齊肩すへからず。ある一類おもはく。佛性は草木の種子のとし。法雨のうるほひしきりにうるほすとき。芽莖生長し。枝葉華果もすことあり。果實さらに種子をはらめり。かくのことく見解する。凡夫の情量なり。たとひかくのことく見解すとも。種子およひ華果ともに條條の赤心なりと參究すへし。果裏に種子あり。種子みえされとも。根莖等を生す。あつめされとも。そこはくの枝條大圍となれる。内外の論にあらず。古今の時に不空なり。しかあればたとひ凡夫の見解に一任すとも。根莖枝葉みな同生し。同死し。同悉有なる佛性なるへし。佛言。欲知佛性義。當觀時節因緣。時節若至。佛性現前。いま佛性義をしらんとおもははといふは。たた知のみにあらず。行せんとおもはは。證せんとおもはは。とかんとおもはは。とも。わすれんとおもはは。ともいふなり。かの説行。證忘。錯不錯等も。しかしなから時節の因緣なり。時節の因緣を觀するには。時節の因緣をもて觀するなり。拂子

あら
する
ある
本
は
清
る
ら
る
る
作
る

拄杖等をもて相觀するなり。さらに有漏智。無漏智。本覺。始覺。無覺。正覺等の智をもちるには。觀せられざるなり。當觀といふは。能觀所觀にかかはれず。正觀邪觀等に準すへきにあらず。これ當觀なり。當觀なるかゆゑに不自觀なり。不佗觀なり。時節因緣。淨なり。超越因緣なり。佛性淨なり。脱體佛性なり。佛佛淨なり。性性淨なり。時節若至の道を古今のやから。往往におもはく。佛性の現前する時節の向後にあらん。するをまつなりとおもへり。かくのことく修行しゆくところに自然に佛性現前の時節にあふ。時節いたらされは。參師問法するにも。辨道功夫するにも。現前せすといふ。恁麼見取して。いたつらに紅塵にかへり。むなしく雲漢をまもる。かくのことくのたくひ。おそらくは天然外道の流類なり。いはゆる欲知佛性義は。たとへは。當知佛性義といふなり。當觀時節因緣といふは。當知時節因緣といふなり。いはゆる佛性をしらんとおもはは。しるへし。時節因緣これなり。時節若至といふは。すてに時節いたれり。なにの疑著すへきとこ

るかあらんとなり。疑著時節さもあらはあれ。還我佛性來なり。しるへし時節若至は十二時中不空過なり。若至は既至といはんかことし。時節若至すれば佛性不至なり。しかあれはすなはち時節すてにいたればこれ佛性の現前なり。あるひは其理自彰なり。おほよそ時節の若至せざる時節いまたあらず。佛性の現前せざる佛性あらざるなり。

第十二祖馬鳴尊者第十三祖のために佛性海をとくにいはく。山河大地皆依建立。三昧六通由茲發現。しかあれはこの山河大地みな佛性海なり。皆依建立といふは。建立せる正當恁麼時。これ山河大地なり。すてに皆依建立といふ。しるへし佛性海のかたちはかくのことし。さらに内外中間にかかはるへきにあらず。恁麼ならば山河をみるは佛性をみるなり。佛性をみるは驢腮馬背をみるなり。皆依は全依なり。依全なりと會取し不會取するなり。三昧六通由茲發現。しるへし諸三昧の發現來現。おなしく皆依佛性なり。全六通の由茲不

福本清
下若の
有り待字

一者本
至其家
於父家
所乞命
出以宿
母以故
無難殊
捨爲色
子の弟
有十五
字二

由茲ともに皆依佛性なり。六神通はたた阿笈摩教にいふ六神通にあらず。六といふは前三三後三三を六神通波羅蜜といふ。しかあれは六神通は明明百艸頭明明佛祖意なりと參究することなかれ。六神通に滯累せしむといへとも。佛性海の朝宗に罣礙するものなり。五祖大滿禪師。蕪州黃梅人也。無父而生。童兒得道。乃栽松道者也。初在蕪州西山栽松。遇四祖出遊告道者。吾欲傳法與汝。汝已年邁。若汝再來。吾尚遲汝。師諾。遂往周氏家女托生。因拋濁港中。神物護持。七日不損。因收養矣。至七歲爲童子。於黃梅路上逢四祖大醫禪師。祖見師。雖是小兒。骨相奇秀。異乎常童。祖見問曰。汝何姓。師答曰。姓卽有。不是常姓。祖曰。是何姓。師答曰。是佛性。祖曰。汝無佛性。師答曰。佛性空故。所以言無。祖譏其法器。俾爲侍者。後付正法眼藏。居黃梅東山。大振玄風。しかあれはすなはち祖師の道取を參究するに。四祖いはく。汝何姓はその宗旨あり。むかしは何國人の人あり。何姓の姓あり。なんちは何姓と爲説するなり。たとへは吾亦如是。汝亦如是と道取するかことし。五祖いは

く、姓即有。不是常姓。いはゆるは有即姓は常姓にあらず。常姓は即有に不是なり。四祖いはく。是何姓は。何は是なり。是を何しきたれり。これ姓なり。何ならしむるは是のゆゑなり。是ならしむるは何の能なり。姓は是也何也なり。これを蓄湯にも點す。茶湯にも點す。家常の茶飯ともするなり。五祖いはく。是佛性。いはくの宗旨は。是は佛性なりとなり。何のゆゑに佛なるなり。是は何姓のみに究取しきたらんや。是すてに不是のとき佛性なり。しかあればすなはち。是は何なり佛なりといへとも。脱落しきたり透脱しきたるに。かならず姓なり。その姓すなはち周なり。しかあれとも父にうけす。祖にうけす。母氏に相似ならず。傍觀に齊肩ならんや。四祖いはく。汝無佛性。いはゆる道取は。汝はたれにあらず。汝に一任すれとも。無佛性なりと開演するなり。しるへし學すへし。いまはいかなる時節にして無佛性なるぞ。佛頭にして無佛性なるか。佛向上にして無佛性なるか。七道を逼塞することなかれ。八達を摸索することなかれ。無佛性は一時の三昧

なりと修習することもあり。佛性成佛のとき。無佛性なるか。佛性發心のとき。無佛性なるかと問取すへし。道取すへし。露柱をしても問取せしむへし。露柱にも問取すへし。佛性をしても問取せしむへし。しかあればすなはち。無佛性の道はるかに四祖の祖室よりきこゆるものなり。黃梅に見聞し。趙州に流通し。大滄に舉揚す。無佛性の道。かならず精進すへし。趙趙することなかれ。無佛性たとりぬへしといへとも。何なる標準あり。汝なる時節あり。是なる投機あり。周なる同姓あり。直趣なり。五祖いはく。佛性空故。所以言無。あきらかに道取す。空は無にあらず。佛性空を道取するに。半斤といはす。八兩といはす。無と言取するなり。空なるゆゑに空といはす。無なるゆゑに無といはす。佛性空なるゆゑに無といふ。しかあれば無の片片は空を道取する標榜なり。空は無を道取する力量なり。いはゆるの空は。色即是空の空にあらず。色即是空といふは。色を強爲して空とするにあらず。空をわかちて。色を作家せるにあらず。空是空の空なるへし。空

是空の空といふは空裏一片石なり。しかあればすなはち佛性無と佛性空と佛性有と。四祖五祖問取道取。

震旦第六祖曹谿山大鑑禪師そのかみ黃梅山に參せしはしめ。五祖とふ。なんちいつれのところよりかきたれる。六祖いはく。嶺南人なり。五祖いはく。きたりてなにことをかもとむる。六祖いはく。作佛をもとむ。五祖いはく。嶺南人無佛性。いかにしてか作佛せん。この嶺南人無佛性といふ。嶺南人は佛性なしといふにあらす。嶺南人は佛性ありといふにあらす。嶺南人無佛性となり。いかにしてか作佛せんといふは。いかなる作佛をか期するといふなり。おほよそ佛性の道理あきらむる先達すくなし。諸阿笈摩教およひ經論師のしるべきにあらす。佛祖の兒孫のみ單傳するなり。佛性の道理は佛性は成佛よりさきに具足せるにあらす。成佛よりのちに具足するなり。佛性かならず成佛と同參するなり。この道理よくよく參究功夫すへし。三二十年も功夫參學すへし。十聖三賢のあきらむるところにあ

らす。衆生有佛性衆生無佛性と道取する。この道理なり。成佛已來に具足する法なりと參學する正的なり。かくのことく學せざるは佛法にあらざるへし。かくのことく學せすは佛法あへて今日にいたるへからす。もしこの道理あきらめざるには成佛をあきらめず見聞せざるなり。このゆゑに。五祖は向佗道するに。嶺南人無佛性と爲道するなり。見佛聞法の最初に難得難聞なるは衆生無佛性なり。或從知識。或從經卷するに。きくことこのよるこふへきは衆生無佛性なり。一切衆生無佛性を見聞覺知に參飽せざるものは佛性いまた見聞覺知せざるなり。六祖もはら作佛をもとむるに。五祖よく六祖を作佛せしむるに。佗の道取なし。善巧なし。たた嶺南人無佛性といふしるへし。無佛性の道取聞取これ作佛の直道なりといふことをし。かあれば無佛性の正當恁麼時すなはち作佛なり。無佛性いまた見聞せず道取せざるは。いまた作佛せざるなり。六祖いはく。人有南北なりとも。佛性無南北なり。この道取を舉して。句裏を功夫すへし。南

北の言。まさに赤心に照顧すへし。六祖道得の句に宗旨あり。いはゆる人は作佛すとも佛性は作佛すへからすといふ。一隅の構得あり。六祖これをしるやいなや。四祖五祖の道取する無佛性の道得。はるかに罣礙の力量ある一隅をうけて。迦葉佛およひ釋迦牟尼佛等の諸佛は。作佛し轉法するに。悉有佛性と道取する力量あるなり。悉有の有なんそ無無の無に嗣法せざらん。しかあれば無佛性の語。はるかに四祖五祖の室よりきこゆるなり。このとき。六祖その人ならば。この無佛性の語を工夫すへきなり。有無の無はしはらくおく。いかならんかこれ佛性と問取すへし。なにものかこれ佛性とたつぬへし。いまの人も佛性ととききぬれば。さらにいかなるかこれ佛性と問取せず。佛性の有無等の義をいふかことし。これ倉卒なり。しかあれば諸無の無は。無佛性の無に學すへし。六祖の道取する人有南北佛性無南北の道。ひさしく再三撈摭すへし。まさに撈波子に力量あるへきなり。六祖の道取する人有南北佛性無南北の道。しつかに拈放

すへし。おろかなるやからおもはくは人間には質礙すれば南北あれとも佛性は虚融にして南北の論におよはすと。六祖は道取せりけるかと推度するは。無分の愚蒙なるへし。この邪解を抛却して。直須勤學すへし。

六祖示門人行昌云。無常者。即佛性也。有常者。即善惡一切諸法分別心也。いはゆる六祖道の無常は。外道二乗等の測度にあらず。二乗外道の鼻祖鼻末。それ無常なりといふとも。かれら窮盡すへからざるなり。しかあれば無常のみつから無常を説著行著證著せんは。みな無常なるへし。今以現自身得度者。即現自身而爲說法なり。これ佛性なり。さらに或現長法身。或現短法身なるへし。常聖これ無常なり。常凡これ無常なり。常凡聖ならんは。佛性なるへからず。小量の愚見なるへし。測度の管見なるへし。佛者小量身也。性者小量作也。このゆゑに六祖道取す無常者佛性也。常者未轉なり。未轉といふは。たとひ能斷と變すとも。たとひ所斷と化すれとも。かならずしも去來の蹤跡